53174
MA86

0055050000

0055050-000

３８９．７４－Ｍａ８６ウ

ミクロネシア民族誌

松岡静雄・著

岩波書店

昭和１８

AIE

~~115~~

116

内務省
18.3.-5
(普通出版)

389.74
MA86

松岡靜雄著

ミクロネシア民族誌

岩波書店刊行

960
135

目次

前篇

第一章 總說……三
一 ポナペ占領……三
南遣支隊—陸戰隊上陸—占領、駐軍—獨逸人の異圖—島內巡視
二 歷史、地理……八
發見の由來—サン・ヴイトレス—スペインの統治—カロリン群島—マーシャル群島—東部諸島布教—獨逸人の出現—ポナペの叛亂—南島人の伊豆漂着—我國との交涉—帝國委任統治地—區分—呼稱—パラウ島名の由來—改稱の弊—公稱と固有名との相違—島嶼の構造—氣候—フロラ—ファウナ
三 住民……二六
人口の減少—毛髮、膚色—體格及特徵—頭蓋骨—クラウゼの發表—ウイルヒョウの調査—チヤモロ人の頭蓋指數—壽齡—生產死亡率—性格
四 言語……三九

言語の内別―考察の方法―國語との比較―濁音―チヤ、シヤ―パラウ特有の語音―鼻音―ラ行の發音―拗音撥音―母韻―語排列上の相違―接頭語と接尾語―疊語―冠詞―勸詞的用法―代名詞―自他稱―代名詞の六形式―前置詞―數詞―文字―形象文字―結繩

五　傳說……五四

創世神話―天上の世界―陸地湧出―島嶼釣上げ傳說―國土生成傳說―人間の起原―老死の因―日月の起原―火の起原―洪水傳說

六　遺跡……六三

昔日の高級文化

ナンマタール。　ナン・タウシ―發掘品―パン。カタラの社―石材―神人（アニ・アラマシ）―建造の目的―爾餘の遺跡―ブナージの墓地

クサイの遺跡。　輪廓―構築者

マリアナ群島の遺跡。　チニアンの遺跡―ロタ島の遺跡―サイパンの遺跡―石柱の用途―祭垣內

七　種族……八一

隣民族との關係―ヌクオル人―ポリネシア族の影響―黑色人（ネグリト）の血―俤備―メラネシア族の影響―マリアナ島民―高天族とマリアナ人―チヤモロ族の東方及南方發展―マレー移民―インドネシアンの一大支流―異民族の部分的混血

第二章　信仰……九二

一　原始信仰……九三

基督教の普及―宣教師の舊信仰に對する態度―チヤモロ人の舊信仰―祖先信仰―祖靈崇拜の由來―荒魂、和魂―自然物崇拜―神と人との關係―オリファト神話―ルク神

二　神……一〇四

マーシャル諸島の神―ボナペの神―ヤップの神―ラモトレクの神―杜の精―土の精―ヤップのカン

三　社及靈代……一三〇

ホコラ（祠）―ミヤ（宮）―ヌクオルのマラエ（社）―祭庭（ユニハ）の標識―神の舟―鳥船―御靈代（ミタマシロ）―神像

四　祭祀……一四一

公祭と私祭―祭のモーチーヴ―定期祭―收穫祭―サイパンの新年祭―ルクの新年祭―マーシャルの新年祭―司祭者―女祝―司祭者の任用―祭の行事―祝詞―供物―神寶―ヌサ（幣）―神島―獻髮―神樂―豐樂（カムアソビ　トヨノアカリ）

五　託宣卜兆……一五四

巫覡―神おろし―椰子占―ウラボエ―卦名―占蹟―片占（カタウラ）―ヤップの椰子占―葦占（アシウラ）―パラウの占法―マーシャルの石占―吉兆、凶兆―夢占―手の筋の占

六　護り及加持……一七〇

護りの由來—家屋の護り—舟の護り—隨身護符—杖—神祕の紐—加持の由來—ミクロネシア諸島に行はれる加持の例—ボンジェン—パラウの漁業と加持—呪文—マーシャルの漁業と加持

七　呪詛（マジ）、禁厭（ナヒ）……一八〇

魔の作用—魔物—マジ物—マジナヒ—魍魅魍魎—幽靈—アニ（鬼）—マジ代—魔術者（マジヒト）—パラウのマジナヒ—ヤツブのマジナヒ—サイパンのマジナヒ—ルクのマジナヒ—ボナペのマジナヒ—マーシャルのマジナヒ—豐作のマジナヒ—海嘯除けのマジナヒ—マジに用ひる像代（カタシロ）

八　禁忌、俗信……一九三

タブとトーテミズム—禁忌の根元—イミ（淨）、ツミ（穢）の觀念—禁忌のモーチーヴ—シメユヒ（標結）—避穢—祓—トーテムと禁忌—諸島の禁忌—（サイパン、ルク、マーシャル、ヤップ）—俗信

第三章　社會……二〇七

一　政治的組織……二〇七

政治的集團

サイパン。　チャモロ人の社會階級—サイパンのカロリン人—會所制度—ロタのウットウヤップ。　賤民—八邦分立—フェバイ（會所）

パラウ。　建國分封—ペル（氏）制度—組合（クバヴァ）と會所（バイ）—婦人の社會組織—氏長と氏人—組合の任務—コリヨルの政治組織—酋長の繼位法

中央カロリン。　モルトロック—小氏族分立—ウト（會所）

ポナペ。　離合集散—ジョカーシの滅亡—十八氏族—門地—榮稱—ナニマルキ（元首）—ナニケン（執權）—有階者の職責—民衆の義務

クサイ。　四氏族—統治者—有階者—島政

マーシャル。　特異なる集團—社會階級—庶民の境遇—上流階級の內別—酋長の絕對權—氏族分脈

二　氏族組織……二三五

社會構成の原則—氏族の觀念—母系氏族—氏族發生—氏族徽章—氏族の分裂—男性族長と相續順位

親族。　親族の稱呼—兄弟姉妹—伯叔と甥姪

配偶。　短期配偶—同族通婚の禁—異族の近親通婚—異性獨占—婦權—ヤップ島の婦人の位置—氏族の母

家族。　家族の範圍—苗字—妻、妾—嫡、庶—相續法—末子相續

三　社會制度……二五五

社會關係の原則—占有慾—共有と私有—支配權と用益權—不動產制度（マリアナ、ヤップ、パラウ、中央カロリン、ポナペ及クサイ、マーシャル）—食物の分配—占有權の侵

害―贖罪―サール（墨塗）の刑―ヤップ島の社會制裁―破ツ物―ボナペの刑罰法―社會制裁としての戰爭―チャモロ人の行戰法―パラウの戰爭―挑戰、舌戰―競技氣分の戰爭―マーシャルの戰況

四　經濟組織……二七二

如實の共産―傭役―勞銀―貸借―直接分配―分配の掟―資本配當―物々交換―中央カロリン貿易系統―交易品換算率―貿易の方法―取引關係―グアムと中央カロリンとの貿易―代償物件―貨幣及賣買

第四章　人事……二八四

一　姙娠分娩……二八四

懷姙藥―產兒制限―避姙法―墮胎―姙娠及分娩に關する禁忌―產穢―產室―助產、出產―臍帶、胞衣の處分―產湯

二　育兒……二九一

出產祝―生誕祭―命名―名の意義―哺乳期間―乳母、母乳代用品―入社式―睾丸摘出（カストレーション）

三　性的慣習……二九七

元服―成女式―情事の制限―月の穢―誘引―密會―アル・メノル（巫娼）―買妻―掠奪結婚―結婚式―姦通、離婚―戀情

四　喪葬……三〇五

死因―魂魄に關する觀念―魂の行方―靈魂不滅―弔問―屍體の處分―水葬―遺骨收藏―洗骨―土葬―湯灌、裝屍―墓地―墓壙―屍體の位置―副葬品―殉死の名殘―家―墓標―墓參、供物―服喪―ヤップ島の葬儀次第―年忌祭

後篇

第一章　身飾……三一九

一　被服……三一九

被服起原神話―被服の變遷

裳。裳の三種―犢鼻褌―タブサキの語義―犢鼻褌の制式及着用法―腰裝―腰裝の制式―拷布（タフヌノ）の腰卷―織物の腰卷―マーシャルの腰卷―裝着法

衣（ソ）。ソンソル式上衣―中央カロリンの上衣―手次（タスキ）―直麻（ヒツサ）緒の衣

帶。裳の帶―飾帶―飾脚卷―紐帶―ヒメ緒

笠。

履物。

二　裝身……三三五

頭飾。昔のチャモロ人の調髮―男子の結髮樣式―櫛、笄―婦人の調髮―頭飾具―鉢卷―

玉鬘—挿頭(カザシ)—冠
髭髯。　蓄髯—剃毛、拔毛
耳飾。　耳朶擴大—耳飾の色々—耳朶の孔塡裝
鼻飾。
齒牙。　齒黑—拔齒
頸飾。　分類—頸珠—鈎(ツツバリ)—種々のマル(聯珠、頸飾)—ヤップ島の頸飾—マルマル—ギルバートの頸輪—齒牙の頸飾—花輪
腕飾。　上膊の束帶—前腕の飾—パラウ人の腕輪—海驢の脊椎骨—ヤップの腕輪—(附記)指輪—爪の裝飾
脚結。
塗色。　顏料—塗粧法——黃粉の用途
瘢紋。　方法、紋樣—起原、目的—瘢紋と文身
三　文身……三六四
起原及目的。　傳說—傳來の徑路—文身の意義
儀式。　マーシャル島の文身儀禮—入墨屋—祝詞—入墨の歌—文身と禁忌—ヌクオルの儀式
年齡及部位。　顏面—陰部
用具及顏料。

施術者。　手術料
紋樣。　マーシャル島文身の紋樣—同意匠—ポナペの紋樣—中央カロリン人の文身紋樣—ヤップの紋樣—パラウ島の紋樣
四　隨身具……三八八
袋、籠—石灰入—踴棒—杖—カイバクル(斧)

第二章　居住

一　概說……三九二
昔のチャモロ人の家屋—居住狀態—社會制度と家屋との關係—原始的家屋—ミクロネシア建築の二樣式
二　公舍……三九七
界說
バイ。　土臺石—土臺—屋體—柱—桁梁—壁—屋根—屋根骨組—葺料、葺法—樗風—ユカ(床)—爐
フェバイ。　フェバイとバイとの相違—フェバイの構造—壁—ユカ(床)
爾餘の公舍。　屋根—ユカ(床)—寄棟作り—石柱
三　住宅及附屬建物……四一五
パラウの住宅—家の大小と戶口との關係—蔀—壁—屋內設備—ヤップの住宅—魔除—炊

屋—嬬屋—倉—穢屋—ボナペの住宅—クサイの家屋—マーシャルの住宅—厨房—諸假建築

四　内外設備及家具……四二七

竈。

厠。

家具。　蓆、帷—寢具—座席—格納所—點燈具

第三章　飲食……四三一

一　食物……四三一

米食人

植物性食品。　パンの實—椰子—其他の果實—球根—蔬菜

動物質食品。　魚類—介甲類—禽鳥—鷄—獸類

調味品。　鹽—砂糖—油脂

調理。　石燒—蒸燒—餅—烹炊

二　飲料……四四六

水。　雨水—鹹水

清涼飲料。　椰子乳

催醉飲料。　カヴァ酒—トッヂー

刺戟劑。　シリー—煙草

三　飲食器具……四五二

天然器物。　水入

介甲器物。　貝製品—鼈甲製品

木造器物。　木槽（ノネ）—パラウの木造什器—大木鉢—片口—三寶—八脚—盛鉢—皿—椀—湯

呑—杓子—鼠入らず—諸島の木器

土器。　土鍋—甕

石造器物。　石臼、石杵

燧器。

第四章　兵器……四六四

概說

一　槍……四六五

矛—竹槍

柄。　千段卷

穗尖。　木竹尖—鱏の刺—人骨の尖—鱶の齒—鐵尖

二　打物……四六九

石器及骨質兵器。

棍棒。
木刀。
特種兵器。　鱶の齒の短兵器—匕首
三　飛道具……四七三
投槍。　投槍器
弓箭。　パラウの弓矢—鏑矢
投石器。　投石帶—石彈子—彈弓
吹矢。
附記。　防禦武器—甲冑

第五章　舟楫

一　概說……四七八
昔のチャモロ人の行舟—舟行起原神話—航海術の退步—舟の名稱
二　舟の構造……四八二
昔のチャモロの舟—テッキング(間切)
舟體。　船材—ウッボ舟の形狀—組立—簀橋—副舟—胴の間—數材合製の舟—塗色—軍舟—竹筏
船具。　檣—帆—索具—櫂—製鋼器

三　舟庫……四九二
パラウの舟庫—ヤップの舟庫
四　航海術……四九四
星宿と航路。天體象限圖—用法—航路—風壓、偏流
ウネリと海圖。　波浪—波の曲線—海洋の波濤の現象—ウネリ(長濤)—波會(ナミアヒ)—南島人の描圖法—桿條海圖—桿條海圖の種類—マーシャル海面の學術的研究—マタン(教授用)—レベリブ(全圖)—レベリブの分類—第一類—第二類—第三類—メド(分圖)

第六章　工藝

一　原料及工具……五一七
原料。　鑛物質原料—動物質原料—植物質原料—纖維原料
工具。　パラウの工具—爾餘の諸島の工具
二　織物……五二三
織機—經線調整臺—織物の色々—縞及模樣
三　編物……五二八
マーシャルの編物—原料—編み方—圖案紋樣—編物の用途—パラウ島の籠編目—タタミコモの痕跡—ボナペの笊
四　彫刻、模象……五三五

パラウの彫刻—模様の意義—彫刻彩色の方法—薄風板の模様—ヂルン・ガイ—ヂルン・ガイの由來—塗料—代表的圖案模様—螺鈿—鬆漆—丸彫—ポナペの彫刻圖案

五　珠玉及貝石貨……五四四

珠玉—珠玉の用法

赤貝珠。　海菊珠—聯珠（ミスマル）

白貝珠。

椰子珠。

ジア珠。

ア・ウドウド。　パラウ珠—用途—分類及材質形狀—由來—傳說—我上代の珠との比較—ア・ウドウドの分布—チヤモロの頸珠

貝貨。

石貨。　起原—產地—形狀大小—本初の用途

第七章　日常生活……五五八

一　眠食坐臥……五五八

睡眠—洗面、掃除—食事—沐浴—坐姿—敬禮法—運搬法

二　生業……五六二

土人と勞働

農業。　米作—タロ芋耕作—農具—姜黃—煙草—シリー—椰子其他

漁業。　漁業一般—漁具—釣魚—鈎（ツリバリ）—綸（イト）—稽（ヤス）、銛（エリ）—投網—抄網（スクヒ）—刺網—筌（ウヘ）—魞（エリ）—漁柵—澁流し—特種漁法

三　娛樂……五七六

娛樂の意義

樂器。　笛—太鼓—四ツ竹、拍子木—特種樂器

歌謠。

舞蹈。　ホナペの踊—中央カロリン人の踊—ヤップの踊—パラウの踊の光景—マーシャルの踊

武伎遊伎。　練武—競舟—角力—綱（棒）引—鬪鷄

兒戲。

横田鄉助序……五九五

著者跋……五九九

南洋研究の先覺者松岡靜雄大佐を偲ぶ（清野滿治）……六二三

名稱及主事項索引……六五九

寫眞版目錄

		對頁
一	レレ(クサイ)の城壁	七二
二	チニアンの遺跡(上)、アンギガンの遺跡(下)	七六
三	パラウの墓地	三一二
四	ヤップ島酋長の墓	三一二
五	ジャルート島民(男子)古風の服裝	三二二
六	左、マーシャル婦人の腰卷姿。右、ギルバート島男女の服裝(アパママ酋長一家)	三二六
七	ルク老婦の固有風俗	三四四
八	踴に用ひる杖(上)及櫂(下)	三九〇
九	パラウ島男女	四〇四
一〇	パラウの會所(バイ)	四一〇
一一	ヤップの集會所(フェバイ)	四一六
一二	パラウ島の民屋	四二四
一三	ヤップの穢室(上)、ポナペの住宅(下)	四二四
一四	クサイ島の家屋(上)マーシャルの民屋(下)	四二四

一五	毒魚(ワト)(上)、椰子蟹(下)	四三八
一六	鰭の齒の兵器	四七〇
一七	舟倉(パラウ島)	四九二
一八	サイパンのカロリン婦人の機織(上)、ヤップ離島婦人の機織(下)	五二四
一九	クサイの織物	五二六
二〇	マーシャル婦人の編物	五三〇
二一	バイの棟風(パラウ)	五三八
二二	コリヨル突堤の大木偶	五四四
二三	ポナペの彫刻圖案	五四四
二四	ヤップの石貨	五五六
二五	マーシャル人の筌製作	五七二
二六	パラウ島民の踴、男子の踴(上)、女子の踴の裝(下)	五八六

地圖目錄

一	ナンマタール遺跡略圖	六六
二	レレ島略測圖	七三

目次

三　南洋群島地圖……巻末

挿畫目次

一　ナンマタールの石壁……六五
二　ナン・タウシの平面圖……六七
三　ポニアルの墓地……七一
四　ブナージの墓地……七二
五　レレ城塞の一部分(平面圖)……七四
六　チニアンの遺跡略圖……七六
七　パラウの祠(ヤコラ)……一三一
八　右同……一三二
九　右同……一三三
一〇　パラウの宮(三色刷)……一三四
一一　ルク島の神の舟……一三七
一二　右同(島船)……一三八
一三　ルク島の御靈代(ネリン・アヌ)……一三九
一四　モルトロック島の假面……一四〇
一五　パラウ島の神像……一四一
一六　供物用高坏(パラウ)……一四九
一七　パラウ島のヌサ(幣)……一五〇
一八　アゲレギリ占の結び方……一五六
一九　大舟(ウア・サラク)の乘員配置……一五九
二〇　辜占の圖(サイパン)……一六二
二一　テグメウン(家護り)の一種……一七〇
二二　アテン(ルクの舟の護り)……一七一
二三　エアム(右同)……一七三
二四　パレバル(サイパン人の護り)……一七二
二五　パラウのマジ代……一八五
二六　アモ(禁斷)の標識(マーシャル)……一九五
二七　中央カロリン貿易系統圖……二七九
二八　屍體を運ぶ轎(ヤップ)……三一一
二九　ヤップの酋長の家……三一三
三〇　最原始的な前垂(ソンソル小兒用)……三三〇
三一　ヤップ島民の褌の結び方……三三一
三二　マーシャルの腰蓑……三三二

三三　ヤップ島の腰蓑……三二四
三四　ソンソル婦人の腰巻……三二五
三五　右同上衣……三二七
三六　直麻(トラサ)緒の衣(ボナペ)……三二九
三七　パラウ婦人の飾胴巻(カウ)……三三一
三八　ヤップ島の紐帯(フィガー)……三三二
三九　各種の被り物……三三三
四〇　結髪様式(ソンソル及ボナペ)……三三六
四一　ヤップ島の櫛……三三七
四二　鼈甲の櫛及木製笄……三三七
四三　ヤップ島の玉蜀(テリヤウ)……三四〇
四四　冠——(イ)ヤップ島、(ロ)ヌクオル島のもの……三四一
四五　ルクの耳飾(ニコム)……三四四
四六　ヤップ及パラウの耳珠……三四五
四七　鼈甲製耳牌(パラウ)……三四五
四八　パラウの頸珠(アウドウド)……三四九
四九　ボナペの頸珠(モチル)……三四九
五〇　鼈甲製釣(グリバリ)と頸輪(メリル及パラウ)……三五〇
五一　ヤップ島の頸飾……三五一
五二　マーシャル島の頸飾(プニ)……三五三
五三　人間の歯を連ねた頸飾(ギルバート島)……三五四
五四　パラウ人の腕輪——(イ)海螺の脊椎骨、(ロ)鼈甲の筒……三五六
五五　ヤップ島の腕輪……三五八
五六　右同……三五八
五七　ルク島の腕飾(リリボウン)……三五九
五八　ヤップの脚結(ユヒ)(ビイ)……三六〇
五九　簇猿紋様……三六二
六〇　オルカエル岩(ピレリウ島)……三七三
六一　文身用の鑿(テ・アウ)……三七五
六二　マーシャル島の文身紋様……三七八
六三　マーシャル島男子顔面の文身……三七九
六四　同　胸腹の文身……三八〇
六五　同　背面の文身……三八一
六六　同　女子の文身……三八二
六七　ボナペ島男女文身……三八四
六八　サイパン在在カロリン人の文身紋様……三八五
六九　ヤップ島民の文身……三八六
七〇　ソンソル島民の文身……三八七
七一　パラウ島の文身紋様……三八八
七二　石灰入(パラウ)……三八九
七三　踊棒(グルグル)……三九〇
七四　原始的家屋……三九五
七五　パラウのバイ(會所)略圖……三九九
七六　屋重負荷の圖……四〇一
七七　屋根組の圖……四〇二
七八　梯子色々……四〇五
七九　ヤップの會所(フェバイ)見取圖……四〇六
八〇　フェバイ(ヤップ)の構造……四〇七
八一　右同壁の葺方……四〇九
八二　ルクの會所(ウト)の屋根組……四一二
八三　ボナペの會所兼舟庫(ナジ)……四一三
八四　ヤップの住宅(タペナン)側面……四一九
八五　同　樽風面……四二〇
八六　ヤップ島婦屋(ファン)……四二二
八七　同　貧(トオルパ)……四二三
八八　中央カロリンの櫃……四三〇
八九　パラウの燈明皿……四三〇
九〇　貝の笨刀及匙……四五三
九一　貝製刮削器……四五四
九二　鼈甲製皿匙等……四五四
九三　大木鉢……四五五
九四　片口……四五六
九五　三寶……四五六
九六　八脚……四五七
九七　盛鉢……四五七
九八　大木皿……四五七
九九　椀……四五八
一〇〇　湯呑……四五八
一〇一　罇……四五九
一〇二　木杓子……四五九
一〇三　鼠いらず……四五九
一〇四　食器掛……四六〇
一〇五　クサイの木器。(イ)杵、(ロ)庖刀、(ハ)食物掛……四六〇

一〇六　土鍋……四六一
一〇七　甕……四六一
一〇八　石臼、石杵……四六二
一〇九　木尖の槍……四六七
一一〇　鱏の刺の槍……四六七
一一一　人骨の穗尖……四六八
一一二　棍棒（パラウ）……四六九
一一三　同　（中央カロリン）……四七〇
一一四　木刀……四七一
一一五　鱶の齒の木刀……四七一
一一六　環狀匕首……四七二
一一七　投石帶及石彈子……四七五
一一八　彈弓……四七六
一一九　パラウの帆舟……四八三
一二〇　パラウの舟の平面圖……四八四
一二一　同　架橋取附の圖……四八五
一二二　副舟取付の圖……四八六
一二三　數材合成の舟（中央カロリン）……四八七
一二四　帆桁の咬み合はせ……四八九
一二五　櫂……四九一
一二六　碇……四九一
一二七　製綱器（マーシャル島）……四九二
一二八　舟庫（ヤップ島）……四九三
一二九　天體象限圖……四九五
一三〇　波の曲線（サイクロイド）……四九九
一三一　ウネリの列向彎曲……五〇二
一三二　同　進行方向屈曲……五〇二
一三三　島から見た東西ウネリの列向……五〇三
一三四　南島民の描圖法……五〇三
一三五　教授用海圖（マタン）の一……五〇六
一三六　同　二……五〇九
一三七　全圖（レベリブ）第一類……五一〇
一三八　同　第二類……五一一
一三九　分圖（メド）の一……五一三
一四〇　同　二……五一四
一四一　同　三……五一五
一四二　カイバクル（パラウの手斧）……五二一
一四三　ポナペの貝斧……五二二

一四四　蓆針（マーシャル島出）……五二三
一四五　織機……五二四
一四六　經絲調整臺……五二六
一四七　マーシャル島編物の紋樣……五三二
一四八　パラウ島の籠編み方……五三四
一四九　バイの柱の模樣の一……五三六
一五〇　同　二……五三七
一五一　同　緣飾模樣……五三七
一五二　同　梁の模樣……五三八
一五三　バイの彫刻彩色の模樣……五四二・五四三
一五四　パラウ珠（四色版）……五四四
一五五　サイパンの頸珠（リサジヤ）……五五三
一五六　クサイの貝貨（ファイ）……五五五
一五七　農具……五六四
一五八　木の釣針……五六八
一五九　鼈甲の鈎……五六九
一六〇　貝製鈎……五六九
一六一　猎及銛……五七一
一六二　搔網……五七二
一六三　筌……五七二
一六四　飢……五七三
一六五　漁柵設置圖……五七四
一六六　ロタ島の漁具……五七五
一六七　笛……五七七
一六八　太鼓……五七八
一六九　サイパンの樂器（ベレムバン・ツジヤン）……五八〇
一七〇　ギルバート島の競帆走の舟……五八八
一七一　チョンカ（チャモロ人の遊戲盤）……五九二

前篇

第一章　總　說

一　ポナペ占領

南遣支隊

大正三年十月七日私は南遣支隊司令官山屋他人中將の命をうけ、聯合陸戰隊を率ゐてカロリン群島の主地ポナペ島に上陸した。此群島は一八九九年までスペイン領であつたが、同國が北米合衆國との戰爭に敗れた結果、維持困難になつてマリアナ群島（グァム島を除く）及パラウ島群と共に獨逸に賣り渡したもので、獨逸は一八八五年來占領せるマーシャル群島をあはせて南洋保護領と名づけ、當初は一獨立植民地として統治したが、其後ニウ・ギニア總督の管下に移し、ポナペに一知事を置き、爾餘の諸島に島司を配して民政の任に當らしめた。歐洲大戰勃發後間もなく伯爵スペーの率ゐる獨逸膠州灣艦隊は青島を脫出して此方面に出沒するといふ情報があつたので、英佛側に荷擔して獨逸に向つて戰を宣した我帝國海軍は海上警備の自的を以て鞍馬筑波及驅逐艦山風海風より成る一支隊を派出して、約一ケ月の豫定を以て此海面を巡航せしめたのであるが、其が漸く叢島の東端に達し、ジャルート島の偵察を終つた頃、廟議の一變により各島の軍事施設を破壞することになつた。支隊は中央策戰部の電命により一旦出發したジャルート島に

引かへし、之に陸戰隊をあげて少數の守備兵を駐め、次にクサイ島に揚兵した後、獨逸南洋保護領の主地ポナペに軍事行動をとることになつたのである。

陸戰隊上陸

右の如き事情であつたから我々がポナペ島に關して有する豫備智識は極めて貧弱であつた。ことに其防備については約百名のパプア人邏卒が駐屯するといふことの外に何等知る所がなかつた。勿論大なる抵抗は豫期しなかつたけれども、尙十分の警戒を以て進軍する必要はあつたのである。珊瑚環礁より一浬餘の沖合に漂泊した艦隊から十餘隻の舟艇に分乘して出發した我々は海拔六〇〇米のナンキオプ山を仰ぎ、ハイブアラプの怪巖突兀たるジョカーシ島を右手に見て、環礁の破口を求め、大河の口のやうな灣内に進入し、かねて謀し合はせた配置についた。私は先づ灣口にあるランガルといふ小島に上陸して此地に店舖住宅を有するジャルート會社の支店長獨人某を呼び出して情報を聽取したが、其いふ所によればスペー艦隊は數週前こゝに寄航したけれども一兩日の後出港し行先は不明である。此艦隊の齎らした報道によつて戰爭の勃發を知つたが、日本が參戰したといふことは聞かなかつた。其故に今曉沖合に艦隊の出現したのを見て英人の來襲であらうと恐怖した在留獨人も、旭日旗の飜るに及んで安堵の胸をなでおろしたといふことであつた。政廳のある所は此より約一浬餘の入江を隔てて相對する本島北側の海岸で、曾てスペイン人が築いた胸堡の上に獨逸國旗が揭げてあつた。知事ケルスチングは賜暇歸省の途に上り、今頃は日本にいて居る筈で、其留守中はニウ・ギニア總督府から派遣せられた判事補ケラーといふものが代理に任じ、外に醫官一名醫部二名、宣教師外數名の白人が在住するのみで、軍人は一名も駐在せず、何等軍事的施設

もないといふことが明になつた。我々は用意した機關銃の火蓋をきることもなく、支那風に形容すれば兵刃に齟らずして易々政廳を占領したが、ケラー及二名の警部に指揮せられる約百名の黑人邏卒の姿は見えず、小銃彈藥及金庫內の金が殆ど全部持ち出されて居ることを發見したので、獨人に異圖があると推定せざるを得なかつた。

殘留した獨人官吏は醫官ドクトル・ギルシュナー一人で、餘り政治向のことには携はらぬ學者らしい同人は反抗の意志のないことを表明して色々と便宜を與へて呉れたが、ケラー等の行動については容易に實を吐かなかつた。此地には故田口卯吉博士等の先覺者によつて創立せられた南島商會の支店が未だ獨逸領にならぬ以前に設置せられ、其後身なる南洋貿易會社の支店長關根仙太郎といふ人は二十餘年此方面に在住し、土語に通じ土地の事情に明るく我々を益することが多かつた。同人から一通り情報を聽取つた私は大略ケラー等の企圖をも推察し得たので、先づ海陸の交通を嚴禁する旨を發令して土人の內通を防ぎ、明日を待つて島內の狩立を行ひ嚴重なる處分を加へる意志を表示し、守備隊となつて殘留することに豫定せられて居た海軍大尉大宅由玖(現中佐)以下士卒八十名と共に私も當分此島に留ることに決心し、爾餘の陸戰隊員を歸艦せしめた。私は日本出發の際、餘り健康もすぐれなかつたので辭職を申出たのであつたが、忽卒の折からとて其志を遂げず出征に加はつたやうな次第で、熱帶地の勤務には堪へ得られまいといふ懸念もないではなかつたが、絕海の孤島の異俗を觀察することが出來るといふ興趣に動かされ、且は部下の士卒を危地に棄て去るに忍びなかつたので、之と運命を共にする氣になつたのである。艦隊は卽夜西に向

つて進發した。

コロニーといふ名によつて呼ばれた此島の都は廳舍、官宅、寺院の外に、商店は上記南洋貿易會社の支店と歸化獨人エチサイドの經營するものがあるだけで、數十戸の民屋を包容し海に臨んだ丘阜の斜面方數町を占め、海岸に沿うて一條の街路が貫走して居る。我々が舍營として徴發した高地にある知事官邸からは三方を瞰制し得るが、內地からの夜襲に備へる陣地としては頗る不安全であつた。スペイン時代に築いた胸壁は一九一〇年のジョカーシ部落叛亂の際、獨人の防禦陣地となつたといふことで、尙一部分其形を殘して居るが之を利用するには若干の土工を必要とし、既に暮夜に迫つた今となつては手の下しやうもない。隊員は舍營の準備、軍需品の陸揚等急を要する作業に忙殺せられ、塹壕堡壘を築造する餘力もないので、我々は機關銃を屋上に据ゑ、要所に哨兵を配したのみで、不安の一夜を明さねばならなかつた。百名內外の黑人邏卒の來攻は恐るるに足らぬが、地理に熟した彼等の潛入を防止することは至難で、折しも如法暗夜の事とて、縱ひ目前にあらはれたとしても墨よりも黑い裸體のパプア人を識別することは不可能であらうと思はれた。後に判明した所によると知事代理ケラーは我軍が偵察後直に引上げるやうであつたら、其を待つて復歸し、少數の守備隊を殘すやうであつたら、一部の土人の援助を得て逆襲を試みる豫定であつたといふことであるが、白面の一書生に卽夜事を擧げる決心がつかなかつたことは我々にとつては幸であつた。

意外に多數の守備隊が殘留したことと、私の態度が頗る强硬であることに恐を抱いたドクトル・ギルシュナーはケラーに投降を勸告するから討伐を一日猶豫してくれと申出たので其意志に委せた所が、占領の翌々日早朝にケラーが突然妻をあらはしたので之を空屋に監禁し、尋で警部二名に引率せられて黑人邏卒八十餘名が徒手で歸投した。武器、官金の隱匿所も密告があつて判明したので其々處分を了し、島民及黑人邏卒に叛志のないことを確めた後、私はスペイン時代からの公文書に一わたり眼を通し、司法行政財政に關する現行法規慣例を調査し、ジョカーシ、ウ、ナット、ロンキチの各地を巡視して民情の觀察、島民の懷柔につとめた。上代の遺跡のあるマタラニムに行く機會のなかつたのは私の終生の恨事とする所であるが、約二週間の短時日の作業としては私の收穫は決して少くはなかつたつもりである。私は此調査にもとづいてボナペ開拓論一篇を草して上司に提出したが、廳堂までは達せず握り潰しの運命に逢うたのは是非もないことであつた。

獨逸人の異圖

島內巡視

水清く波靜なる礁內を傳うて海岸各地を巡航するのは決していやなことではなかつた。目的の地につくとランチから土人の舟に乘り移り、岩礁の隙間を縫ひ、或はマングローヴの木の根をくゞつて陸地に達する。海上から眺めた時には椰子其他の喬木の外に何物もないやうに見えた濱邊におのづから一條の道がひらけて之を辿つて行くと三々五々民家が點在する。いづこも同じやうに物めづらしい里の子が何處からともなく群がつて來て、少しく離れて我々の一行を取り圍む。金色燦爛たる長い軍刀に自然兒の心は吸ひつけられて居るやうであるが、新知事（ニュ・ガヴァナー）の威光を憚かつてさすがに近寄らうともしなかつた。新しい腰蓑をつけた半裸體の老酋長が配下の頭目をひきつれてにこやかに出で迎へる。通譯の關根君を介して一つ二つ

言葉をかはすうちに、新鮮な椰子の實を割つて清涼な果汁が提供せられる。其は島民唯一のもてなしであるから、縱ひ白い果肉に垢の指紋がついて居ようとも、毛髪か纖維かわからぬものが汁の上に泛んで居ようとも、いやな顏をせずに飮まねばならぬ。やがて配下の島民が太い甘蔗の莖で鷄一羽椰子兩三顆を擔うて來てパラマスター（上官）への貢物にする。棒でかつぐほどの重さでも數量でもないのに大袈裟なことをすると考へてはならぬ。甘蔗は擔ふ爲のものでなく、獻上の印、卽ち長艾斗のかはりになるのである。

十五年の間に三國の手に轉々して其に迎合せねばならぬ運命をもつた此可憐な民に對しては私は言ひ知らぬ氣の毒さを感じたのであつた。新しい文明に導くといふことが彼等を幸福にする所以であらうかと私は今も尙考へざるを得ぬのである。

私とミクロネシアとの關係は右の如くして結ばれた。其後私は諸島を巡航しただけで、親しく島民と接觸する機會を得なかつたが、東京に住つて居たころには觀光島民の來訪を受けたこともあり、其後も絕えず色々の情報に接して居る。今日私が此書に筆を執るやうになつたのも、思へば古い因緣であるといはねばならぬ。

二　歷史、地理

ミクロネシアの歷史地理を詳述することは本編の目的でないのみならず、我海軍が占領してから早くも十三年の星霜を經、既に帝國領土の一部分となつたのであるから、國民の間にも伊豆七島、沖繩諸島に對するほどの一般智識は普及して居る筈であるが、尙次々の敍事を了解し易からしめんが爲に若干の記述を必要とする。

發見の由來

ミクロネシア叢島中最も早く世に知られたのはマリアナ群島で、南アメリカの南端を廻航して太平洋を横斷したフランシスコ・デ・マガリヤネス（マゼラン）の船隊は一五二一年三月六日此群島の一なるグァム（グァハム）島に寄泊し、清水糧食を求めた。島民は親切であつたが、手あたりまかせに物品を持ち去るので、ポルトガル人からラドロネス既ち盜賊島といふ芳ばしからぬ名を與へられた。其後一五六六年一月二十二日ミグエル・ロパズ・デ・レガスピが西王フィリポ二世の命を受け、三隻の船隊を率ゐて群島探檢の爲、此地に來航し、スペイン國旗を揭げて占有を宣した。

其前後に於て此方面を航海したものはスペイン人の外に英、蘭兩國人も少くはなく、或は新に島嶼を發見したと報告したものもあるが、其位置も明白ではなく、特に名稱を與へたものもなかつたので、確實に歐洲に知られて居たのは十八世紀の初まで右のラドロネス群島のみであつた。スペインの領有は有名無實で、何等の施設をも行はず、稀に船舶が寄港するに過ぎなかつたので、記錄としては上記レガスピ以後、一五八八年に英人カーヴェンヂッシュが寄港し、一六二五年蘭國のナッサウ船隊が巡航したことが殘つて居るのみである。然るに一六六五年アカプルコ（メキシコ）からマニラに廻航する一船に便乘して此地に寄航したジェスイート派の教父デエゴルイス・デ・サン・ヴィトレスは無智の蠻民の境涯を憐んで之が教

サン・ヴィトレス

化に志し、百方奔走の結果、此地に布教すべき命をうけ、一六六八年六月十五日他の教父、傳道士等を率る、少數の護衛兵と共にグアム島に來着した。マリアナの名は當時のスペイン女王に因んで此等の僧徒によつて稱へられたものである。然るに間もなく土人と衝突してサン・ヴィトレスを始め多くの殉教者を出したので、スペイン政府は逆徒を討伐する爲に出兵し、遂に民政官を常置して統治を行ふやうになつた。

スペインの統治

爾來一八九九年獨逸の領有に歸するまでスペインの統治は繼續したのであるが、一言を以て其治績を批評すると彼等がチャモロと呼んだ舊住民を戰滅して新なるチャモロ人を創造したといふに過ぎなかつた。曾ては人口五萬乃至十萬と稱へられた群島の住民は一時（一七一〇年頃）二千人以下に減じ、米穀の豐饒を以て聞えた諸島嶼はグァム、ロタ二島の外盡く無住の荒蕪地となつた。福音を聞くが爲に拂うた犧牲は土人に取つては非常に高價なものであつたのである。

幸にもスペインの政治とカトリック教の宣傳とは一八五年まではマリアナ群島以外に及ばなかつたのであるが、新興の獨逸が此年マーシャル群島を占領し、ヤップ島に其國旗を掲揚するに及び、二百年來殆ど忘れられて居たカロリン諸島がスペイン人の注意に上るやうになり、獨逸に對する憎惡は極點に達し、マドリット駐劄の獨逸領事は激昂せる民衆に殺害せられ、爲に開戰の危機に瀕したのであるが、ローマ法王の仲裁によつて無事に解決しカロリン、パラウに對するスペインの宗主權が認められることになつたので、領有の實を示す爲に諸島民の政治と信教とにスペイン人の魔の手が擴げられた。萬一同國の統治が永く續いたら、人民は文明國の植民地たる榮譽を擔ふことの代償として種族の血液の大部分を失はねばならなかつたかも知れぬが、十餘年を出でずして獨逸の手に渡り、更に帝國の委任統治地となるに至つたのは島民に取つても大幸であつたといはねばならぬ。我々は國際聯盟の委任を受け、帝國の一部分として此島嶼を管理して居るのであるが、其任務は住民の福祉を增進することにあつて、此異民族を日本化するのが目的でないといふことを常に念頭に置かねばならぬ。然らざればスペイン人が受けたと同一の非難を後世の人から浴せられることがないとも言へぬのである。

カロリン群島

マリアナ群島の外、我委任統治地に屬するマーシャル、カロリン、パラウ諸島は上述のやうに十六世紀頃から歐洲海員の眼には觸れたやうであるが、記錄に殘つたのは遙に後のことである。一六八六年スペインの一船長ドン・フランシスコ・ラゼアノはグァムの南方に一小島を發見して時の國王カルロス二世に因んでカロリンと命名した。此名稱はスペイン人に採用せられ、グァムの緯線と北緯五度との間に於てフィリッピン以東經度三十五度以內にある一切の發見又は未發見の島嶼を總稱するに用ひられた。之によればパラウ島群の大部分は其中に含まれ、ヌクオル、グリニッチ島は之を逸するのであるが、地理學的、民族學的に若干の增減を加へる必要のあることは後記の通りである。其當時のスペイン人は又マリアナ以南、フィリッピン以東の諸島を漠然ニウ・フィリッピンとも稱へた。一六九六年フィリッピン群島中のサマル島に漂着した土人は、教父ボール・クラーンによつてパラオ人と報告せられたが、ドクトル・セムペルも論じたやうに現今パラウと呼ばれる島群の民ではなかつた（後記參照）。さりながら之に刺戟せられて一七一〇年東方島嶼の發見及布教の爲にマニラから一船が派出せられ、ソンソル島及パラウ本島の所在を確め

たが、其際ソンソル島に置去りせられた教父デュペロン外數名の踪跡は今日まで尙不明である。恐らくは島民の爲に殺害せられたものであらう。一七二一年男女老弱二十四名のカロリン人がグァム島に漂着したので、同地駐在の教父カントヴァは之についてカロリン島の地理を攻究し、數十の島名をあげた地圖を作製した。現在の稱呼とは大に異つて居るが、大體に於てルク群、ラムトレク――オレアイ群、ファイス――ウルチ群、ヤップ及パラウ島群を指したもののやうである。カントヴァは一七二二年及一七三一年の兩回布教の爲に南方ウルチ諸島に渡航したが、第二次滯在の際モコモグ土人の爲に殺された。其以來宗教的冒險は全く後を絶ち、百餘年の間叢島の民は、マリアナ島人を除くの外、少くとも白人と基督教とによつて累せられることがなかつた。

マーシャル群島

東部諸島は此意味に於て遙に西方の民よりは幸福であつた。記錄によればアロンゾ・デ・サラザルは一五二六年にマーシャル群島の一を發見し、ペトロ・フェルナンデス・クイロスは一五九五年に於てポナペの南方に在るナッチク島に寄航したといふことであるが、勿論土人との間に後々までも影響するやうな交渉はなかつた。一七八八年四人を搭載して濠洲に回航中の英船長マーシャル及ギルバートはミクロネシアの東端に於て二群島を發見して各其名を與へたが、此島々の地理が明白になつたのは露艦艦長オット・フォン・コツエビューの探檢の賜で、其後リュトケ、フレーシネ、デュペルレーデュモン、デュルヴィル等の報告によつて益〻世に知られた。さりながら土人との間に直接の交渉を生じたのは一八三〇年頃北米の捕鯨船が、ポナペ、クサイを根據とするやうになつてからのことで、恐ろしい疾病と惡習とが下級船員によつて土人に傳へられたのは悲しむべきことであつた。此情況を耳にした布哇の米國メソヂスト教會では一八五二年宣教師スノウをクサイに、ギューリックをポナペに派出した。ギューリック師は當時同地に在住した百名に近い白人の辛辣な妨害に遭うて頗る布教に困難したが、歲月と共に土人の信望を得、同地及比較的感化の容易であつたクサイは勿論、マーシャル、ルク諸島までも耶蘇教義が普及するやうになつた。新教の宣教師等は舊教僧侶に比すれば土人に對して多くの理解を有して居たやうであるが、形式に流れ、皮相の文明を傳へ、良習美俗を破壞したことは獨りクレーマー教授を嘆息せしめた（「布哇東ミクロネシア及サモア」二二四頁）のみではなかつたやうである。

東部諸島布教

獨逸人の出現

年々激增する人口處分の爲、植民地獲得に焦慮した新興の獨逸帝國は一八八五年マーシャル群島の酋長を懷柔して領土權を讓り受け、同年軍艦イルチスをヤップ島に派遣して其地の占領を宣した。有名無實とはいへ、二百年前からカロリン群島の名に於て自國の版圖と見なして居たスペインが之を默認する筈はなく、重大な國際問題を惹起したが、幸にローマ法王の仲裁で落着したことは上記の通りである。スペインは領有の實を示す爲に主なる島嶼に政廳を設け、官吏を駐在せしめた。其治績は見るべきものがなかつたのみならず、ポナペの如きは悲慘なる事變を惹き起した。遠祖以來外國の統治を受けなかつた島民はスペイン人の强制に服することを欲せず、新に派遣せられた舊教牧師と從前のアメリカ宣教師との間には劇烈な暗鬪が起り、其結果一八八七年一部の土人が蜂起して大守以下數十人のスペイン人及マニラ人を鏖殺した。討伐軍の來着によつて此暴動は一旦鎭壓したが、一八九〇年東部地方に於て再び爆發し、マニラの救

ポナペの叛亂

援軍は憑悍な土人を屈服せしめるまでに多くの歲月を費し、少からぬ犧牲を拂うた。其後も尙全然島民を信服又は屈服せしむるに至らぬ間に、上記のやうに主權を獨逸に讓渡したのであるが、萬一スペインの領有が繼續したら、こゝにもチャモロ人と同一の運命が襲來したであらう。

南島人の伊豆漂着

獨人の統治中にも一九一〇年中ポナペ島のジョカーシ部落が叛亂を起し、知事ベーター以下の獨人四名邏卒若干名を殺害してナンキオブ山地に立て籠り、膠州灣から急派せられたエムデン外三艦の陸戰隊をなやましたことがあつたが、之を除いては各地共に平穩無事であつた。私は獨人統治の十四年間に治績が大に擧り、開發事業が急速に進捗したとは思はぬが、僅々三十名の官吏を以て全叢島を統治し、島民を悅服せしめ、徐々として文化に向はしめたことについては心中窃に敬服するものである。其原因は獨人官吏の大部分が異民族に對して比較的多くの理解をもつて居たことに歸せねばならぬ。上記のドクトル・ギルシュナーの如きは在職約十年に及び、業務の傍孜々として民族の研究に從事し、其頃既に若干の報告を世に公にして居たが、ポナペ占領の當時私に向つて研究の完了を見ずして此地を去ることを悲しむといふやうな口吻を漏らした。前サイパン島司フィリッツにはチャモロ、ルク兩語の辭典、マリアナ民族史其他の著書がある。右の外領事ヘルンスハイムの如き民俗學、言語學に貢獻したものが少くはないやうである。

我國とミクロネシア諸島との間には往時若干の交通があり得たと思はれるが、遺憾ながら記錄に殘つて居らぬ。唯古今著聞集にのせられた左の一文は南方異人種の漂着をいふものと思はれる。

承安元年七月八日伊豆國興島の濱に船一艘つきたりけり。島人ども雜風に吹よせられたる舟ぞと思ひて行むかひて見るに、陸路より七八段ばかりへだてゝ舟をとゞめて、鬼繩をおろして海底の石に四方をつなぎて、かの鬼八人船よりおりて海に入りて、しばしありて岸にのぼりぬ。島人粟酒をたびければ飲みくひけること馬のごとし。鬼は物いふことなし。其かたち身八九尺ばかりにて髮は夜叉のごとし。身のいろ赤黑く眼まろくして猿の目の如し。皆はだかなり。蒲をくみて腰にまきたり。身にはやう〳〵の物のかたをゑり入れたり。まわりにふくりんをかけたり。ををの六七尺ばかりの杖をもちてまづ弓もちたるを打ちこらしつ。およそうたるゝもの九ひけり。島人おしみければ鬼ときをつくりて杖をそもちたりける。島人のうち弓矢もちたる有けり。鬼こ人がうち五人は死ぬ。四人は手を負ひながらいきたりけり。其後脇より火を出しけり。島人皆ころされなんずと思ひて神物の弓矢を申出して鬼のもとへむかひければ鬼海に入りて岸より船のもとに至りてのりぬ。則風にむかひてはしりさりぬ。同十月十四日國解をかきておとしたりける帶をおと（？）して國司に奉りたりけり。件の帶は蓮王院の寶藏におさめられけるとかや。

我國との交渉

文中少し解しかねる點もあるが、鬼といふのは南島人であることは疑の餘地もない。承安元年（爲朝滅亡の翌年）は西曆一一七一年にあたり、マゼランのグァム發見に先つこと正に三百五十年であるから、恐らく此叢島民に關する世界最古の記錄であらう。我國人の此方面に漂着したもののあつたことも勿論で、クサイ人の口碑に傳はる北方から來た征服者を日本人又は日本人とマレー人との混合遠征隊であるとするクリスチャンの論證（「カロリン群島」一五六頁、一七四頁）は根據が乏しいけれども、マリアナ群島の最北島は小笠原島を距ること僅に五百浬に過ぎぬから、鎭西八郎爲朝にあらずとも、島廻りを企てた無名の英雄があり得た筈である。約百年前オカネ與四郎（或は伊五郎）等二十餘名マリアナ群島に漂着し、グァムに土着して天壽を終つたことが記錄に見え、島人は此外來人を敬愛して俚謠をつくり、稻の植付刈込に之を

譬ふを例としたといふことである。明治十七年（一八八四年）濠洲から横濱に入港した英帆船エーダ號は、マーシャル群島のラエ島で日本の漂流民が土人に虐殺せられたといふ報道を傳へたので、外務省は後藤猛太郎、鈴木經勳の二名をジャルートに派遣し、事實を調査し、島王に謝罪せしめた。其後明治二十三年東京府士族授産資金利殖の目的を以て故田口卯吉氏等發起して南洋商會を設立し、帆船天裕丸に貿易品を積込んでミクロネシアに向ひ、グァム、ヤップ、パラウを經てポナペに達し、同地に支店を開設した。此の事業は不幸にして隆盛を見なかつたけれども、之に刺戟せられて南方貿易に指を染めるものが多くなり、サイパン、グァム、パラウ、ルク、ポナペの各地に日本店舗を見るやうになつた。スペインから獨逸の統治に移つた後も、邦人の經營事業は既得の權利として容認せられたが、陰に陽に壓迫を免かれぬので、大なる發展を見ることなくして我軍の占領まで過ぎ來つたのであつた。

帝國委任統治地

帝國の委任統治區域は上述の如く、ミクロネシアと稱へられる太平洋上の島群中、最東方に位するギルバート群島と、マリアナ群島に屬するグァム島を除いたもので、東西約二千五百浬、南北約一千二百浬に亙る海面を占め、大小六百二十有三の島嶼を含むのであるが其陸地面積は極めて狹小で、砂洲岩礁をあはせても僅に百四十方里に過ぎず、略〻沖繩縣（百四十四方里）と伯仲するのである。各島の位置、廣袤等は無味乾燥な數字をならべるよりも添付した南洋群島圖（南洋廳版）について見る方が印象が明であると信ずるから、一切之を省略し、呼稱區分についてのみ一言することにする。其は後々の記事に大なる關係があるからである。

區分

マーシャル、カロリン、マリアナといふ名稱の由來は既に沿革中に述べた通りで、マーシャルとマリアナとは略〻天然の地形によつて限界を定められ（獨逸時代には赤道の南にあるナウル燐礦島もマーシャル群島に屬して居た）、兩群島以外の島嶼は皆カロリン群島に屬するものとせられて居る——當初スペイン人が除外した北緯五度以南の島をも包括する（但しニウ・ギニアに屬する島嶼を除く）——さりながらパラウ島群及其南西方に點在する小島は地勢上他のカロリン諸島とは隔絶し、發見の徑路をも異にするので、スペイン人は之をパラオと呼び、英人はペリウと稱へてカロリンとは別個の一群島と見ることもあつた。就中パラウ本島は言語、風俗も特異で、他のカロリン島民とは一列に見なし難い點もあるから、本書に於ては常にカロリンと區別して扱ふことにした。

呼稱

同じくカロリン群島に屬する諸島でも東端のクサイと西のはてのヤップとは約一千五百浬を距てて居るので、人情風俗は決して一樣ではなく、往々一括して論ずることの出來ぬ場合があるから、私は之を東西に區別し、ポナペ支廳管區を東カロリンと呼び、ルク及ヤップ管區を西カロリンと稱へる。尙之を細分する必要がある場合には西カロリン中ファイス——ウルチ及ヤップ群を除いたもの——を中央カロリンと呼ぶことにする。マリアナ群島は地形上メデニイジャ、アナタハンを境とし南北二群に分たれるが、北群は今では殆ど無住であるから、之を區別して說く必要がない。マーシャル群島は自然に二島列にわかれ、北東にあるものはラダク島列、南西に位するものはラリク島群と呼ばれる。

群島の名稱は上記の如く國の元首又は發見者に因んで西洋人が命名したのであるが、他の地名は土人の

呼稱を尊重して二、三原名の不詳なものの外舊名を保存した。唯パラウ（又はパラオ）といふ名のみはスペイン人が誤まつて呼稱したので此地方の固有名ではない。上記の如く一六九六年フィリッピン群島のサマルに漂着したカロリン人は自らパラウ人と名乘つたので、其後間もなく（一七一〇年）發見せられた此島群が右漂着人の鄕土であらうとの推定の下にパラウと稱へられるやうになつたのであるが、探檢船サン・トリニダットの水先人ソメラの記述によれば、同島の土人はパンロクと稱へたとあり、教父カントヴァの地圖にはパンレウと記載せられて居る（バーネー「太平洋航海史」による）。ドクトル・セムペルはパラオはブラウ（卽ちマレー語の舟）といふ語のはきちがへで、クラーン師が此地（サモル）でパラオとよぶ舟二隻に乘つて漂着したと報告したのを早合點したのであると論じたが（S第三五六頁以下）、臆斷の嫌がある。私はまだクラーンの原著を讀まぬけれども、ヘンリー・ジョーンズの抄譯によればブラウ（舟）をParaosとしてあることは事實であるが、「Palao 人卽ち或る未知の島嶼の人民」とある條には毫もブラウとはきちがへられた形跡は見えぬ。クレェーマーによれば（獨逸人類學協會紀要新第十二卷第一號九九頁）、他のカロリン島民は此地をパンノイと呼ぶから、ニウ・ヘブライド語のパノイ、ポリネシアのブロッと同義で、「冥界」といふ意味によつて命名せられたのであらうといふ事であるが、島民は名の起源を神話に託し、昔アコアブ神を欺き殺した所が、其身が化して島となつたので、之をプレラウ又はピレラウ（欺）と名づけたと稱して居る（坂本少佐調査及他の報告綜合）。然らば今ピレリウと呼ばれて居る屬島に此稱呼が殘つたものとせねばならぬ。英人がペリウと稱へるのは其訛であらう。いづれにしてもパラウ（又はパラオ）と呼ばれることを島民が不思議とせぬ所を見ると、一部の外國人から與へられた稱呼が弘通したのではなく、相當に由緒のあるものであらねばならぬ。案ずるにチャモロ語のパラウはカロリン諸島を意味し、カロリン人をグ・パラウ又はギ・パラウと稱へる。此稱呼はパラウアン（婦女）と關係があるらしく、縱ひ輕蔑して巾幗と稱へたのではないとしても、敬意を含んで居らぬことは明で、カロリン人自身の呼稱ではないやうであるが、チャモロ人に對しては自らパラウと名乘らざるを得なかつたであらうし、他の外國人に向つても此表現を用ひることが最も適當と考へられたので——恰も日本人が英國人に向つて自らジャパニースと稱するが如く——サマル島に漂着したカロリン人が自稱したのはあり得べきことである。同じくカロリン民族の一支流に屬するパラウ人がパラウといふ稱呼を容易に受けいれたことは不思議とするに足らぬのである。

パラウ島名の由來

改稱の弊

稱呼の忽にすべからざることは上記の通りである。然るに我海軍の占領後、學問に無理解な武人によつてルク島群の如きは盡く改名せられた。我軍隊は三十七八年戰役中にも樺太各地に新名を與へて學者の攻撃と輕侮とを招いたのであるが、十年たため間に其苦い經驗を忘れてしまうたと見える。爾餘の諸島も改名はせぬまでも彩帆（サイパン）、保鍋（ボナペ）といふやうな佳名（？）が與へられる筈であつたのを私の微力な反對が當路者に容れられて沙汰止めになつたのはせめてもの幸であつた。其他ローマ字でかき表はされた地名が土語の發音には無頓着に英語よみ、獨逸語讀みにせられたものも少くはない。ヤルート、トラックの如きは其甚しい例である。地名は民族史と至大の關係があるもので、我々はアマミ大島といふ

名によつて沖繩群島民がアマ（海人）民族の後であることを推察し、東國がアヅマと稱へられることによつて信州のアヅミ（安曇）と同一民族が占據したことを明にするのである。土名などはどうでもよいと言ふやうな邪見な取扱をせずに、大切に保存して後の學者によつて太平洋民族の源流といふ大問題が解決せられるやうにしたいものである。此見地から私は本書には出來るだけ正しい呼稱を用ひることにした。附圖に相違した地名があらはれるのは之が爲である。私は決して公稱を無視するものではなく、又參照の便宜からいうても現行の名稱を用ひるを可とすることを知つて居るのであるが、苟も「民族誌」と題した以上此くするのが義務であると信ずるのである。左に公稱との間に著しい相違のあるものをあげる。

公稱と固有名との相違

公稱	舊稱
ヤルート	ジャルート（ヂャルート）

ジャは本來チャの濁音であるから、ヂャルートとすべきであるが、現在の邦語ヂャの如く頗るジャに近いのみならず、之にヂャの假名を用ひても我々はやはりジャと發音するから、特に語原を區別して示す場合の外ジャを用ひることにした。

トラック	ルク

獨逸時代の公稱 Truk（ツルク）も正しい發音でないことはフィリッツの中央「カロリン語」中にも論じてある通りで、之を英語讀みにしてトラックと稱へたのでは原語の俤もなくなる。土人はツク、シュウク、ソウクの如く唱へフィリッツによれば schuk と綴りシュルクと發音するが最正しいといふことであるが、其發聲が、Rの訛であることは同人も認めた所であるから、舊時用ひられた稱呼に從うて私はルクとかくことにした——クバリーによれば其語義は「岩」といふことで珊瑚礁島（ファヌ）に對し岩島を意味するといふことである——但し實際の發音はシュ又はチュとルとの中間音を出すやうに心懸けねばならぬ。

アンガウル	アンアウル（ア・ナウル）

有名な燐礦島で、アンガウルとして日本のみではなく外國にも知られて居るが、クバリーは anyaur 又は angyauar と轉寫して居るから、アンヤウルとも發音したものと思はれる。島民は昔ネアウルと稱へたといふことであるが（支廳報告）ngau（ア・ナウ）は火といふ語であるから、或はア・ナウルと發音するのが正しいのかも知れぬ。セムペルも亦 ngau と綴つた。東方約二千浬を距てた燐礦島がナウルと稱へられることを思ひ合はすべきである。

春	島	ウオラ（又はモエン）
夏	島	トロアス（又はヅブロン）
秋	島	フェファン
冬	島	ウマン
日曜	島	ウラク（ラモルム）
月曜	島	ウドト

火曜島　ファラベグェダ(ファラベゲツ)
水曜島　ファイツク(トル又はトン)
木曜島　パタ
金曜島　ボーネ(ボルレ)(ファロ)
土曜島　オナムエ(又はオラウエ)

以上諸島は皆ルク群に屬し、我守備隊によつて改稱せられたものである。但し舊名稱は主として海軍海圖第二一〇九號に據るものであるから確實を保證しがたい。

島嶼の構造

諸島の構造は陷沒火山島と隆起珊瑚礁の二種で（拙著「太平洋民族誌」參照）、マリアナ諸島は皆前者に屬し、パガン島の如きは現に黑煙を吐いて居る。之に反しマーシャル群島は盡く珊瑚環礁で、海拔二十米を出でざる低砂島である。カロリン群島には兩者相半し、クサイ、ポナペ、ルク、ヤップは舊火山の名殘で、パラウ島群も之に屬するが、其南部にあるものは隆起の跡が顯著である。此等の火山島の周圍にも珊瑚環礁が取まいて居るが、ルク群の如きは其典型的のもので、洋中の一湖に大小十數の島嶼が浮んで居るかの如き觀がある。爾餘の諸島は皆純然たる珊瑚礁島である。

氣候

熱帶若くは亞熱帶に位して居るが故に諸島何處も四季を通じて溫暖であるが、北東風が多い爲に暑熱は大に緩和せられ、東部諸島はことに驟雨が頻繁であるので、甚だ凌ぎよいのみならず、降雨の日には冷氣をさへ感ずることがある。颶風は稀であるが、極めて強烈なものが襲來することがある。一九〇四年の風害は近年最慘憺たるもので、之に伴うて起つた海嘯が低砂島を洗うたのみならず、ポナペ、クサイの如きも人家、果樹を吹き倒され、多數の死傷者を出し、年を亙つて食物の缺乏に苦しまねばならなかつた。其當時は屍肉をあさる多數の鰐の群が襲來して、さらでだに窮境にある土人に更に多くの害を與へたといふことである。幸に我軍の占領後は右の如き大風害には遭逢せぬが、尙時々颶風による局地的損害を蒙ることを免かれぬのである。

フロラ

溫熱と雨露の恩により到る所植物はよく繁茂して居るが、低砂島に於ては勿論其種類が多くはない。最よく生育するのは椰子の樹で、之とパンの實とは島民の食料の主なるものである。パンの木（Artocarpus Communis）は船材、建築材としても最重要な木で、パラウ本島の外到る所に多く野生して居る。其外にバナナ、タロ芋（Caladium colocasia）が生育し、往々ヤム芋（Dioscorea spinosa）の類を見ることがある。

高地島の植物は之よりも遙に豐富で、海岸にはマングローヴが密生し、其奥には土人の手によつて栽培せられる椰子、パンの木、バナナ、ヤム、タロ、甘藷、アナナス（パインアップル）、レモン、橙、マンゴ、アノン（Annona squamosa）等が生ひ、往々玉蜀黍、珈琲、カカオの畑を見ることがある。グァム及ロタ島には昔の名殘として少量の稻が耕作せられる。河川の岸に生ふるニパ椰子（Nypa fruticans）の葉は葺料に適し、高地に產する象牙椰子の實は釦製造材料として輸出せられる。檳榔子は兵器其他の用材となり、其實はシリー（Chavica betle）の葉と共に刺激材として西部島民には缺くべからざるものである。タ

コの木(Pandanus)は美果を供する外に其葉は繊物、編物材料として貴重なもので、イチビの屬(Hibiscus、ボナペ語ではカラオといふ)の皮も亦最普く用ひられる繊維材料である。其他山林には樹竹棱楓蔓草の類が多いが、一々之を擧げることは煩はしいから、後章の記事に於て必要に應じて說明する。ヤップ、パラウの高原には丈高いアラン草、羊齒、蘚苔の類が多いが、ルク以東には之を見ぬ。大農園式栽培の行はれるのは殆ど椰子のみであるが近世ボナペにマニラ麻が植付られ、我軍の占領後カラオ、甘蔗の栽培を試みたものがあり最近南洋興發會社によつてサイパン島に甘蔗の大規模耕作が行はれ、チニアン、ロタ二島には棉が栽培せられるやうになつた。

ファウナ

動物の乏しいのは地理上當然のことで、フィンシの記する所によれば(「カロリン及マリアナ」第八頁以下)、野生哺乳動物は外國船が搬入した野鼠の外には大小二種の蝙蝠があるのみで、就中果實を食用する大蝙蝠はモルトロックのやうな低砂島にも棲んで居る。海棲哺乳動物としては海驢(Halicore)——人魚とも稱へられる——がパラウ近海に出沒するのみである(之については後編に記述する)。禽鳥は遙に豐富で從來の調査によれば八十種を算し、其大部分はインド・マレー系に屬するものであるが、パラウの Psamathia、ルクの Metabolus 竝にクサイの Aphanohimnus のやうな特種のものがある。鳥類の最多いのはパラウ島群で、五十六種を算し、內二十五種は陸鳥である。之に反してクサイは僅に二十二種を有するのみで、內九種が陸鳥に屬する。各島到る所に見受けられるのは翡翠(カハセミ)の類(Halcyon)、ミミヅク(Zosteropo)京燕(Muziagra, Rhipidura)鶫の類(Rectes)、椋鳥(Calornis, Aplonis)鷗の類(Ptilopus, Phlegoenas,

Carpophaga)等で、鳴禽は Calamoherpe syrinx(ツグミに以た鳥)があるのみである。

兩棲類及爬虫類も亦種類が少く、蜥蜴類中最分布の廣いのはマグイア及ゲッコと呼ばれる種屬である。ヤップ島には右の外 Hydrosaurus marmoratus に屬する一種の大蜥蜴がある。鰐は稀にパラウ島に現はれるのみで、他の諸島には絕無である。パラウ島には三種の蛇が棲息し、其他一種の蛙が發見せられた。

家畜はスペイン人によつて多くの種類がグァム島に輸入せられたので、同島では今でも山羊を飼育し、水牛を耕作に用ひて居るが、他の諸島には豚及鷄の外は普く分布するに至らなかつた——鷄はスペイン人來着以前から存したものではないかとも思はれる——ボナペ島には特種の犬があつたが、既に前世紀の始に歐洲種と混血して土種の跡を絕つた。モグモグ島ではグァムから輸入した猫が蕃殖し、此地から又他島に擴がつた。チニアン島は家畜の放牧地として聞え、一七四〇年代英國水師提督アンソンが寄港した際には無慮二萬頭を算すといはれたが、今では殘り少くなつた。グァム、クサイ、ボナペには宣教師の開設した牧場がある。就中クサイ島に於てよく蕃殖し、今日でも東部諸島に對する供給地である。ボナペ島の牧場は小規模で畜類の數も少く、私が同島を占領した頃には每週日を極めて屠殺し在留外人にわかつのみであつたので、南遣支隊は主として供給をクサイに仰いだ。パラウ島でも一八七三年難破英船アンテロープに對し種々援助を與へた謝禮として東印度會社から牛を寄贈せられ、セムペルが同地探檢の當時にはコリヨル島に牧場を設け多數蕃殖して居たといふことであるが、其後二十年を經て同地を視察したクバリー

は一も之に言及せず、我軍の占領の際にも殆ど皆無であつた。グァム島にはフィリッピンから輸入して山中に放つた鹿が蕃殖して居る。

禽獸の乏しきに反し魚介は種類に於ても數に於ても極めて豐富で、一々之を擧げることは出來ぬが、大體に於て熱帶地共通の品種が盡く蕃殖して居ると思へば大差はない。普通食用に供せられるものに關しては後編第三章に記述する。以前は鯨の類が多數棲息し、十九世紀の始め鯨油が盛に需要せられたころには英米の捕鯨船が夥多しく出沒し、ボナペ、クサイが其根據地とせられたことは既述の通りである。

三　住　民

人口の減少

現在の島民人口は大正十三年末の調査によれば四九、五七六人に過ぎぬが、往昔西洋人と接觸以前は之に數倍する人口があつた。ジェスイート史家ムリヨの記する所によれば一六六八年サン・ヴィトレス渡來當時に於けるマリアナ全島の住民の數は五萬を下らなかつたといひ（現在三、四三四人）。ボナペ島の人口も百年以前には約同數を算したといはれて居る（現在四、九七七人——一九一一年には三、二〇五人）。勿論精密な統計があつたわけではないが其人口の多かつたことは兩地に殘存する遺跡によつても說明せられる。マタラニム（ボナペ）の水城（ミンタ）の如きは多數の民衆を動かすことの出來た有力な君長でなければ企て得ぬことで、グァム其他のマリアナ各島に昔のチャモロ人が殘した多數の太石柱は氏神の社の多かつたことを物語るものである（第六目參照）。人口減少の原因は遺憾ながら之を白人の蹂躙と惡疫將來とに歸せねばならぬ。此事は獨りミクロネシアばかりではなく、太平洋諸島一般の現象で、拙著太平洋民族誌中にも論述して置いたことである。

毛髮、膚色

南北一千二百浬、東西二千五百浬の海上に粟散する此叢島にどうして人間が扶植せられたか、移民は何處から來た如何なる種族に屬するかといふことは同じく太平洋民族の一なる我々が攻究せねばならぬ重大問題である。本書の目的も亦此問題の解決に一步を進めんとするもので、言語學、考古學、神話學、宗教學、民族心理學、社會學、土俗學の各方面から觀察を下さねばならぬが、本目に於ては先づ住民の體質性格についてのみ述べることにする。

生物學の吾人に教へる所によると世界の人類は毛髮膚色骨格によつて若干の種族に分類し得られるといふことであるが、我ミクロネシアに在つて頗る其標準にあて嵌めることに困難する。島民の毛髮は漆黑硬直のものから渦のやうにちゞれた赤褐色の軟毛に至るまで樣々の階梯がある。一五二八年ラドロネスからフィリッピンに向つて航海したアルヴァルロ・デ・サアベドロは北緯一一度に於て白皙有髯の土人を見たといひ、又其次に發見した島の住民はフィリッピン人のやうな淡色であつたと報告して居る。實際島民の間に比較的色の白いものは少くない。敎父カンドヴァは之を西洋人との混血の結果であるといつたが、サアベドロの時代には白人にして子孫を此地に殘したものはなかつた筈である。其はともかくも現時に在つてはチャモロ人のやうな白人の血の多く雜つたものは勿論、中央カロリン諸島民の間にも淡色のものが少

くはないと同時に、墨のやうな黑さのものもあつて、其間の膚色は千差萬別である。額面肢體に毛の生ひたものもないではないが、鬚髯の蒙茸たるものの少いのは熱帶の生活に適するやうに自然が之を淘汰したともいひ得る。クバリーによれば（ゴーデフロイ博物館目錄三〇〇頁）モルトロック島群中テェ島の民は瘠形で髯が少いが、サトアン島民には頑丈造りで鬚髯の豐富なものが多きを占めて居るといふことである。身長も最大五尺九寸（ボナペ男）、最短四尺五寸（チャモロ女？）で、平均に五尺（クサイ）乃至五尺三寸八分（ルク）と報告せられて居る。サイパン病院長岡谷昇氏がカロリン人百十一名、チャモロ人百八十人について行うた調査及ボナペ醫院長塚本守久氏が調査した二十歲より四十一歲までの男子二十八名に關する報告は頗る有益なものであるから、左に之を表示する。

	チャモロ人	サイパン島カロリン人	ボナペ人
身長			
最長	一七七・〇（サンチ）	一七二・〇（サンチ）	一七八・六（サンチ）
最短	一三五・三	一四四・六	一五四・八
平均	一五六・七	一五六・〇	一六五・七
體重			
最重	九二・〇〇〇（キロ）	七七・〇〇〇（キロ）	八一・六〇四（キロ）
最輕	三二・二〇〇	四二・五〇〇	五一・三一五
平均	五八・六九一	五七・八四六	六二・六三一

體格及特徵

特徵

頭髮。	褐黑色又は赤褐色、粗、短、柔、細曲波狀	黑色、多、密、長、剛、大曲波狀	黑色、又は平直
鬚髯。	口髭あるもの多し、頰顎の毛を剃り、八字髭を蓄ふるもの多し	口髭、顎鬚、頰髯あるものあり、剛毛平直	口髭、剛毛平直
恥毛。	多毛、黑、細、螺旋狀、臍に連續するもの多し	多毛、密、黑、短、螺旋狀、臍部に連續す	多毛、密、黑、細、螺旋狀、臍に連續す
膚色。	黃褐色。白人との混血は黃白色	赤褐色	暗銅色にして褐色調に富む
眼。	瞼毛長く虹彩は黑、茶又は蒿色、開裂廣、直。上眼瞼に襞あるもの多し	瞼毛長く、虹彩黑色、開裂廣、直	開裂歐人型に近し、虹彩褐色、色素含量邦人と略同等なり
鼻。	根部高く幅狹し（婦人には低く平なるもの比較的多し）、梁狹く直又は輕凸出、尖前向。翼高隆起、孔中等大	根部中等の廣さ、稍平坦、梁廣く直、尖前向。翼低、厚、側面膨隆、孔大	鼻梁骨餘り高からず、横徑稍大、鼻孔概して大、扁圓形なるもの多し
耳。	耳輪緣上方に著明。耳垂小、癒著、婦人は耳垂に貫孔するもの多し、孔極小、主として金環を吊る	耳輪緣上方に著明。耳垂大、遊離。耳垂の貫孔主に左右對稱的にあり、五十錢銀貨大の大孔あるものあり	耳指數邦人の其に比し稍大なり
口。	口裂中等大。上唇、下唇殆ど同等の厚、上緣複弓形	口裂大なるもの多く、上唇よりも下唇の方厚し	一般に稍堤狀をなし、口裂大

齒。強、殆と齲齒なし。檳榔子を嚙むものの齒は咀嚼平滑となり且齒冠及齒頸は赤黒に着色す ——同　上

右の外ルク島民に關する調査は大體サイパンのカロリン人と同樣で、唯鼻梁骨高く歐洲人に似たものがあると報告せられて居る。爾餘の主要島にも醫官が駐在して居る筈であるが、調査の勞を吝んだことは遺憾とすべきである。骨格は概して堅牢で、肉附は餘り豐ではないが、マゼラン一行のピガフェッタの記する所によれば當時のチャモロ人は平均歐人の身長よりも高く、甚肥滿して膨れたやうに見えるにも抱はらず、強健活潑で、動作輕捷敏速であつたとある。現在の住民は一見した所ではチャモロ人——就中婦人——は容色が優れ、之に反して其隣島ヤップには色の黒い醜いものが多いやうである。

頭蓋骨

ミクロネシア人の頭顱に關しドクトル・クラウゼは漢堡ゴーデフロイ博物館に收藏する髑髏について精査の結果、次の如く論述した（一八八一年同博物館目錄五五七頁以下）——私は便宜の爲記述の順序をかへた。

クラウゼの發表

カロリン人の頭顱の平均容量は一三〇四・九立方サンチで、最大一四八〇、最小一〇八〇の間を上下する。婦人の腦容積平均は一二六一、男子のものは一三一二で、其間僅に五〇立方サンチの差があるのみである。一般の寸法は次の通りである。

	平均	最大	最小
長	一七〇・〇（サンチ）	一九七（サンチ）	一六二（サンチ）
幅	一三五・一	一四九	一二五
高	一四〇・三	一四九	一二八

右によるとインデックスは左の如く算定せられる。

長、幅指數	七五・二
長、高指數	七八・二
幅、高指數	一〇三・八

頭蓋は形整ひ骨の接目に喰ひ違ひのあるものは少い。顏門に岩狀化骨のあるものは八個で、內四個は兩側に之を有し、之を百分比にすれば一七一%になる。一頂骨（オス・アピシス）及顏頂骨間に一剩骨（オス・インテルパリエタル）あるもの二個が發見せられ、ステノクロタフィー六、突顎のものが九つを算する。

群島各地について觀察する爲に左に長幅指數順に序列する。

	個數	容積（立方サンチ）	長幅指數	長高指數	幅高指數
ボナペ	八	一、二六一	七二・二	七五・八	一〇四・二
モルトロック	一六	一、二九二	七四・〇	七九・一	一〇六・一
ルク	一八	一、三一五	七五・五	七七・四	一〇三・四
ヤップ	三	一、二五〇	七八・五	七九・一	一〇〇・七

三住民

・パラウ　一　一、三一〇　八三・八　八五・六　一〇七・一

右の如く長幅指數は東から西に至るに從つて增大し、段々短頭顱の人種の影響が加はつて行くことが明示せられ、カロリン群島の西隣諸島卽ちフィリッピン及香料島（セルワカス）には著き短頭人種が棲息して居るから、カロリン人の顱幅が西に赴くに從ひ增加するのは其影響と見ねばならぬ。最東方に位するボナペ人の頭顱は其長頭なることに於ても、他の比例に於てもニウ・ブリテンのものに類する。群島の中央に位するルクでは既に長頭の域を脫して中頭顱たることを示し、其西方に在るヤップ及パラウでは、調査に供せられた髑髏は甚少いけれども、判然短頭顱である。此事は旅行者就中セムペルによつて吾人の既に知り得た所である——編者曰く、セムペルは僅に一個の髑髏を得たが、其が果してパラウ人のものであるかといふことについては尙疑を殘したのみならず、之を最長ではないが可なり高度の長頭顱であると記述して居る（S三六三頁以下）。クラウゼは何か思ひちがひしたのではあるまいか。マーシャル島民の髑髏は僅に二個を有するのみであるから、之を以て代表的と見ることは出來ぬが、參考の爲左に揭げる。

長	一七八・五	長幅指數	七六・一
幅	一三六・〇	長高指數	七九・七
高	一四二・五	幅高指數	一〇四・七

マーシャル島の東方に位するギルバート島民の髑髏二十二個について檢するに、其容積は平均一三二〇立方サンチで、一五二〇と一〇七〇との間にあり、男子の平均一三五二・五に對し、婦人の平均は一二三六・六で、一一六立方サンチ少い。一般寸法は次の通りである。

	平均	最大	最小
長	一八〇・九（サンチ）	一九四・〇（サンチ）	一六五・〇（サンチ）
幅	一三三・六	一四五・〇	一四一・〇
高	一四〇・七	一五四・〇	一三二・〇

右による指數は長幅率七三・八、長高率七七・七、幅高率一〇四・五で、之をニウ・ブリテンのものに比するに長さは同樣であるが、幅二・七サンチ高さ三・一サンチ多い。接目の不正なものは稀である云々。

之と殆ど時を同うしてドクトル・ウィルヒョウ（ウィルヒョウの調査）も亦一八八一年のプロイセン王國學士院月報に「ミクロネシアの髑髏について」といふ論文を發表した。私はまだ其原文を讀まぬがスペインの軍醫カベザ・ペレイロが其著「ポナペ島」中に引用した所によると、ウィルヒョウが檢測した各島群別長幅指數は左の通りである——參照の便宜の爲、上設クラウゼの測定を括弧內に記註した。

ギルバート群島	七五・一（七三・八）	
マーシャル群島	七六・一（七六・一）	
ポナペ島	七二・二（七二・二）	
三住民		

モルトロック島	七四・〇（七四・〇）
ルク島	七三・六（七五・五）
ヤップ島	七八・五（七八・五）
パラウ島	八三・八（八三・八）

ウィルヒョウの用ひた材料中ゴーデフロイ博物館以外から得たのはギルバート及ルク島の若干數のみであるが、ルク島について同氏の下した結論は、ローランド・ヂクソンが其著「人種史」中に引用した所によると、同島には原ネグロイト型が大多數を占め、前アルピン型之に次ぎ、カスピアン―地中海型は極めて少いといふことである。ウィルヒョウのいふ原ネグロイト型はフィリッピンのネグリトについて調査したものを意味するやうであるが、セムペルによればウィルヒョウが檢測に用ひた髑髏は全部マニラに最近いマリヴェレス地方から出たもので、マレー人の血液が多量に混じて居るから純ネグリトと見ることは出來ぬといふことである（S三六三頁）。いづれにしても頭蓋骨のみを以て人種の異同を論ぜんとするは危險であるといはねばならぬ。

チャモロ人の頭蓋指數

チャモロ人の頭蓋骨についてはカペザ・ペレイロの精密な檢測が上述の著書中（第一〇〇頁）に表示せられて居る。表に擧げられた頭顱は五個であるが、一個はボナペ人のもの、一個は未成年のものであるから、之を省き他の三個の長、幅のみを示せば次の通りである。

出所	長	幅	長幅指數
アグリガン	一八四	一三五	七三・三一
サイパン	一八八	一三四	七一・二七
アガニヤ	一九三	一三七	七〇・九八
平均	一八八・三	一三五・三	七一・八五

サイパン病院長の岡谷氏がチャモロの成人一八〇名の人頭について測定した所によると長幅指數は最大八九・六五最小六〇・五二で、平均七四・五〇であつたといふことであるが、之を髑髏に引直すと若干指數を低め、約七三内外となるから上記カペザの測定に近づくのである。此民族にはスペイン人、メキシコ人、タガル人等の血が多く混じて居るから、之を純チャモロの典型と見ることは出來ぬけれど、西方に赴くに從つて短頭顱分子が增加するといふクラウゼ說は動搖するやうに思はれる。僅々三個のヤップ髑髏と一個のパラウ髑髏とを以て西部島民は短頭顱であると認定することは危險であるといはねばならぬ。此道には門外漢なる私が之を論議することは世を誤る虞があるから差控へるが、私は各島の醫員諸君が此重要な問題に向つて寄與するに吝ならざらんことを切望するのである。

壽齡

島民は比較的長命で、大正十三年度調査の南洋群島現勢要覽（十五年刊行）によれば、六十一歲以上のものが總人口の三・三%を算し、ヤップ島には八十一歲以上のものが男子七人、婦人十人と統計せられて居る。グァム布教開始當時のスペイン僧の記述によるも、七十歲以上の矍鑠たる老人が多かつたといふこと

であるが、土人の年齢記憶が果して精確であるかといふことも疑問であるのみならず、年よりも早く老衰するのが例であるから、打見には七、八十に見えたものでも、其實五十代であつたかも知れぬ。ことに婦人は壯時が甚短い。娘の頃には生々として居るが、婚嫁後數年を經ると甚しく容色が衰へ、脂氣がぬけてしまふのである。我國に於てすらも高齢者と稱せられるものの實際を調べて見るといくつか掛値のあるのを發見することがあるから、戸籍の備はらぬ此島地では故意又は無意識の誤算の多いことを念頭に置かねばならぬ。

生産死亡率

文明人と接觸の結果殆どあらゆる疾患が侵入したが、ペスト、コレラの如き惡性の傳染病毒が植付られなかつたのは喜ぶべきである。一八五四年デルタといふ一英船が天然痘患者一名をボナペ島ロンキチに置去りにしたことがある。土人は親切に之を介抱したが、宣教師の戒に背き、其身についた被服具を着服した爲、忽ち全島に病毒が蔓延し、人口の三分の二を失うた。此やうな慘事は爾來再び耳にせぬが、島民の總人口は我軍の占領後に於ても大なる增加を見ぬのである。上揭の現勢要覽によると大正十三年度の死亡數は生産數を超過（生産一〇四五、死亡一一一七）して居る。生産率の少いのは避姙、墮胎の習俗が尙廢絕するに至らぬからで、チャモロ人は概して兒女の多いことを喜ぶといふことであるが天然食料品の乏しい離島に於て人口の增殖を欲せぬことは當然であり、淫樂を人生の最大快事とする島の女が屢〻懷姙することを厭ふ事情も亦之が一因であらう。嬰兒棄殺（インファンサイド）の風習はないやうであるが、小兒の死亡率は極めて高く、ルク島の如きは七、八人の子を擧げるが、生育するものは平均三人であるといはれる。現勢要覽によれば大正十三年に於ける十歲以下の小兒の死亡率は實に二・九%で、平均死亡年齢はサイパン病院の調査によるに、大正十二年から十五年まで四年間の死亡者一四七名について廿二歲十一ケ月强を算定し得たといふことである。

性格

島民の性質について從來報告せられた所によれば親切溫和であるとするものが多い。例へば英船アンテロープが一七八三年パラウ島に難破した時の如きは、酋長はあらゆる援助を與へて、英人をして新に小船を造つて本國に歸航することを得しめた。さりながら夙にマゼランによつてラドロネス（盜賊）といふ名を負はされたやうに、島人には他人の所有權を尊重するといふ觀念が概して乏しいやうである。外人との間に惹起した葛藤は多くは之に因するもので、殺伐な舊時の歐洲海員により往々殘虐な制裁を加へられたが、此惡習は寧ろ島民の社會組織と道德觀念の相違に因するといはねばならぬ。往昔島民の間には一種の共產制度が行はれ、何物によらず一人が之を獨占して他に之を頒たぬといふことは人のものを盜むよりも尙惡いとせられた。此は小島國の事情が然らしめたので、一人の有力者の兼併を許したら多數は餓死せねばならなかつたのである。神樣の眼には他の國土の富を羨んで招かれざるに移住を企てるものよりも、有り餘る資源を有しながら他國民の來住を拒絕するものの方が貪慾に見えるであらう。此理窟は歐米人には分らぬやうであるが、ミクロネシア島人はよく心得て居た。彼等は所有權は認められて居ても、他人が請へば之を頒つべき義務があるとし、請うて與へられざる場合には之を盜むも妨なしとしたのである。首陽山の蕨を食うて餓死を待つやうな潔癖は島民は持つて居なかつた。船長ウィルソン以下アンテロープ船員

が厚遇を受けたのは其所藏の鐵材、鐵器其他土人の好むものを吝まなかつたからで、十數年の間パラウを根據として貿易の利を占めた船長シェーンが同じパラウ人に殺害せられたのも依估の沙汰が多かつた爲ではあるまいか。此船長は土俗學に寄與する所の多かつた人であるが、ドクトル・セムペルの摘發した所によると少くとも島民に對して忠實ではなかつたやうである。サン・ヴィトレスの殉教以來、チャモロ人の凶手に斃れた教父、傳道士の數は少くはなく、ソンソル島に上陸した教父デュペロン一行の蹤跡は暗に葬られ、カロリン諸島を世界に紹介したカントヴァはモコモグ島で非業の最後を遂げたことは既述の通りである。ボナペ島民はスペイン人を惱したのみならず、一九一〇年ジョカーシに於て獨逸官吏虐殺の事變を惹起した。右の如き事例を擧げると土人は頗る獰猛のやうにも思はれるが、其は寧ろ感情の行違ひから爆發したもので、言語、風俗を異にし、意志疏通を缺いた場合に起り易いことで、文明人の間にも此種不祥事を見た例は少くはない。喧嘩鬪爭の因となる飮酒賭博が從前から禁ぜられて居る爲もあらうが、島民間の殺傷事件は極めて少く、大正十三年中に警察官の手にかゝつた件數はサイパンを除けば僅に十二件のみであつた——同島については傷害五件をあげてあるが、此地には在留內地人の數が島民の一倍半を算するから、五件全部でなくとも其二、三は邦人の犯行と見なさねばならぬ。——勿論部落內で落着を見た事件も多からうが、大事に至らなかつたことを見ても、彼等に平和の民といふ名を與へ得ると信ずるのである。クバリーはパラウ人を奸譎、不信、盜盜、怠惰と評し、フィンシは之に裏書して、カロリン人の處世の銘言は「少く與へて多く取る」ことにあるのであらうといつたが（「カロリン及マリアナ」第二〇頁）、右の如き非難は歐洲人相互の間にも耳にすることで、怠惰といふ一點を除いたら基督教徒が常に猶太人に對して用ひる評語である。智能の低い民衆は利己心を內に包むことが出來ぬので、貪慾不信、奸譎が露骨に觀取せられるのであるが、其因をなす利己の念は智慧の木の實の副作用ではあるまいか。統計の示す所によると大正十三年中島民の刑事事件によつて體刑に處せられたものは三十人に過ぎぬが、全人口に於て十分の一を出でぬ在留邦人中から五十九名の受刑者を出して居るのである。私は懶惰といふことを除いては島人は概して善良なる民であるといふことに躊躇せぬのである。

四　言　語

ミクロネシア諸島人の言語は大體に於てマレー・ポリネシア語系に屬するといはれて居るが、決して各地同一の言葉を用ひて居るのではなく、方言以上の相違があり、ことにチャモロ語の如きは一種獨特の語彙をもつて居る。マーシャル語及パラウ語も亦他のカロリン諸島の言語に較べると、國語とアイヌ語以上の相違がある。爾餘のカロリン諸島に於ても各島多少の差があつて遠隔の地とは互に意志を通ずることが困難のやうであるが、大體に於て之を左の五群に分ち得る。

一、クサイ語。　八百有餘名の同島民のみに用ひられる。但しボナペ語に近い。

二、ボナペ語。　ボナペ（人口約五千）の外に屬島ピンネラップ、ナチック、モキルに通用する。

三、ヌクオル語。純然たるサモア語で、約六百年前ポリネシアから移住した此島の土人（人口約一二〇）のみに用ひられる。

四、中央カロリン語。ルク島を始とし、モルトロック、ハル、ラムトリク、オレアイ、ウルチ群島等ポナペ以西、ヤップ島の東方に位する各島及パラウ島の南方に隔在するソンソル、メリル等の離島民、並にマリアナ群島に在住するカロリン人に用ひられる言語で、約二萬の民衆の間に普及して居る。勿論其中に種々の方言があるが、互に全然不可解といふ程の相違はない。

五、ヤップ語。ヤップ（人口約五千）及ヌル島に於てのみ用ひられる。

右の如き多種多様の言論を一律に論ずることは不可能であるが、之を羅列比較することも亦徒に煩を加へるのみであるから、私はチャモロ、マーシャル、パラウ語の外にカロリン語の代表として中央カロリン語（以下簡約の爲ルク語と稱へる）を選び、此四語について本書の目的——卽ち民族の實相を描き其源流の探究に資する目的——に必要なる程度に於て私の管見を述べる。

諸民族の言語を記錄して永久に傳へることは學術上極めて重大なる意義がある。其故に現に朝鮮語、アイヌ語、沖繩語の研究が勃興し、臺灣蕃語の多きは年來巨額の經費を支出して採集せられて居るのであるが、ミクロネシア諸語のみは今日まで言語學者間の問題とせられて居なかつた。新附の民なるが故に繼子扱せられるのは甚だ悲しむべきことであるので、私は不完全ながら「チャモロ語の研究」一編を世間に發表し（鄕土研究社刊行）、尚健康が許すならば、他の諸語にも指を染めたいと考へて居るのであるが、其は言

語學の領域に屬するもので、こゝに論ずべきことではない。本書に於てはミクロネシア諸語とはどういふものかといふ概念を與へ得ればよいのであるが、口頭で例をあげることは比較的容易でも、文字に之をうつらはすことは至難の業である。最近似した語をあげてタガル語に類して居るとか、サモア語其儘であるとか云へば極めて簡單であるが、タガル語、サモア語を知らぬ人に取つては何の役にも立たぬ。教父カントヴァは漂着カロリン人の言葉を聞いてアラビア語から出たのであらうと報告したが、其は此宣教師がアラビア語に熟達して居なかつた證據で、語音に似た所があるからといつてイタリア語と日本語とを同一視することは出來ぬ。其故に他の類似言語を擧示して説明にかへることは不可能でないとしても無意義の業であるといはねばならぬ。凡そ言語には根本となる二つの大要素がある。其は語音と語法とである。此二者の一が相違して居る場合には縱ひ語原は同じものでも、若くは同一語を用ひても意志を通ずることは出來ぬ。例へば英語のジョセフは獨逸にあつてはヨーゼフ、スペインに於てはホーゼといはねばわからぬ。「アイはユーをラブする」というても、英人は恐らくは英語を話して居るとは思ふまい。外國（又は他民族）語の概念を得るといふのは此相違の要點を手取り早く會得することである。之が爲には自國語を標準として比較するのが最便利で且有效である。然るに我日本では近來自國語を説明するにすら歐洲語の文法をかりて居るほどであるから、アイヌ語、琉球語の如き國語に極めて近い言語ですらも横文字と西洋の表現法を用ひて説明せねば承知せぬ傾がある。然らば讀書子は皆歐洲語に堪能であるかといふに、僅に二三ケ國の語を知つて居るといふだけで、其も甚覺束ない程度であるらしいから、消化の度合は頗る疑問である。

日本人が支那人、フィリッピン人、邏羅人、朝鮮人などに比して著く外國語を覺えることが下手であるのは右の誤つた方法に累せられて居るからである。私はこゝで此のやうな議論をするは傍題に亙る嫌があることを承知して居るけれども、ミクロネシアの言語について概觀を逸べるに當り、私が横文字と歐洲語の表現とを用ひぬ理由を豫め斷わつて置く必要があると信じて敢て饒舌を弄したのである。

國語との比較

ミクロネシア諸語にも各特有の語音と語法とがある。個々の語は彼此入り雜つて居るが此兩者は嚴然として互に相侵すことはない。さりながら本初は同一系から分れたものなるが故に、仔細に之を吟味すると其間に一路の氣脈が通じて居て、決して支那語と日本語との間に於けるが如き大なる溝はない。其故に私は上揭の四標準語（チャモロ、パラウ、ルク、マーシャル）を別々に論ずることなく、之を一括して國語の語音及語法との相違を比較する。私にとつても初ての試みであるから、成效を期し難いが、尙讀者に若干の概念を與へ得れば幸である。更に明瞭なる印象を得たいと希望せられる向は私の「チャモロ語の研究」を一讀するの勞を執られたい。

語音。　ミクロネシアの語音中には我々の耳に聞なれぬものが少くはないが、ことにパラウ語の發音は聽取が困難である。ワルレザー僧正の「パラウ辭典」に擧げた子音は十二音に過ぎぬのであるが、ドクトル・セムペルが二十一子音を算すると記述した（S三七〇頁）のは同じ原音を色々に聽取つた爲であらう。私の得た報告中にも同一稱呼が一頁中に三樣に記してあるものがあつた。さりながら根本的には大なる相違はなく、土人が國語を學ぶに當り甚しく發音に困難することもないやうである。一般に清濁の別は判然

濁音

せず、場合によつて清音にも濁音にも發音する。其は恰も邦語のカ行、サ行、タ行、ハ行と同樣である。但しザ、ジ、ズ、ゼ、ゾといふ音は用ひられぬ。

チャ、シャ

チャモロ語のチャ行の音は東部に至るに從ひシャに近づく。ことに之を濁る場合にはジャ行に聞える。例へばポナペ島の一地方ジョカーシは本來チョカーチであつたのであるが、チョを濁つてジョと訛り、チはシと轉音して今のやうに發音せられるのである。邦語ではヂャ行は略ジャ行と同樣に發音せられるから、言語學的には土音をかきあらはすにはヂャを用ひる方が語原を知るに便利なことが多いのであるが、清音の場合卽ちチをシと發音するが如き場合に不都合を來たすので、本書ではジャ行の假名を用ひることにした。但しジャルートの如きもローマ字でかく場合には ja ではなく dja とせねばならぬといふことを念頭に置くを要する。ルク語ではチの音が勝つて居るやうであるから、尙チャ行の假名にうつさねばならぬ場合もあるが、之も齒をかみ合はせて發音するやうに心懸けねばならぬ。ルク及チャモロ語では此音を濁ることはない。パラウ語には右のチャ又はシャ音は全く存在せず、唯ウ韻につゞくサ行がシャ行に聞えることがあるのみであるが、ダ行、ザ行は共に其中間を取つてズァ行に發音する。西洋人は之をかきあらはすにdz又はthを用ひて居る。本書ではズァ、ジ、ズ、ズェ、ズォを以て表現することにした。マーシャル語ではハ行半濁音卽ちpは音便に於てあらはれるのみである。

パラウ特有の語音

パラウ語にはカ行とハ行の中間音卽ちローマ字の kp を以て表はすべき語音がある。我々の耳には場合によりカ行ともハ行とも聞え、婦女子の發音はア行とさへ誤またれる。例へば神は Khalith であるが、

セムペルは常に Kalid とかいた。フナドの神がクナドの神とも發音せられた所を見ると、我國にも昔は此音があつたと見えるが、今では發音し得ぬので Khailar, Charbin の如き地名をもハイラル、ハルビンと稱へるのである。

鼻音

ナ行の鼻音は叢島各地共に顯明に發音する。我國にも昔は此語音が認められて居たらしく、今でも之を發音することがあるのであるが、之を表示する假名がないから、本書では常にゴシック字を用ひて之を區別した。現在アンガウルと呼ばれて居る燐礦島の正しい稱呼はアナウルらしいといふことは上述の通りである。パラウ島には右の外タ行、カ行にも鼻音があるといふことであるが、之を假名でかきあらはすことは困難であるから、區別をせぬことにした。

ラ行の發音

マーシャル語のラ行——各地ともにラ行は l とも r とも聞える——は色々に發音せられる。即ち普通のラ、リ、ル、レ、ロの外にルの音を重ねてルラ、ルリ、ルル、ルレ、ルロと發音するやうに聞えることがあり、又舌尖を齒につけて之を引くときに生ずるラ行の音もある。前者はルを小く頭書して之を示すことが出來るが、例へばエァルは「歌」であるが、エァルルは太陽を意味する——後者をかきあらはすことは困難である。ルクでは此音が顯著でシュ（又はチュ）とルとの中間を發音するかのやうに聞える。西洋の發音符中（フオネチツクサイン）にも之に該當するものがないので、從來思ひ〳〵の綴字法を用ひた。既述の如くルク島のルの音も亦之に屬し、サイパンのカロリン人の發音を聞くとシュウクというて居るやうであるので、フリッツは sch を以て之を表現するのが最近いと論斷した。强て我假名を以て表示せんとすればシュルクとでもかくべきであるが、甚まぎらはしいのみならず、一々の原語を調べて見ることも不可能であるから、本書に於ては多くの場合報告者の音譯を踏襲し、明白なものに限り、特にラ行のゴシック字を用ひて之を示すことにした。但しルクは上記の如く單にルクとかく——近頃我國の言語學者間に發音符制定の議があるさうであるが、新領土内に右の如き特異の音のあることを閑却せぬやうに希望する。

拗音撥音

右の外拗音としてはファ行がチャモロ語及ルク語に用ひられ、ニャ行はチャモロ語のみに存在する。撥音は邦語と同じくムとン——委しくいへばンは口内音 n と喉内音 ng との別があるのであるが、語義を離れて純發音上どの程度まで區別し得られるか疑問である——の二種で、獨立した語音である。其故にムマン（ルク語、馬鹿）、ムライ（パラウ語、舟）、ンナム（マーシャル語、岩礁中水深き所）の如く語頭にも位するのである。

母韻

母韻即ちア、イ、ウ、エ、オの音は殆ど邦語と同じく、場合によつて長短伸縮の別があるのみで、五韻以外の母韻があるやうに思はれぬ。獨逸人によつて ä、ö、ü であるとせられる母韻は ea, io, iu の如き重母韻か、然らずば音便によつてア及オがエに轉じたものといひ得る。アクセントのつく場合の外母韻は彼此相通じ、ことに語尾にあつてはウ韻化することが多いので、語尾に此の如き語音を有する場合之を閉音節と見なすものがあるが頗る疑問である。例へばマーシャル語のラブ（犬）はローマ字で lab とかき、一音節であるといはれて居るが、其が疊語となつた場合には lablab ではなく明に labe-lab である。即ち lab は一閉音節ではなく la-bu の二語音（二開音節）と見るべきである。今から十年ばかり前へブライ語

學者の左近義弼氏が邦語のアリマスは a-ri-ma-su ユクは yu-ku の如く綴りuを省くべしと提案したことがあるが、ローマ字論者の間にすら賛成を得なかつたのは、アリマシタ、行ケと變化することが餘りに明白に知られて居るからであらう。マーシャル、カロリンにも土人の言語學者があつたなら、右の閉音節說に容易に屈服しなかつたことと思はれる。チャモロ語に於ては語尾の母韻が明瞭に響く場合が多いので、幸にも誤解を免かれた。

語法。　多くの場合一語だけでは意を通ぜぬから二つ以上の語を連ねて用ひねばならぬことがある。此場合語を結合又は排列する方法を語法と稱へる。假に二つの語についていへば其相互關係は一方が他の語の締めくゝりをつけるに用ひられるが例であるから、私は之を「結び」と呼び、之に對して他を「かかり」と稱へることにして居る（拙著「日本言語學」一二頁）。例へばノミミヅ（飲水）といへばミヅが結びである が、水ノムといふ時には水はかかりとなるのである。日本語では右の二例のやうにかかりが常に先行し、結びが之に從ふのであるが、ミクロシネアでは其が反對で、常に結びが先行する。左に二三の例をあげる。

語排列上の相違

（チャモロ語）。グアト（向）イ・カマリン（舟庫）
（ルク語）。サマラプ（サム、ラプの約）——父、大卽ち祖父
（パラウ語）。アナルク・エル・ヂル（女の子）——ナルクは子、ヂルは女
（マーシャル語）。エス（彼）チレ（燃）マルコ（叢）レ（其）ミス（枯）——枯れた叢を燃す。

右の如く邦語と排列の順序が相反するのは語法上の根本的相違で、個々の語には同原から出たと思はれるものが少くないにも拘はらず、全然別系の語と見なさざるを得ざる所以である。

排列順序の相違は上例に於て見るが如く熟語の構成にも（ルクの例）、完全なる章句にも（マーシャルの例）現はれる。同じ理由によつて邦語にあつては接尾語を以て示す場合に接頭語を用ひる。例へばチャモロ語タニスは「泣」の意であるが、之は接頭語ガをつけたガタニスは「悲シゲ」（ゲは接尾語）を意味する。又邦語スナトリ（漁）は渚魚取で、トリ（取）といふ語を接尾語的に添付したものであるが、之に該當するチャモロ語はエグイハンといひ、グイハン（魚）にエ（行爲を表示する接頭語）を冠したもので、文字通りに譯すれば取魚である。上例に示すが如き接合分子（アフィッキス）中には結びになるものとかかりになるものとがあるので、日本語にもミクロネシア語にも接頭語も接尾語も備はつて居り、半可通の語學者がいふやうに接頭語の有無多少によつて兩者の語系を區別することは出來ぬのである。

接頭語と接尾語

語構成上日本語とミクロネシア語との類似は多く疊語を用ひることにある。例へばマーシャル語では上記の如く「大」をラプといひ、之を重ねてラペラプとしても用ひることが多い。ラリク列の主島アイリンラプは大々國（アイリンは洲又は國の意）である。其外疊頭疊尾語も屢〻用ひられるが、一々例を擧げることは煩はしいから省略する。屈折就中語頭屈折も亦チャモロ語には行はれるのである。

疊語

バラウ語ではアといふ冠詞が殆どあらゆる名詞に冠せられる。例へばムライであるが、通例ア・ムライと稱へられる。此アは他の諸島でも之を用ひた形跡があり、邦語のアサ（麻）、アイロ（色）等のアも之に屬するもので、アル（或）、アレ（彼）などいふ不定稱の語幹アと同原ではないかと考へられる。チャモロ語で

冠詞

はイといふ定冠詞を用ひるが、其原意は此（其）で、邦語のイモ（妹）、イヲ（魚）等のイと相似た趣がある。

動詞的用法

ミクロネシア語を通じて動詞と名づくべき特別の品詞は存在せぬ。多くの語は名詞にも動詞にも時としては副詞、形容詞にも用ひられるのである。此事は頗る漢語と趣を同うし「食」といふ語が食物の意にも食用をいふにも用ひられるやうに、チャモロ語のナ、ルク語のムノ、マーシャル語のマーネ（以上皆「食」の意）も使用せられるのである。動詞的に用ひられる場合には代名詞を語頭若くは語尾に接着し、又は之を連用することにより、或は他の接合語を連ねて之を區別するのであるが、語其ものには何等の變化——接合によつて起る音便の外——を起さず、不完全ながら他の語の助によつて「時」と「法」とを表現するのである。

代名詞

之に反し代名詞は異常の發達を遂げ、其自身に精細な區分があるのみならず、之によつて格、數及活用が表現せられる。其故にミクロネシア語を學ぶには此品詞を特に研究せねばならぬと同時に、之によつて語法の概念が得られるといつても過言ではないのである。私は此短い一節中に諸島語の論廓を描き出すことの困難を感じて色々と思ひ煩らうたが、代名詞を略敍することによつて幾分か目的を達し得られると考へるのである。

ミクロネシア語の人稱代名詞には我、汝、彼といふ三者の外に之が複數を表現する色々の稱呼がある。例へばマーシャル語では次のやうな語が用ひられる。

我。　イ（イシ）又はナ
汝。　コ（クォジ）又はクェ
彼。　エ（エジ）
我々。　ジェ
我々二人——ジェロ、我々三人——ジェジル（ロは二、ジルは三、以下右の如く數を追ふ）、我々皆——ジュイジ。
我と汝。　キジ
我と汝二人——キジロ、我と汝等と三人（我と汝等二人）——キジジル……我と汝等皆——キジュイジ。
我と彼。　キム
我と彼と二人——キムロ、我と彼等と三人（我と彼等二人）、キムジル……我と彼等皆——キムイジ。
汝等。　コム（コミジ）
汝等二人——コムロ、汝等三人——コムジル……汝等皆——コムイジ。
彼等。　レ（レジ）
彼等二人——レジロ、彼等三人——レジル……彼等皆——レジュイジ。

キムとコムとは自分の外に相手又は話のうちにあらはれる第三者を包括するもので、邦語にもインドゲルマン語にも之を見ざる表現法である。西洋の言語學者は之を第一人稱複數中に加へ、含他的（インクリュ

自他稱

シーヴ）といふ名を與へて區別して居るが、私は之を一人稱と見ることが抑も無理であると思ふから、自他稱といふ名を與へた。マーシャル語のやうに細別はせられて居らぬが、他の諸島語にも自他稱は必ず存在する。卽ちチャモロ語ではヒタ、ルク語ではヤム、パラウ語ではキドと稱へるのである。邦語のオノ（己）も亦アナ（我汝）の轉化で、本來は自他稱であつたと思はれることは拙著「日本言語學」に論じた通りである。

代名詞の六形式

右の如く細別せられることの外に形式に於ても獨立形、接頭形、接尾形の三種があり、各種各一、二の變形を備へて居る上に、音便による變化があるので、頗る多種多樣であるが、假に音便の變化を度外視しても尙ルク語では各六形を備へ、最簡單なパラウ語でも三形式がある。例へばルク語の第一人稱單數（我）は左の如く區別せられる。

獨立形　ナン。主格に用ひられる。

接頭形　イ。他語に接着して動詞たることを表示する。例、ウエリ（見）――イウエリ（我見る）。

接尾形（一）　エイ。目的格を表示するに用ひる。例、サム（父）、サム・エイ――サメイ（我父）。

接尾形（二）　エイ。屬格を表示する。例、サム（父）、サム・エイ――サメイ（我父）。

獨立形所有代名詞（一）　ネイ。ネ（或もの）にエイが結合したもので、「私のもの」の意であるが、名詞に先行して屬格を示すに用ひられる。例、ネイ（私のもの）アラマス（人）＝私の男（召使）。

獨立形所有代名詞（二）　エエイ。エ（其）とエイとが結合したもので、「私の其」といふ意であるが、ネイと同樣に用ひられる。例、エエイ（私の其）シャ（親族）＝私の親族。

接頭形複數エイ（自他稱）、シ（一人稱）、アウ（二人稱）、レ（三人稱）が或語に接着して動詞たることを表現する場合には其主格たる名詞が複數であることを表示する。例へばアルマス（人）エアナン（エは接頭形）單數三人稱、アナンは勞働の意）といへば或る一人が勞働するといふ意であるが、アルマスレアナンといへば二人以上の人が働くことを意味するのである。

前置詞

指示代名詞も亦之に準ずる。其他邦語の助語（後置詞）に該當するものが、多くは前置詞であることは勿論である。

數詞

上記によればミクロネシア諸語は邦語、朝鮮語、アイヌ語等とは全く系統を異にするもので、大體に於て同一種に屬することは言ふまでもないが、其間に發音及語法上の相違のあることは上述の通りで、單語に於ても同一原の轉化と認めることの出來ぬものが多い。例へば上記の代名詞に於てもマーシャル語のコ（汝）はルク語のエンとは別系の語で、後者のナンはマーシャル語のイの變形と見ることは困難である。其他最變遷の少かるべき數詞に於ても次に示すが如き相違がある。

	チャモロ	ルク	パラウ	マーシャル
一	ハチャ（マイサ）	イォト	ア・タン	ジュオン
二	フグア	オ・ルン	オ・ルン	ルオ（ロ）
三	ツロ	イォル	オ・デイ	ジル
四	ファトファト	フヤン	オ・アン	エメン

五	リマ	リム	オイム　ラリム
六	グヌム	オーン	マロン　ジルジノ
七	フィチ	フュス	ウイズ　ジルジルジュオン
八	グアル	ウアール	イアイ　ルアリジョク
九	シグア	チュン	イチウ　ルアジムジュオン
十	マノト	セイク	マホド　ジュノウル

卽ち四島語に於て全く同一語と見なされるものはリマ（五）あるのみである。此語はマレー・ポリネシア語の六が三と三、七が三と三加一、八が五の二倍引二、九が五の二倍引一の結合語であることを見に共通で、臺灣蕃語にも其痕跡が認められる——例へばタイヤル語では五はイマガルである。——マーると、當初此島々に移住したときの住民は六以上の數稱を有せず、後に至つて之を學んだものではなからうかと考へられる。加之東西に最懸絶したマーシャルとパラウとの數詞（五以下）が稍〻近似して居ることも奇とせねばならぬ。

文字

諸島には文字といふものはない。此諸語が記錄せられるやうになつたのはローマ字を知つてからのことで、基督教の牧師等が島民の福音を傳へる爲に熱心に土語を學び、之を以て教義をとく傍、聖書を土語に譯する爲にローマ字を以て土語をかきつゞり、且之を讀むことを教へたが故に比較的速に文字が普及したことは我々言語學に携はるものの感謝せざるを得ぬ所である。さりながら宣教師の多くは言語學者でないので、言語の構成にまでは眼が屆かず、現在日本のローマ字論者がするやうに自分一個の耳に感じた通りを任意にかけばよいとしたやうな嫌があつて、今日我々後學者に疑惑を起さしめる結果を惹起したのである。

形象文字

文字を知らぬ島民は重大事の記錄を或る種の形象に留めた。グァム島の首府アガニャに近いイナ・ラハン村の洞穴の壁には昔の女王が殘したといふ形象文字の彫刻があるといひ（クリスチャン）、パラウの公舍（バイ）の柱梁棟風等に施した彫刻の多くはそれであるが（後篇第六章參照）、廣く一般に通用する形象符號が定まつて居た譯ではないから、一種の謎のやうなもので之を解き得るものは稀である。勿論特別の符牒に用ひられた形象もないではない。例へばパラウの鷄が軍神又は戰鬪を意味するが如きはそれである。彫刻は昔の島民の間に普く行はれたやうであるが、近世此技術が退歩してパラウ以外の諸島には舟、杖（踴り棒）等に施され、或は文身に於て之を見るのみで、全然裝飾として用ひられて居るのであるから、形象文字の存否の證とすることは出來ぬ。結繩の法も行はれたと見えて、セムペルによればパラウ人は繩の端を結び又は輪をつくつて交友の間に通信することをルスルといひ、手紙にも此語を適用するといふことである（S 一三八頁）。ウレアイ島では繩の結び目を以て曆日を數へた（バスチアン）。パラウの酋長が大切に保管する記念品が椰子の葉又はアヴァの根で作つたものであるとバスチアンの報告したのは、恐らくは土語ズォイのことであらうが、此は支那人の印綬に該當するものである。酋長の別名をズォイ——ズォイブクルは「結ぶ」といふ意（ワルレザー）——といふのは此語から出たものである（坂元少佐調査）。

結繩

五傳說

廣い意味に於ける口碑傳說はミクロネシア島民の間にも少くはない。ことに記錄といふものがなかつた爲に、同一說話でも島々によつて色々に訛傳せられ、樣々に修飾せられて全く色彩を異にするものがあり、同じ島群中でも傳承者によつて種々の異說がある。童話民譚の類は時代々々の影響により變化もし、新に造られもするから、民族の發達史と全然無關係でないとしても、此島々の昔を知るよすがにならぬものが多い。之を蒐集し之を整理し之を研究して一定のシステムを發見することは傳說學者の任で、私の企て及ぶ所ではないが、歲月と共に消滅しつゝある古い傳說だけでも蒐集して後の學者の用に供したいと思うて既に世に公にせられた記錄をあさると同時に報道を各支廳に求めたが、幸に比較的多量の資料が供給せられた。私は誤譯訛傳を恐れて土語を以て報告を集めたので、尙之を精讀する暇がなく、中には私の讀み得ぬものもあつて、本編に之が研究の結果を發表することの出來ぬのを遺憾とするが、私の健康の許す限に於て之を整理した上、世間に發表して採集者の勞を空うせざるつもりである。さりながら現在私の手中にあるものは尙十が一にも達せぬとおもふから、今後に於ても古老の談を土語の儘で本著者又は其後繼者に報道せられんことを一般讀者特に南洋在住諸君に向つて懇願するものである。

本章下に收錄せんとするものは右の如き廣い意味ではなく、創世神話、卽ち此島嶼の開發と最初の移植

創世神話

天上の世界

に關するものとについて概述して見ようとするに過ぎぬ。其は次々の記事と大なる關係があるからである。之については米國の學者ローランド・ヂクソンの『世界諸人種の神話』(The Mythology of all Races)中に極めて適切な記事があるから私は大體之によつて記述し、二三の補遺と私見とを加へることにする。

ミクロネシアには完備した創世神話といふものはなく、斷片的な開闢傳說があるが、其も甚區々である。此世の外に天上の世界があるといふ信仰はパラウ及西部カロリンに普及して居るが（クバリー「南洋のパラウ島」、ワルレザー「ヤップ島民の宗教觀及習慣」）、其起原を說かうとはしなかつた。カントヴァによれば女神リゴブンドが天から此世に降つた時には此地は全く礁碕不毛であつたので、之に草木果樹を植ゑた。此作業は神の靈異の力によつて成就したとカロリン人は言ひ傳へたといふことである。爾餘の傳說も之と大同小異で、或る地方ではルゲランといふ神が最初に天を作り次に大地を作つたが、不毛荒寥であつたので、天から樹木の苗を持ち來つて之を自分の造つた新土に植ゑたといふて居る（ギルシュナー「ナモルク及其島民」）。ギルバート島ではナレアウ神と其女のコビネによつて天と地とが造られたと傳へられて居るのみである（ニウエル「ナレアウ神渡來記」）。

陸地湧出

世界は海を原として當初神が之から浮び出たといふ觀念はマーシャル群島——少くともラリク島列——の傳說の特色である。昔々世の中は海ばかりで、南方は低い廣い岩礁に連り北方に沼澤を控へた海濱にロア又はロワといふものが居た。ロア海に對つて「島根を見せよ」といふたら、岩礁があらはれ、「砂を見せよ」と叫んだら礁上に土が出來た。又「草木を見せよ」といへば草木生ひ、「鳥を見せよ」と呼べば鳥が飛

んで來た。其鳥の中の鴟ケアル空に立あがり、林叢の間に網を張る蜘蛛のやうに蒼空を翔けめぐつた云々と傳へられて居る（エルトランド三〇八頁）。海を原始とする思想はカロリン群島にも存したと見えて、ヤップ島に於ては世の初に一大木が逆に生ひ、其根は天をはひ、其技は海に觸れて居たが、其梢にエラファズといふ女神が生まれ、海の砂を撒き散らして陸地を作つたといふ傳說がある（ワルレザー）。此話の前後には西教臭味の修飾が加はつて居るけれども、大木の逆生と砂を撒いたことは原形の名殘であらうと思はれる。何となれば前者はボルネオにもある話であり、後者はインドネシア諸島に普く流布して居るからである。

島嶼釣上げ傳說

マウイ神の信仰と共にニウ・ジランド及ポリネシア各地に行はれて居る島嶼釣上げの傳說（拙著「太平洋民族誌」一三八頁）はウルチ群（ヤップ島の北東方）に傳へられて居る。其によればマチケチク神が兩兄弟と共に漁に出たとき、彼は最初にタロ芋を釣り上げ、次でファイス島を釣り上げたといはれて居る（パスチアン九八頁）。

國土生成傳說

ヂクソンはナウル島（マーシャル群島に屬する燐礦島であるが、赤道以南に位し且大富源なるが故に我國は之が占領を遠慮した）の神話二條をあげ、ポリネシアとの相似を指摘したが、本書には關係がないから省略する。マーシャル群島のラダク島列に於て傳へられた最初の生物は二つの蟲で其一（女性）はレジマン（岩女）と稱したといふ話も、岩が配偶者を得て大地を生んだといふサモア傳說（エルトランド三一〇頁）と緣があるやうに思はれる（拙著「太平洋民族誌」一四〇頁）。

チャモロ神話によれば此世界はプンタンといふ巨人の遺言により其妹によつて作られた。卽ち胸は空となり、背は土となり、日月は兩眼から化生したといふ（米海軍武官著「グァム島」）。此傳說の系統を引くものとしてはパラウの創世神話を擧げ得る。大海原から出現したオバカズ（又はオホベカズ）女神は今のアナウル（アンガウル島）に居住した。其女トランがアラオといふものと結婚して男アクアブ、女アルオコル外數子をあげたが、アクアブの身體がはてしなく發育するので後害をおそれて薪を身邊に積み重ねて燒き殺した。アルオコルは母の命によつて海上に倒れた兄の遺骸を島となし之にタロ芋を植ゑた。島の北端アラコロンは其頭部にあたるといはれる（坂元少佐調査、談話者は前大酋長アロー）。此話には色々の異說があるが（一）神が當初ア・ナウル島に住んで居たといふことと、（二）アクアブといふ神の遺體が化してパラウ島となつたといふことだけは諸傳皆一致して居る。

人間の起原

人間の起原に關する傳說もまた區々であるが、神によつて作られたといふものが少くはない。カントヴァは上記のリゴブンドが天から降り、此地を住まひ得るやうにした後生んだ三子が人間の祖先となつたといふ話を收錄したが、ナモルクの傳說は一層詳密である。其によればルク神は大地を作り、之に木を植ゑた後、其女リゴアププを天から降した。此天女は渴を覺えて木の窪みに溜つた水を飮む際、氣付かずに一匹の小い魚を嚥み込んだ所が之によつて受胎して一女兒を設けた。其子が生長して一人の娘を生み、其娘は更に一人の男の子をあげた。此子が生長の後其肋の骨から化生した男子がリゴアププを妻として人間の祖先となつたといふのである（ギルシュナー）。肋の骨は宣教師から教へられた西洋の話が混入したものら

しいが、神の身體の一部分から神又は人間が化生したといふ傳說は他島にも類のあることである。例へばウレアイではルゲラン神の地上の妻ハムルルの頭頂からオリファト神が生まれたといひ（バスチアン）、ナモルクではリゴアププが木の窪みの水を飲んで一女兒を生み、其兒の一眼から一男童、他の一眼から一女兒が生れ、人間の祖となつたといはれて居る（ギルシュナー）。神の眼から男女各一柱の神が生まれたといふ傳說は他の民族にもあることかも知れぬが、餘りにも筑紫の日向の橘の小門のアハギが原の禊神話に似て居ることを奇とせねばならぬ。エルトランドによればマーシャル島の最初の神ロアの足の腫物からはウルレブといふ神が生まれ、ウルレブの足の腫物からはジェメリウトとエダオといふ兄弟が生まれたといふことである（E第三〇八頁）。

バラウの一傳說によれば人間を作つたのはエイメリークの西方に住んで居た男女神であつた。男神は男を、女神は女を作つたが其生殖部が少し異つて居たので、男神は女神の作つたものを見たいと思ひ、先づ自分の作つた人間の其部分を見せた所が、女神が大に腹を立てて急いで之をかくした。其故に今日總ての女性はパンダヌスの葉の腰蓑をつけるが、男子は往々赤裸々で橫行するのである（クバリー）といはれる。ギルバート群島にはハレウア神が燒いた木の焰と灰とから人間が生まれて各地に散在したといふ傳說がある（バルキンソン）。

人間は當初不老不死であつた——或は不滅たるべかりしものであつた——が、或る事故によつて短命になつたと信ぜられて居る。例へばバラウ島ではオバカズ女神が人間の不老不死を希うて石を以て胸を作り、

其石の如く永久に强く、且食物の必要がないやうにしようとしたが、水鷄が之に反對して息を胸に入れたので病に罹り壽命を失ふやうになつた。さりながらオバカズ神は尙素志を棄てず、其子をして人間を不死にする生命の水を汲み來たらしめた。神の子が靈液をタロの葉に入れて持ち歸つたとき、右の惡鳥が木の枝を折落して其葉を裂き破つたので水はこぼれて木にかゝつた。此故に木の壽は長いけれども人間の命は木の花の阿摩比能徵となつたのである（クバリー）といはれる。

中央カロリン諸島で傳へられる所によると人間を死滅するものとしたのは荒魂オリファト神のわざである。最高神ルクが人間は病によつて斃れることがあつても再生し得るものとすべきであらうかと諸つたとき、オリファトが一度死ねば永久に蘇らぬものにしませうと答へたからであるといふ（ギルシュナー）。ヤップでは昔々ミル・アルといふ女人が死に臨んで二人の子に遺言して埋葬の後七日を經て掘りおこせば再び若く美くなつてかへつて來るから忘れぬやうにせよと言ひつけた。然るに男女二人の子は墓場から歸る途中枝も撓（タワ）に實つたパンダヌスの木を見つけて之に引きつけられ、多くの日を過して後、七日の期限を思ひ出したが既に遲かつた。一度目ざめた地下の母は再び眠について永久に覺めることがなかつた。其以來人間は死を免かれぬやうになつたと傳へられて居る（ワルレザー）——クリスチャンも同樣の話を收錄したが、其には期日が三日となつて居る——カントヴァがグァムに漂着した土人から聞いた所によると、最初人間は死ぬことはなく、一時の眠についたので、每月大陰が衰を見せぬ頃になると目覺めたのであつたが、惡魔が之を喜ばず、永久の死を齎らしたのであるといふことであつた。

日月の起原

日月の起原については若干の異說がある。パラウでは上記の人間を作つた二柱の神が貝の斧で石を削つて其形を作り、空に投げあげたので晝夜の別が出來たといはれ（クバリー）、ギルバート島では日月も亦海と共にハレウア神が作つた最初の二生物から生まれたと傳へられて居る（バルキンソン「南洋の三十年」）。此神話によればハレウア神はテ・ハボウとデ・アイといふものを作つた後之に對つて「此地は私のものであるから番をして居れ、私はこゝに子供の棲むことを好まぬから人間を殖やさぬやうにせねばならぬ。若し私の吩咐に從はぬなら、嚴罰を加へるぞ」と言ひ殘して立ち去つた。然るに兩人は此戒に背き、デ・アイの腹から日月と海とが生まれたのをハレウア神の使の鰻が見つけて密告したので、神は大に怒り棍棒を携へて歸つて來た。兩人は大に恐れて神の前に跪き、三人の子を殺さぬやうに歎願した。其理由は太陽は光をもたらして我々に物を見ることを得しめ、其が隱れたときには太陰が之に代はり、第三の子海は魚を產して我々に食物を與へ、いづれも非常に有益なものであるからといふのであつた。ハレウア神は之を道理ありとして撲殺の企を中止して立去つたといはれて居る。

火の起原

火の起原も亦色々に說明せられる。パラウ島では女神オパカズが鮮魚と生芋との食用によつて得た口中の傷になやむ老婦人を憐んで、木の棒を擦りあはせて火を作ることを教へたと傳へられる（クバリー）。ヤップ島民の談る所によれば（クリスチャン三二〇頁）、此島には當初火がなかつたのでヤラファズ——中央カロリンのオリファト神の轉訛であるらしい——に之を乞うた。神は雷神デスラに旨を含めて之を下界に派遣したが、其途次雷はパンダヌス（土語チョイ）の木に落ちて之を裂き、其鞘隙にはさまれて進退自由を失ひ、大聲に助を呼んだ。偶タロの切干を作つて居たグァレチンといふ女が之を聞きつけて救ひ出したので、其謝禮として此女に粘土で竈（土語チオ）を作ることを教へ、又アルルの木を取來らしめ腋下に挿んで之に火を移して交付したといふことである。ギルシュナーが收錄した中央カロリンの神話も之に類し、オリファト神の命をうけた一鳥が焰を口にくはへて木から木に飛び移り、火の種を植ゑつけたので、之を、摩擦すれば火が出るのであるというて居る。ウレアイ島には天から落ちた神モログログが地上に火を將來したといふ傳說がある（バスチアン）。

ヂクソンは屢ナウルの神話を引用して居るが、此島の住民は上記のやうにミクロネシア系のものではないから私は之を省いたが、燧火に關する次の傳說は興趣の深いものであるから、參考として記載する。昔々落潮の際水溜りに取殘された二小魚が水の蒸發の爲に枯死したが、之に湧いた蛆から二人の女が生まれた。其一人が或夕漁に出ようとしたとき松火に移すべき火種が得られなかつたので、二本の木の棒を取つて擦りあはせて居るうちに渠が出來て之に手を觸れたら甚熱かつたので次のやうに歌うた。

火、火、何處から來た？
私の指の爪から來たか
私の足の爪から來たか
火、火、熱くなれ、火花出せ
彌熱くなれ、大熱々になれ

エカイニルといはうよ

さうすると火が燃えあがつたので松火を點けた。ナウルの民は之によつて火を作くることを知つたといふことである（ハムブルッフ「南洋探檢成績」）。

洪水傳說

洪水傳說はパラウ及ヤップ島に於て聞くのみである。後者に在つては長い話の終の一段をなすもので、ワルレザー僧正の傳へたものとクリスチャンがルムン島の酋長から聽取つたものとの間に多少の相違があるけれども、其大略は大食な神があつて娘の婿の奉養に飽き足らず野鼠に化けて甘藷畑を荒した爲、婿の設けた罠にかゝつて斃れた。神の血を受けた妻は恐るべき復讐の來ることを豫知して夫に訓へて斃鼠の齒四枚と其血液とを取らしめ、外に木の葉と油とを用意して最高い山の頂上に登り七階の家を建てた。案の定大風雨が襲來し、洪水はヤップ島を呑んで山の頂上まで達したので、七階に昇つて之を避けたが、水嵩は尙益〻加はるのみであつた。女は豫て用意した油を木の葉に塗つて之を泛べた所が、忽ち嵐が靜まつて水が引き始めた。再び平常に復した後夫婦は山から降りて來たが、外に生殘つたものは唯一人舟の副木に身を縛りつけ大きな石を碇として漂うて居たものがあるのみであつたといふのである。此話には近代式潤飾が多く加はつて居るやうであるが、暴風雨に伴ふ海嘯の大害は島民が屢〻經驗した所であるから、ノアの洪水を眞似て作つたものでないことは確實である。

パラウ島の洪水傳說は遙に簡單で、セムペル、クバリー等によつて色々に傳へられて居るが、其一つを擧げると、昔々ルパク（パラウ島の支配階級）の一人に盜まれた天上の美玉を取かへす爲に天から降つた神達が宿を求めた所が、下界のものは皆不親切で之を拒んだ中に唯一人小やかな茅舍に寂びしく暮して居る一婦人が懇に接待して、ある限りのクカウ（タロ芋）と魚とを供した。翌日神達は出發に臨み主人の女に誨へていふには次の滿月の夜竹の筏を組み其上に寢よといふた。教の通りにして待つて居ると其夜大暴風雨が起り、海水が嵩まつて山を裂き民家を呑んだので誰一人助かるものがなかつたが、右の女のみは筏の上に眠つたまゝ漂流して、アルムリムイの山頂の木の枝に頭髮が引かゝつて停まつた。さりながら水が引いて神達が助に來たころには既に息が絕えて居たので、一人の天女を呼び降して其身に宿らせ再生を與へたと傳へられて居る（セムペル一九四頁）。

右の外草木禽魚の發生についても傳說が少くはないが、煩はしいから省略する。私が此一目を設けたのは他の民族の神話との比較の材料を供する爲であるが、私自身は比較神話學の智識が乏しいから、之を試み得ぬのみならず、神話の類似を以て文化の移動を立證せんとすることを無謀の擧であるとするものであるから、此以上立入ることを欲せぬのである。我々の參考となるのは史的傳說であるが、其は必要に應じ、次々の記事中に揭出する。

六遺跡

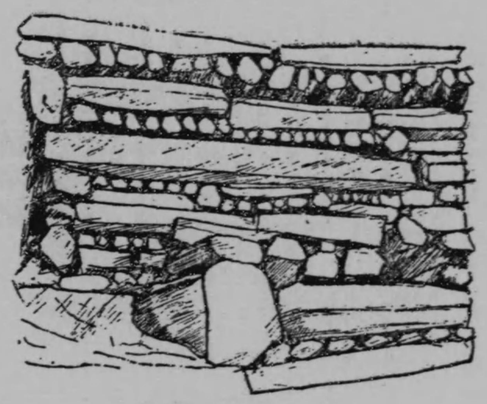
島人の祖先が殘した建築、土工若くは其廢墟はあまり多くはないが、ボナペの水城（ミツヤ）、クサイの胸壁、チ

昔日の高級文化

ニアンの巨石柱等は現在の島民の技術を以てしては構築不可能の工事であるが故に、往昔此等の島々に今日の島民の有するよりも高級の文化が存したものと推定せられるのである。然るに島民の間に之に關する口碑が傳はつて居らぬので、其に疑を挿み、或は一時寄寓した文明人の手によつて營造せられたのであらうといふものもあるが（カベザ・ベレイロ）、ナンマタールの遺跡の如きは文明人に取つても至難工事であるから、萬一他から來て之を築き、此地に土着せずして本國にかへつたものであつたとすれば、一代の名聞として之を吹聽した筈であるのに、今日まで世界いづれの文明國にも昔日南島に偉業を殘したものがあるといふ記錄の發見せられたことを耳にせぬ。我國の海賊衆が建てた城の跡であるといふやうな俗說も行はれて居るが、其は朝鮮南岸諸島の頂上に屢〻見うける石垣の廢趾を盡く太閤朝鮮征伐の遺物なりとするよりも一層根據の乏しい空想に過ぎぬ。右の如き想定が許されるものとすれば、島民の祖先が今日よりも高い文化を有したといふ推論をも容れねばならぬ筈である。後篇に述べるやうに事實に於て昔の島民は現在よりも高級の技術工藝を備へて居た形跡は歷然たるものがあるから、私は此等の遺跡を現島民の祖先又は其先住民の殘したものとして此章下に說くことにしたのである。

ナンマタール。　ポナペ島は舊時ジョカーシ、ナット、ウ、マタラニム及ロンキチの五邦に分かれて居た。就中東岸一帶の地を占めたマタラニムは最強大で、此遺跡も亦其境域內にある。東海岸中海水の最深く彎入した部分に大小數島が散在し、其中本島岸に最近いものをトムン島とよび、其東側に有名なナンマタールの遺跡は橫はつて居るのである。其は地圖第一に示すやうな略〻長方形の一水域で、面積十一平方哩を占め、岩底の淺水中に設けられた大小約五十——クバリーは八十と算へた——の石造建築の集合である。構造はいづれも略〻同樣で、滿潮時の水面から一——二尺露出する岩盤上に方形又は長方形に自然石の胸壁を匝らしたものである。胸壁は高さ一五乃至四〇尺、厚さ六乃至一五尺で、第一圖の如く長石材を縱橫に積み重ね、其上緣は軒蛇腹のやうな形を呈して居る。最大建築はナン・タウシ（地圖第一中（ト）と標記したもの）と呼び、東西約二一二尺、南北一八一尺の幅員を有し、地積約一千坪を算する。此一廓は其昔マタラニムに君臨したシャウ・テ・レウル家の最終王の墓所と傳へられ、第二圖に示すやうに構內にも稍〻低い胸壁（高さ一五—一八尺）が設けられ、就中中央にある方形の一小廓は地壇の上に築かれて居る。墳墓と稱するものは大小四個で、いづれも石を以て地上約三尺の高さに築き、中央卽ちシャウ・テ・レウルの墓（イ）は六枚の大石板を以て覆ひ、壙の深さは約八尺で、底には細砂となり、副葬品の破片が混入したのを、クバリー及クリスチャン等が發掘して左の諸品を採集した、

第一圖　ナン・タウシ



發掘品

も同じく玄武岩を敷き、其上に珊瑚礁塊が詰めてあつたのであるが、雨露の浸入によつて風化して一部分

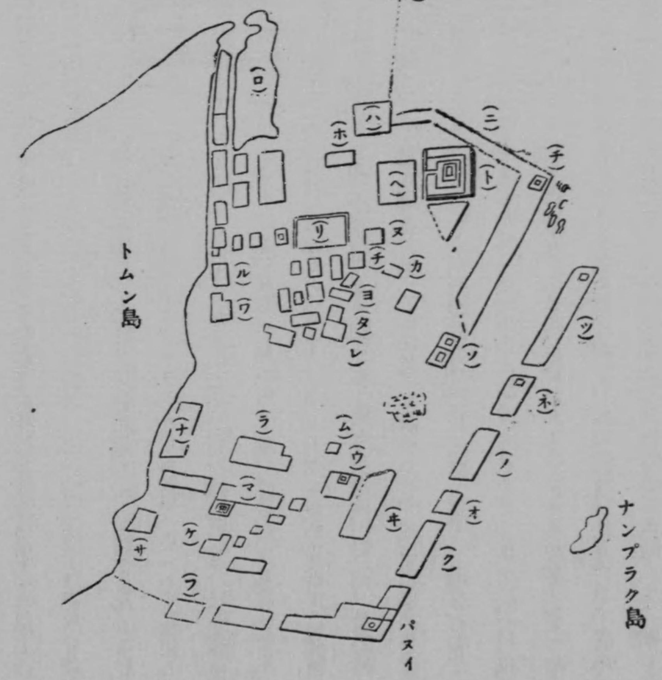
（地圖第一）

ナンマタール　遺跡略圖

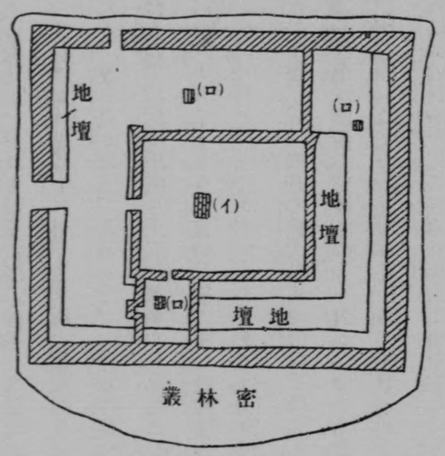
（イ）ベイニオト　（ロ）ナジ（公舍）
（ハ）コンタイアク　（ニ）バンアカウ
（ホ）ブアラン　（ヘ）タウ
（ト）ナン・タウシ
（チ）ナンマルシャイ
（リ）ウシェンタウ　（ヌ）ジャポナシ
（ル）ベイロ　（ヲ）ブラク
（ワ）バン・チボブ　（カ）ベイノイル
（ヨ）タバウ　（タ）シヤオク
（レ）バン・イラル　（ソ）ベイノリン
（ツ）カルリアン　（ネ）リコブ
（ナ）ワシヤウ　（ラ）ベイカブ
（ム）トロン　（ウ）イテト
（キ）バラカブ　（ノ）ラメンカウ
（オ）マント　（ク）カベノト
（ヤ）シヤウ・レホ　（マ）パンカタラ
（ケ）ニコノク　（フ）バンカイム

クバリーの採集品

（イ）礎礫貝製大小斧五個



第二圖



（ロ）貝鑿三個
（ハ）海菊の貝多量——原形の儘のもの乃至荒削りして孔をあけたもの
（ニ）螺の貝の腕輪及頸飾其他用途不明の貝細工類
（ホ）貝製鈎（又は其破片）
（ヘ）小鯨の骨
（ト）人骨

クリスチャンの採集品

（イ）海菊及螺の平珠——形狀方又は圓、一シルリング貨乃至三片貨大、緒を通す孔あるもの——約一クォト
（ロ）貝製鈎の柱
（ハ）貝製斧五個
（ニ）貝製腕輪五個
（ホ）蓆針（貝製）十二個
（ヘ）丸珠（緒を通す孔を穿つたもの）三四十——外に煤色した黒燿石又は火山岩硝子の類と思はれる礦物質の破片があつた。

六遺跡

（ト）骨、髑髏及貝等の破片――其中に槍の穂のやうに見える鐵片があつた。

フィンシも亦加工せざる海菊の下蓋若干及長さ八・五、幅七・五サンチで上面に緒を通す爲の二孔を穿つたもの一個を發見した。

以上の遺物はいづれも濕氣の爲に腐蝕して居たが餘り年代の古いものではなかつたといふことである。

クバリーはナン・タウシの外、十二廓は墓地である――其中にはイショ・カラカルのものもある――と報告したが、縱ひ其が事實であるとしても、右の遺物によつて察せられるやうに、後代に於て墳墓に充當せられたもので、此不思議な土工が當初から墓地として構築せられたものでないことは勿論である。傳說によればシャウ・テ・レウル家の最後の王は此建築の一なるパン・カタラに滯在して居たといはれ、――島の名のパン・カタラ（又はナン・グトラ）は「宣布所」又は「政所」の意であるといはれる――其跡は神の社として毎年五、六月の交大祭典が此地で催されたといふことである。祭神は不明であるが、昔此附近に一頭の鰐魚が漂着して多くの人を食うたといふ傳說もあり、荒廢した王居が何かの機緣によつて靈地と見なされるやうになつたことも有り得べきである。

パン・カタラの社

然らば何の目的を以て何人が此大工事を起し、如何にして之を構築したかといふ事が我々の興味を惹く問題であるが、今日まで尙解決せられて居らぬ。築島と築島との間を通ずる水道は幅九―七二米で、滿潮時の水深は約一尋に達するが、低潮時には殆ど干出するから、所要の敷地を得る爲に石を以て埋立てることは困難でなかつたとしても壁に用ひた石材はクバリーの見積によると重量三噸半（約九百貫）に達するものがあるといふことであるから、之を積み上げることは勿論、水上を運搬することすら今の島民には不可能事である。彼等の傳ふる所によると、昔オロ・チバ及オロ・チョバといふ兄弟の神人（アニ・アラマス）がジョカーシの方から來て、最初にナン・モルチャイの外堤を作つたのであるが、其神力によつて大きな石が鳥のやうに空を飛び渡つて好む所に落ちたといふことである（クリスチャン第八一頁）。玄武岩質の此石材はマタラニムには產せぬけれども、本島北方地域には到る所で發見せられる。クバリーはナットから運搬したのであらうといひ、クリスチャンはウ及ジョカーシから取つたものであらうと推測した。徑五寸乃至一尺五寸、長さ五尺乃至十四尺で、四乃至八稜（最も多いのは六角）を有する長材は双物を以て削つた痕跡もなく、自然の形であるといはれて居るが――ユートレヒト（和蘭）のウイッチマン教授はシーベンゲビルゲ（バルカン半島）にも之に類する玄武岩質石材を產するといふたとシュヌルツはゴーデフロイ博物館目錄に註記して居る――クリスチャンがポナペ在住米人ケフーから聞いた所によるとチャパラブ川（マタラニム）の流に足跡と日本刀のやうな武器を刻した巨石があるといふことであるから、往昔のポナペ人は石刻を知らなかつた譯ではなく――石彫には必しも金屬の双物を必要とせず、石鑿石斧を以てするも加工し得られる。近世のポナペ人は用ひなかつたやうであるが、クリスチャンは後記のナン・タマルイの古墳から石斧石鑿を發見したといふことである――假に若干加工した跡があつても、之を島民自身の技術とするには妨がない筈である。海陸に於て巨石を運搬し、之を以て壁を構築することも多くの人數と時日とを用ひれば必しも不可能のことではない。クバリーは斜に架した滑り板を利用して頂上に石梁を引

神人（アニ・アラマス）

上げたものであらうといひ、クリスチャンも木幹に椰子の油を塗つたものを架し、其上を太い藤綱で引上げたのであらうと推定した。海路は筏を組んで運搬したものとも想像せられるのである。さりながら此大工事が或る期限内に行はれたものとすれば――少くとも外側の防波堤工事の如きは一擧に功を竣へる必要があつた筈である。――極めて多數の人員を役することを要し、全島を支配する大權力者の命令を以てするにあらざれば實現不可能のことである。

建造の目的

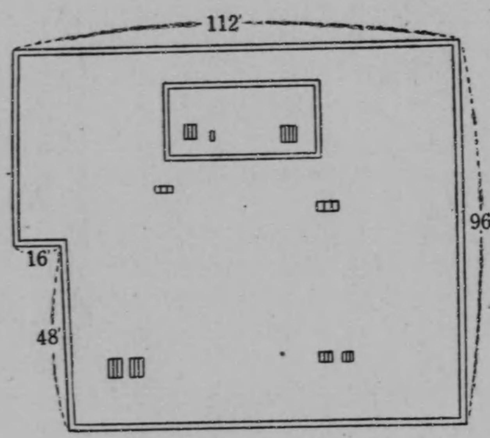
右の如き大權力者が何が故に特に此水域を選定して此大工事を起したかといふことも亦人の不審とする所であるが、陸上交通の殆ど不可能の此地では全島の支配者は海に近く占居する必要があつたことは勿論で、水軍の準備といふ點から見ても、陸地深く根據地を構へることは不便であつたから、城塞を水中に構築したのであらうと思はれる。此は大陸人の思ひもつかぬことであるから、曾ては陸上にあつたものが沈沒したのであるといふやうな俗説を生じたのであるが――其事實に遠いことは既にクバリーが説破した――海宮（ワタノミヤ）、水城（ミヅキ）等の傳説をもつて居る吾人に取つては餘り不思議なことではない。思ふに昔日強力な王者があつて此處に占據し、本島は勿論附近諸島を支配したのであらう。胸壁の内部には勿論木造住宅があつたのであらうが、歳月と共に腐朽消滅し、シャウ・テ・レウル家に代つて此地の支配者となつたイショ・カラカルは、恐らくは海上の勇者ではなかつたので、此水域を利用することを知らず、荒廢に委ねたのであらう。

殘餘の遺跡

巨石建築技術を有した舊時のポナペ人（又は先住民）はナンマタール以外にも石造物を殘したことは勿論で、クリスチャンによれば東岸タパク島にも古い石壇と四邊形の石垣があるといひ、パリキル海岸にも同樣のものがあり、南岸のナンタマルイ附近にはポニアル及ポナウルの墓地及ランタカイの石室の古跡が殘存し、キチ河畔マラウの背後の山上にも古代の城と社があるといふことである。就中黒面低鼻の矮人（キチン・アラマシ）ショラカイの墳墓と稱せられるポニアルの遺跡はクリスチャン自身之を踏査したが、其記す所によれば山の半腹に高さ二―三尺の石垣の低い一構があつて、構内に高さ約五尺の一小地壇を設け（第三圖參照）其上に三基、平地に六基の小石槨がある。石槨の長さは四尺乃至四尺半で大きな石板を以て覆うて居る。クリスチャンは此石の蓋を取除いて搜した結果、石斧石刀各一個と若干の遺骨片とを發見したが、貝殻類は少しもないので之を時代の古い證據と斷定した。

同じくクリスチャンによつて踏査せられたポナ・ウルの遺跡は長さ一一五尺、幅七五尺の地積に高さ五尺、厚さ六尺の石垣を匝らし、其構内に設けた長さ三五尺、幅三〇尺の内壁（高さ四尺）内に二石壇が對立するもので、石壇の上面の石を取除き其下の土を掘返して見たが何等の遺物をも發見しなかつたといふことである。クリスチャンは此も亦

第三圖



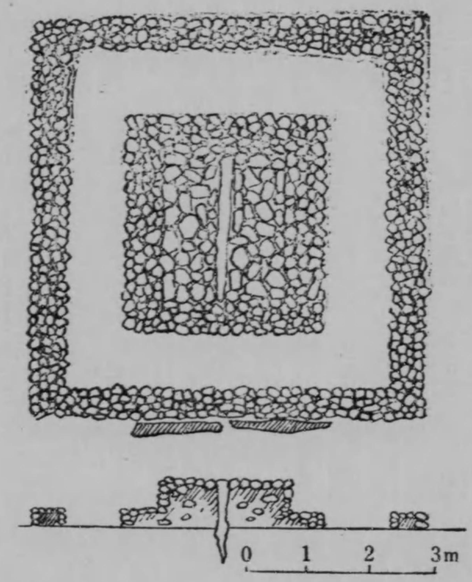
ポニアルの墓地

墳墓であらうと推定したが、遺骨の發見せられなかつた所によると或は古い社の跡であるかも知れぬ。ナンマタールの大工事を起した昔のポナペ人は神靈の宿る所は高地であらねばならぬと考へたこともあり得べきである。

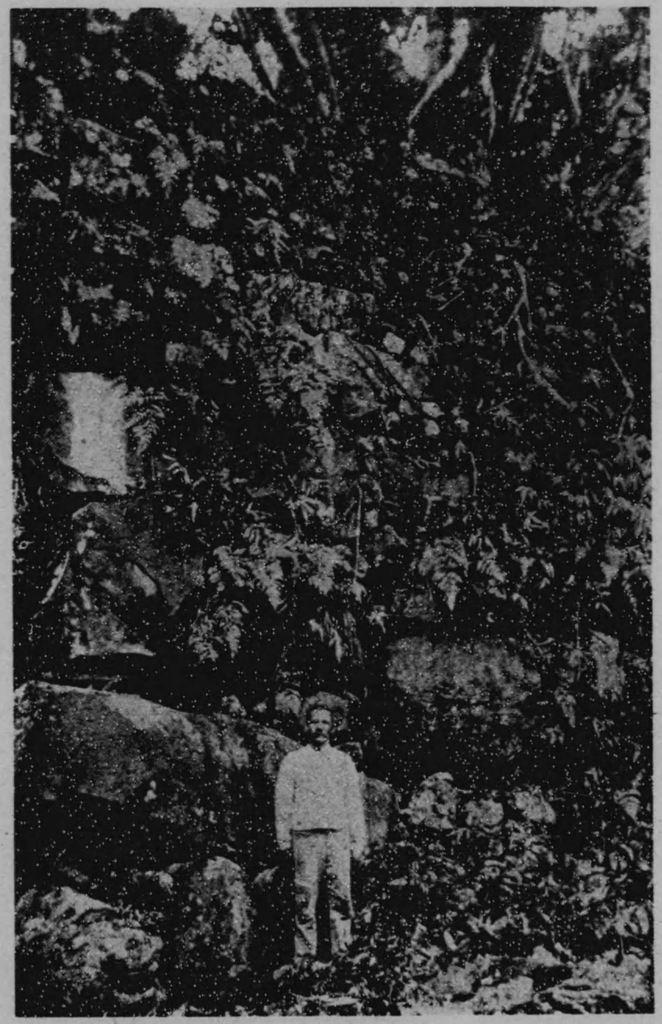
ブナージの墓地

極めて小規模ではあるが上記と同一構造の墳墓がカロリン群島中最南方に位するブナージ島（蘭領ニウ・ギニア屬島マピア）にも存在することがクバリーによつて報告せられた（K一一〇頁）。渺たる珊瑚礁島のことであるから、ポナペのやうな巨石を用ひてはないが、墓壙（遺體は舟の胴に容れて埋める）の上に地面から約半米の高さに珊瑚塊を積んで方形の小地壇を設け其周圍に低い石垣を匝らしたものである。第四圖に示すものは比翼塚で二段になつた地壇の中央に隔壁（珊瑚岩板）を設け、石垣の正面に建てた二枚の珊瑚岩板（厚さ三〇サンチ、高さ二米）は我墓標に相當するものである。此墓を作つた住民は殆ど死絶えてクバリーの觀察した當時には純血のもの

第四圖

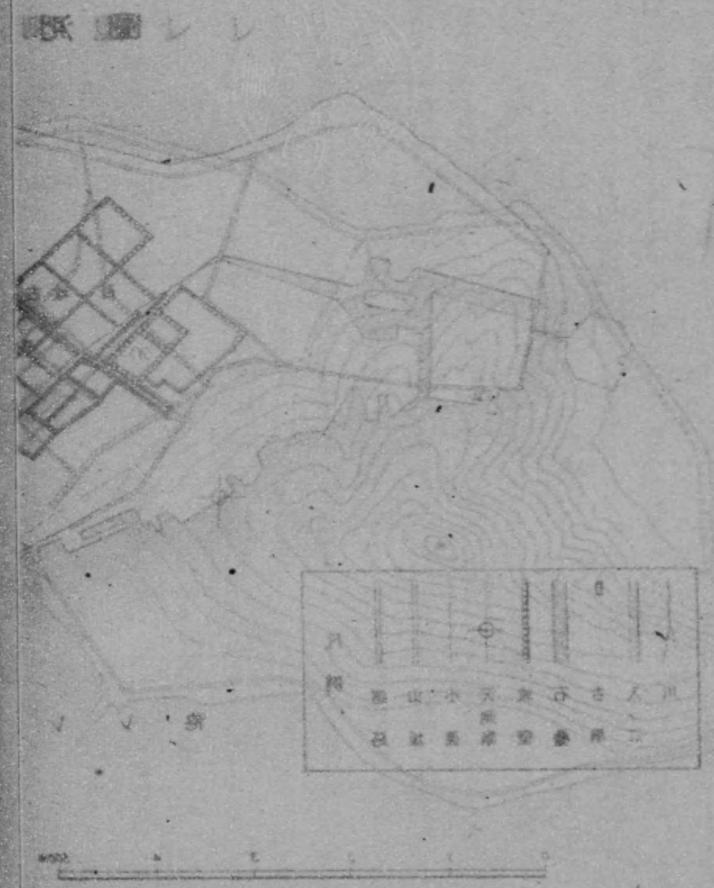


第一圖版

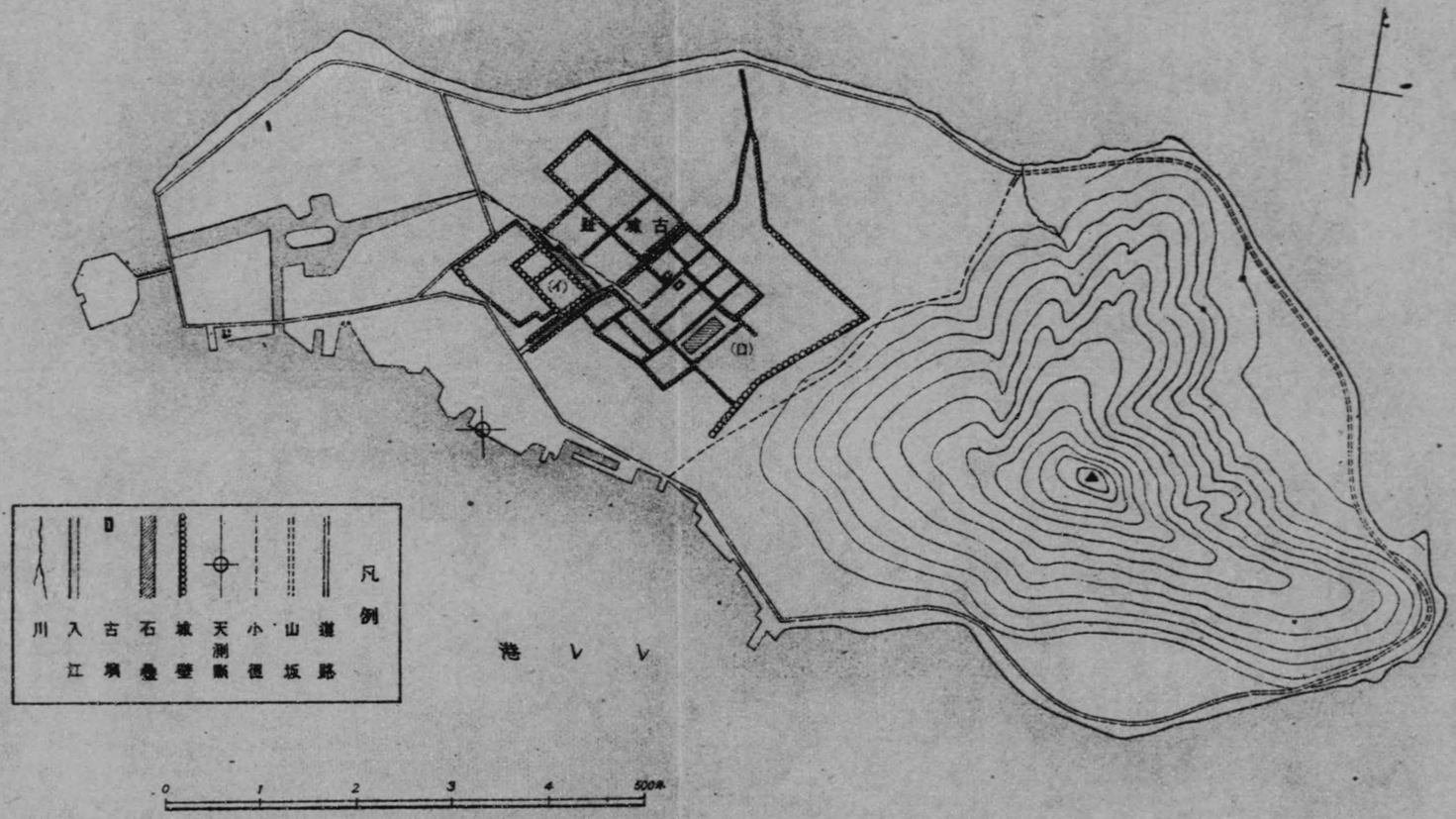


レレ（クサイ）の城壁

クリスチヤン「カロリン群島」所載



レレ島略測圖

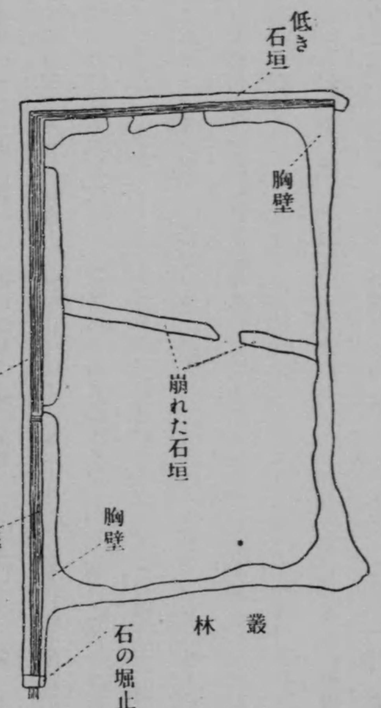


は僅に三人を剰すのみであつたが、其言語のカロリンに類して居る所を見ると、昔日巨石建築技術を有した民族が此邊まで分布して居たものと推定し得る。ヤップにも此種の墳墓（土語ヤム）があるのは注意すべきことである（第四章第四目參照）。

クサイの遺跡。　クサイ島の東岸にあるレレ（又はレロ）といふ小島にも上記ナンマタールの水城と同一構造の遺跡がある。東西約一浬、最大幅員半浬にも充たぬ此島の中央、稍〻西よりに於て地圖第二に示すやうに石垣を以て縱橫に區劃した面積約十町歩の地域がある。幾世紀の間自然力の崩壞作用にまかせてあつたので、今では原形を完うして居らぬが尚其輪廓を存し、一部分に昔の面影を殘して居る。一八九六年（明治二十九年）ニウ・ジランドのポリネシア協會員クリスチャンが踏査した報告は其著「カロリン群島」中に載せてあるが、其記事によると、此に挿入した略測圖（地圖第二）とは多少相違がある。クリスチャンは島內には胸壁に沿うて縱橫に溝渠が穿たれてあると記して居るが圖上には其が見えぬのは其後埋まつたものであるかも知れぬ。クリスチャンによれば、幅四尺乃至九尺の此溝渠は當時海上から石材を搬入する爲に穿たれたものであらうとの事であるが、其上に塹壕の用をかねたことも有り得べきである。同氏が踏査したのは南西の一角（圖上イ）と標記した部分）で、北西から南東に向ひ長さ約一九四尺、幅一一〇尺の地積を繞らすに高さ一六——三〇尺（崩壞の爲にも高低を生じたことは有り得る）、厚さ一五尺の石垣を以てし、南西、北西の兩側には各二ケ所の出入口を設け、構內も亦一橫壁を以て區劃せられて居る（第五圖）。石垣に用ひた石は此島には產せず、口碑によればクサイ本島のウツワ港から持來

つたものと傳へられ、ナンマタールの石材とは異り、區平なものが多い。ことに角隅には巨大なものを用ひ、西角の一石の如きは長さ九尺、幅三尺半、厚さ三尺を算し、構築の樣式は我國の城廓に似て居る（寫眞第一版參照）。クリスチャンは此部分を獨立した一廓と見たやうであるが、實際は地圖第二に示すが如く、大きな一構の一部分をなすもので、特に此部分を堅固に構築したのは敵正面にあたる所であつたからではあるまいか。最奥の山の手寄りに舊時の宮殿の礎と思はれる石壇があり（ロ）、中央には二個の石槨がある。幸に今日まで多くの人に發掘せられなかつたやうであるから、今後若干の考古資料を發見し得る望がある。其曉でないと斷定の出來ぬことであるが、ナンマタールの例によれば墳墓は後日設けられたものであらう。

第五圖



土人の口碑によれば此巨壁（クサイ語ポト・ファラト）は北西方から舟に乘つて渡來した人が築いたもので、

構築者

チニアンの遺跡

で、此城廓を根據として本島の住民を征服し、貢稅を課して王者の威を奮ひ、舊島民は其前に出る場合には膝行頓首して大聲を立てることすら許されなかつたといふことである。クリスチャンは此外來者を日本人であらねばならぬといひ、其論據としてクサイ語に日本語の影響があることを指摘し、——クリスチャンの比較言語學は西カロリンでクサイをコシウ、コチウ、又はクジウと稱へるから「九州」の轉訛であらうといふ類で頗る怪しいが——トルと稱する帶を織る器（後篇第六章參照）をも日本の僻村で用ひられるものに似て居ると斷定し——恐らくは日本の織機を見たことがなかつたのであらう——且日本人の來着可能の證據として既記の本邦漁船マーシャル島漂着の例（第一五頁參照）を擧げた。私は我國と此諸島との間に故意又は偶然の來往があつたことを疑はぬが、中世の日本人がクサイにもあれ、他の島にもあれ、小國家を形成したとは言語學上からも民族誌學上からも推斷し得べき根據を見出し得ぬ。ことにクサイの古城が僅々三百三十餘浬を距るに過ぎぬポナペの水城と全然關係のない別種の民族の文化に屬すると信ずることは至難である。此等の建築が同一系に屬するものであるならば其工を起したものはオロ・チパ、オロチョパと同じくアニ・アラマス（神人）の族人であらねばならぬ。我々は此アニ・アラマスの本體を究めることによつて絕海の孤島に殘された暗黑時代の文化に光明を與へることが出來るのである。

マリアナ群島の遺跡。　マリアナ群島ことにグァム、ロタ、チニアン、サイパン等では巨大な石柱と其頂にのせられ——若くは載せられてあつた——半球狀珊瑚岩塊とが數多く發見せられた。就中チニアン島にあるものが最巨大で且最よく原型を保存して居るからサイパン支廳の報告（久保嘉吉君調査）に基いて之

第二圖版

チニアンの遺跡

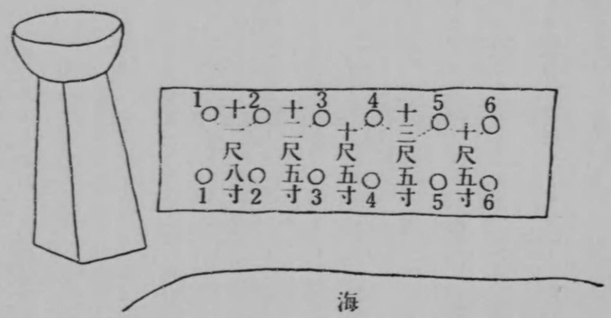
山本愛次氏寄贈

アンギガンの遺跡

町田清彦氏寄贈

を記述する。

第六圖



所在地は海に近く東微南から西微北に向つて長さ六十四尺七寸、奥行十七尺の地積（約三十坪）を占め、二列をなして十二基（各列六基）の大石柱が對立して居た（第六圖參照）。今では(三)(三)の二基の外皆倒れて地上に横たはつて居る（寫眞第二版のa）。列の間隔は――柱の中心から中心まで――十三尺二寸で、各列の柱と柱との距離は一樣ではなく、十尺五寸乃至十三尺三寸である。

柱は高さ十一尺六寸内外で、いづれも方錐形であるが、其太さは一樣ではなく、脚部では長側四尺四寸乃至五尺一寸、短側三尺一寸乃至三尺七寸、頂部では長側三尺六寸乃至三尺九寸、短側二尺七寸乃至二尺八寸である。久保君の報告には材質が明記してないが、グァム島の例によると石珊瑚（Madrepore）であらうと思はれる。後記のサイパン島アギンガンのと報告せられて居る。半球狀の鉢は直徑六尺乃至七尺七寸、高稍〻平に削られ（其徑三尺五寸内外）、上面は平坦であるが、往々にあるものも珊瑚に石灰を塗り固めたものと想さ五尺内外で、底は柱頭に据付ける爲、

長方形の窪を設けたものがある。材質は柱と同樣であるらしいが、グァム島には青石で作つた直徑二尺位のものが到所に發見せられるといふことである。

グァム、サイパン、ロタ等にあるものも大さに於ては之に劣るが、形式は略〻同一である。グァム島フォンテ川の水源地附近にあるものは長さ四十五尺、幅十一尺の地積（約十五坪）を占め、柱は高さ約六尺で二列に排置せられ、各柱各五基であるロタ島に在るものについては前サイパン島司獨人ゲオルグ・フリッツが之を住宅の基礎であると豫斷して敍述したのと、譯文が拙い爲に往々意味の不明瞭な所があるので、一二筆を加へた）。

ロタ島の遺跡

ロタ島に於てもチャモロ人の特色たる圓柱を有する家屋の廢趾全島に散在するを發見す。此等の遺跡は徐々に海中に沈降する北西岸に於て特に多く且堂々たるものあり。但しチニアン島のものの如く大ならず。其處には全村落の痕跡今尙歷然たり（中略）。ハルム・アニテ（幽靈の畑の意）にては各六個の高き圓柱二列に竝立せり。其形はチニアン島にあるものと同じく寸法左の如し。

竝立の兩列間は三米七五にして各六柱（合計十二柱）の中心と隣柱の中心とは三・九米を隔て、柱の前幅は〇・九五米、横幅は〇・六五米、高さ一・七米にして上部に於て窄み、柱頭には直徑一・八六米、高さ一・三五米の礎石あり。石灰と砂とにて作り、全く石を用ひず。

ガオラには之よりも小き同形の圓柱の列あり。其二列に更に低き一列の圓柱附屬す。恐らくは此圓柱は屋敷の境界を示せるものなるべし。

六遺跡

アスマミスには獨特の形を有するものあり。卽ち柱は周壁上にあり。之と同じき礎石なき圓壁はムウトシュンにもあれど、同所にても或る建物に於て狹き通路を作る目的にのみ建てられしものにて上の方に擴がりたる通路の上に柱頭あり。普通の圓柱之に對立す。四柱頭にて區劃せられし室の左方に玄武岩の石臼二個あり。此廢趾中に斧、石鑿其他石製の諸道具、ホラの貝、桶の破片等あり、尙卵圓形にして兩端尖れる投石無數に存在す云々。

サイパンの遺跡

サイパン島アギンガン海岸附近にあるものも亦寫眞第二版のbに於て見るが如く、上記と同一形式に屬するもので、約二十坪の地積に五柱宛二列に排置せられて居る。其寸法は次の通りである。

列の間隔　十三尺五寸
柱の間隔　十三尺五寸　各四本の柱は正方形をなす
柱の全長（鉢を含む）　七尺
柱の徑　柱頭　長幅　二尺四寸　短幅　一尺七寸　柱脚　長幅　三尺二寸　短幅　一尺八寸
鉢。徑　三尺七寸。周廻十一尺五寸

寫眞中向つて左の列の五本目と右の列の五本目とは倒壞し、今尙鉢を戴いて居るものは二基あるのみである。布哇のビショップ博物館員ホルンボステル君は最近第二柱の中間に於て人骨を發掘したといふことである。

石柱の用途

此附近には高さ約二尺五寸の石柱若干の對立して居るものが數ヶ所ある。又同じサイパン島のラウラウ海岸附近にも高さ二尺五寸程の石柱が五六個殘存し（以上支廳報告）、北部諸島には玄武岩の石柱もあるといふことであるが、私は未だ確報に接して居らぬ。

右の石柱の用途については之を墓地なりとするものと家屋の殘骸なりとするものとの二說がある。墓地說は此遺跡の敷地就中柱脚竝に鉢の上面の窪穴から人骨の破片が發見せられる事實に基くものであるが、縱ひ副葬品と共に完全なる遺骸を收藏する墓壙が今後此等の遺跡から發見せられることがあるとしても、上記ナンマタールのシャウ・テ・レウル王の墳墓と同樣に、廢墟を之に充當したことも有り得るから、本初から墳墓として構築せられたことの證據にはならぬ。家屋說の根據は一五六五年スペイン王の命によりグァム島を探檢したレガスピ一行の報告中に、土人の家屋は堅牢な石の柱を以て地上から高く屋根を支へ室房の區劃があると記されて居ることにある。上記の石柱が其名殘であるとすれば之を以て重い大きな屋根を支へたものとせねばならぬ——上に引用したフリッツのロタ島の記事によると、同人は此石柱の上に土臺を架し、更に其上に柱を建てたものと解して居るやうであるが、現在のギルバート島の家づくりを見ても（後篇第二章參照）、其想像は不當である——さりながら其面積の狹小なるに比し、柱の强大に過ぎることを考へると決して實用的住宅と見ることは出來ぬ。私は上記の數例から次の如き事實を見出した。

一、柱の高低大小に拘はらず、奥行は略一定して居る。卽ち十二尺乃至十三尺に限られて居ること。
二、四本の柱で限られた面積は略方形であること。

此は或る原型に模倣して作られたことを暗示するもので、居住の便宜からいへば有り得ぬことである。恐らくは其原型は由緒のある極めて神聖なもので之を變改することを許されなかつたのであらう。此の如き神聖な建築は神社の外に之を求めることが出來ぬ。柱の上に屋根が葺かれてあつてもなくても其は問ふ所ではない――社が必しも實際の家屋たることを要せぬのはポリネシア諸島の例によつても明で、我上代に於ても亦さうであつた（拙著「我等が祖先の信仰」參照）――此壯大なる石柱で取圍んだ場所卽磐垣內がユニハ（齋庭）であつたので、上記ボナペ、クサイの遺跡に於て見る石壇と同樣に、神は窟に坐すといふ觀念から構築せられたのであらう。此觀念が天然岩窟の存在の極めて稀な絕海の孤島で發芽したとは思はれぬから、最初の移民が其本國から將來した思想であると見ねばならぬ。

磐垣內

磐垣が柱の形を以て表現せられたといふことについては疑を抱くものがあるかも知れぬが、ドルメン、トリリトン、モノリースが石壇と同一起源のものであると推定すべき理由のある所を見ると（拙著「太平洋民族誌」一七六頁以下）、決して有り得ぬことではない。我國に於ても神の社に若干の石柱を建てて標識とする古習のあつたことは引田の赤猪子の歌に「三諸につくや玉垣つき餘し誰にかも寄らむ神の宮人」（古事記長谷朝倉宮段）とあるによつても想像せられるのである（拙著「日本言語學」五〇八頁）。此寄りましの柱の個個別々に獨立したものが所謂石神として今の世まで信仰せられて居るのである。

七　種　族

本書の當面の目的はミクロネシアの民族の生活と、其文化とを研究する資料を提供することにあつて、之が由來、淵源について斷案を下すが如きは私の貧弱な智識の及ぶ所ではないのであるが、次章以下竝に後篇の記事に移るに先つて問題に上る人民は略〻どの方面から來た如何なる種族であるかといふことを心得て置くのが便利であるから、こゝに內外學者の說をあげ、其について私の管見を述べることにする。

隣民族との關係

此問題に關する今日までの議論は極めて漠然たるもので、之を要するにミクロネシア諸島に居住する人間は四隣民族、就中ポリネシア、メラネシア、マレー、ネグリトの雜種で地方によつて其原種及混血の程度を異にするといふ以上に傾聽すべき釋明は與へられて居らぬ。其だけの事ならば學者の說を俟たずとも机上に地圖を披げて見れば誰にでも想像がつくのであるが、此雜種がどうして出來たか、原種と如何なる相違があるかといふことが明にならねば民族學上何等の價値がないことである。昔日の海員僧侶等が唱へた臆說は科學上論據の乏しいものであるから、姑く論外としても、十九世紀末以來歐米諸國の學者の論議が一として動かすべからざる定說と認められて居らぬのは遺憾千萬である。

太平洋の諸島が地理學上メラネシア、ポリネシア、ミクロネシアに分たれて居ることは世人周知の通りであるが、メラネシア人、ポリネシア人、ミクロネシア人と稱せられるものは必しも右三地域內に居住す

る人間といふ意味ではなく、ポリネシア諸島中にもメラネシア人が住み、メラネシア、ミクロネシアにもポリネシア人の痕跡がある。ことに境界の地には其兩種又は三種の混血が占據して居る。例へばカール・マイニッケ教授によればギルバート島民はミクロネシア人とポリネシア人との雜種であるといひ（「太平洋諸島」第二卷三三二頁）、多年此群島に居住した英人バルキンソンも同樣の說を述べて居る。ポリネシア人は今より一千五百年乃至二千年前西方インドネシア叢島から移住したものであるから、廣い意味に於てはインドネシア種族中に含まれべきものであるが、其鄕土に殘つた同胞は四分五裂して今ではインドネシアの名を以て總稱すべき一種族としては存立して居らぬから、ポリネシア人も亦一個獨立の種族と見るべきである。其故にミクロネシア諸島にポリネシア人の血統があるといふことは東から西に向つて行はれた移住を意味し、インドネシアから東遷する途中に此地に足を駐めたものがあつたとしても、其はポリネシア人の裔とはいへぬ譯である。ポリネシア諸島の植民が長い歲月に亙り幾多の團體によつて成されたといふことが事實であるとすれば、其或ものがミクロネシアに立寄り、こゝにも若干の後胤を殘したことは極めて有り得べきで、マイニッケ教授の說の如く體質上ミクロネシア人とポリネシア人との間に大差が認められぬ（第一卷三三頁）のは其祖先を同うするからであると說明し得られるが、之を以て前者は後者から分岐したとすることは出來ぬ。否、若しマイニッケ說が當を得て居るとするならば、其は兩者共にインドネシア人の未なるが故にと言はねばならぬ。さりながらポリネシア諸島に住みついたものが、其地に於て一種族として發達した後に於ても、ミクロネシアに移住したもののあつたことは勿論で、ヌクオル島住民の如きは其最顯著なる一例である。

ヌクオル人ポリネシア族の影響

ヌクオル島民の傳說によれば、昔日ウァウェと其弟とがエリス群島のヌクフェタウといふ島から配下を率ゐて此地に移住したのが其祖先であるといふことである。クバリーは平均三ケ年毎に交迭する大祭主—島民の最年長者が之に任ずる——の名が約二百餘語り傳へられて居ることによつて最初の移住を略〻六百年前と推定した（ゴーデフロイ博物館目錄三三一頁）。此一群の民は純然たるポリネシア語を用ひ、ポリネシアの信仰習慣を守つて居るが、クバリー視察當時に於てすら人口僅に一二四名で、近隣諸島との交通はあつたが、之に向つて膨脹した形跡はない。さりながら此小支流以外にも幾多の小移住があつたらしく、民族的獨立を保ち得なかつたけれども、少からぬ感化を及ぼしたことは次々に說く通りである。

其一例として擧ぐべきはミクロネシア叢島中ボナペ、クサイに於てカヴァ酒（ボナペ語ショコ）を用ひる——又は用ひた——ことである（後篇第三章參照）。これはポリネシア人の特色で、純メラネシア人乃至マレー・ネグリト人の知らぬものである。ボナペの傳說によれば此草はクサイ島から渡來したといひ、又島民の祖先はオアウといふ所から出たといふ口碑があり、其他ポリネシア語らしい地名も少くはないので、右のオアウが布哇のオアフで、同地方のポリネシアが東方から此島々に移住した證左であると說くものもあるが、ポリネシア人の布哇占據は比較的新しいことで——十二世紀乃至十四世紀（拙著「太平洋民族誌」一二三頁）——であるのみならず、後記のやうに、ミクロネシアの東端に位するマーシャル群島民が西方から來た民によりて植民せられたことは略〻疑がないから、ポナペ、クサイのみが入れちがひに東方から來た

ポリネシア人の裔であるとは信じにくいことである。上記マタラニムのイショ・カラカル（クバリーはイヂ・コルコルと記した）は南方不毛の地パリ・アイルから蠻民を率ゐて先づポナペ島の西方十浬にあるアント（又はアンデマ）を占領し、次でマタラニムに渡來したものであるが――其後裔をチブ・エン・パナマイ（パナマイ族）といふので、クリスチャンはパナマイはオセアン島（赤道直下にある有名な燐鑛島）の本名パナパと關係があるのではないかといひ、其鄕土をギルバート島と推測したやうである（「カロリン群島」八四頁）――或はポリネシア人（又はポリネシア人とメラネシア人との混血）ではなかつたらうか。ポナペに食人俗の存した形跡があるといはれ、其言語にポリネシア系の語の多いことは一面の證據である。

黑色人（ネグリト）の血

黑色、縮髮、長頭の純然たるメラネシア人の血も亦少からず混人して居ることは爭ふべからざる事實であるが、其民族的集團は今日のミクロネシア諸島中には發見せられず、大擧して渡來したといふ傳說も殘つて居らぬ。パプアと總稱せられる南隣ニウ・ギニア島民中にはメラネシア人が大部分を占めて居ることは事實であるが、マレー其他の民族も棲息しことに山中にはペゲセム、ゴライアス、タピロ族のやうな短頭、短身の人種がある。此等の種族はフィリッピンに棲むネグリトと血緣があるらしく（「蘭領東印度陸軍探檢報告」）、恐らくはニウ・ギニアの原住民であらう――私は便宜の爲之をもネグリトと呼ぶことにする――さればミクロネシア人の脈中に流れる黑色の血は果してメラネシア人から傳はつたものか、或は太古フィリッピン、ニウ・ギニアと同じく此地に居住したネグリトの名殘であるか、研究して見ねばならぬ問題である。

侏儒

クリスチャンによればポナペにはコナ（巨人）及リオト（食人種）の來着以前に黑色、低鼻、短軀、鴃舌のショカライといふ人間が住んで居たといふ傳說があり、西海岸パラン河口の人民は其後裔であるといはれて居る。クバリーはナンマタールの廢墟から發掘した四個の髑髏を測定して長さ一八一サンチ、幅一二七サンチを得（長幅指數（インデックス）七〇・二）、典型的メラネシア人のものであることを確め、此大工事の建造者も黑人であつたらうと推斷したが、ナンマタールが本來墓地として構築せられたものでないことは既述の通りであるから、メラネシア型の髑髏の發見は曾て其種族のものが渡來した證據にはなるが、之を以て此地の先住民と斷定することは出來ぬやうである。私は寧ろ此遺骨は上記のコナ（巨人）又はリオト（食人種）に屬するもので、其渡來以前に於てショカライを驅逐して巨石工藝を殘したものこそミクロネシア諸島の開拓者であつたらうと考へるのである。パラウ島民の口碑に傳はる珠玉も行舟の術をも知らなかつたといふ原住民もやはりネグリトではなかつたらうか。ドクトル・セムペルはパラウ人について體質言語風俗上から推測して、マレー・ポリネシアの素地に多量のメラネシア成分を混じたものであると說いて居るが（S三五六頁以下）、メラネシア人がどの方面からいつ時代に渡來したかといふことは不明であるのみならず、此島とニウ・ギニアとの中間に橫はるソンソル、メリル、プル、ブナージ諸島民が、クバリーの視察報告によればパラウ人よりも寧ろポナペ人に近いといふことも奇とせねばならぬ。

メラネシア族の影響

パラウ、ヤップ兩島民が他島の住民に比して色が黑く、縮卷髮のものが多いことの故を以てパプア・マレー混血種とすることの誤なるはドクトル・フィンシの說の通りで（F一五八頁）、同人の引用した所によ

るとミルチョ・マクレーも一八七八年伯林人類學協會に於て、パラウ人は體質上パプアの混血であるといひ得るけれども、其は古い昔のことで今では生活習慣社會組織から見ても純然たるミクロネシア民族であると論述したといふことである。但しパラウ人を中央カロリン人と全然同一視することは其傳說工藝等に稽へ、不可能であることは次々述べる通りである。

マリアナ島民

ドクトル・ルードウィック・クラウゼは上記の如くミクロネシア人の頭蓋骨百二十有餘を比較研究して東部に至るに從ひ漸次長頭顱が增加するといふ事實を發見したと稱し、且太平洋諸島の住民を原住人なる暗色、鬈毛、長頭のパプア系（メラネシア人）と南東アジアから移住した黃色、直毛、短頭のマレー（インドネシア人）系とに大別し、ミクロネシア人も此兩種の混血したものに外ならぬと論斷した（ゴーデフロイ博物館目錄五四五頁以下）。同氏の說明によれば此諸島では本初メラネシア人が占據して居た所へ、西方からマレー卽ちインドネシア人が侵入して混血を生じたので、東方に赴くに從ひ長頭分子が多きを占めるのは之が爲であるといふのであるが、最西方に位するパラウ人にはセムペルの說の如くメラネシア要素が多分に含まれ、西北に位するマリアナ諸島の住民は多くの點に於てクラウゼのいふマレー人とは同一種とは思はれぬから、かく簡單に片付けてしまふことは出來ぬ。

マリアナ諸島の原住民はスペイン統治の二百有餘年の間に殆ど祖先の血が殘らぬほど甚しい混血を來した。されば其風俗習慣に尙若干昔のチャモロ人のものが殘つて居るとしても、體質が遺傳性のものである限り、クラニオロジー乃至所謂體質人類學によつて其人種的系統を探求することは不可能であるが、幸に其言語は略〻完全に保存せられ、斷片的ではあるが三百年前の記錄が殘つて居るので、次章以下に說くが如く舊時の面影が稍〻髣髴せられる。其から得た私の印象によればミクロネシア文化の淵源は此諸島にあつたらしく、往昔此地を占據した人民はミクロネシア叢島の支配者であつたと想定せられるのである。若し其以前に住民があつたとすれば其は諸島が尙陷沒するに至らぬ以前に蕃殖したネグリト種族の遺孽で、ニウ・ギニア山中の矮民族と同樣な原始的な生活を營んで居たものであらねばならぬ。

高天族とマリアナ人

マリアナ諸島に土着したものはポリネシア方面に向つて移動した大衆の落伍者ではなく寧ろフィリッピンを經て北上した大潮流の一支であらう。彼等が取つた道は臺灣海峽であつたか、或は沖繩諸島の間をぬけたか、又は一旦日本に到着してから伊豆諸島を傳うて南下したのか、之を詳にすることは出來ぬが、最後の途を通つて或る時代まで我國と交通があつたことだけは肯定せねばなるまい。島民の口碑によれば彼等の遠祖は「タカ」と呼ばれたといふことであるが、此稱呼はフィリッピンのタガル族と由緣がありさうに思はれ、「タカ・アマ」卽ち「タカマ（高天）」――これは先住民族アマ（海人）に對する區別稱呼である――と呼ばれた我々の祖先とも全然無關係であらうとは思はれぬ。沼澤水利の便を缺く島地に營田（ウナダ）を設け溝を掘り米を耕作して主食物としたことの如きは偶然とは思はれぬ一致である。

チャモロ族の東方及南方發展

此民族は航海の術に長じ、比較的高い文化を有したので、久しからず東方諸島に伸び、所在の先住民と混血してカロリン民族が生成した――上記のやうにチャモロ語でカロリン人をグ・パラウと稱へるのはパラウアン（婦人）といふ語と關係があるらしく、或は雜種を意味するのではあるまいかと思はれる――東

の方布哇までも渡航したといふ傳說は確證せられぬとしても少くともマーシャル群島には其感化が及んだやうである。エルトランド師は島民の口碑と其ウネナク（家傳の淵源）が玄武岩であることと、マーシャル語と東カロリン語の近似との三理由をあげて、此島民のカロリン起原を主張した。其立論中には承服しかねるものもあるが、之を現在のポリネシア人、メラネシア人――乃至は東隣のギルバート人――に比べてもカロリン人に近いと斷定し得られるのである。

南方に伸びたチャモロ人はパラウ島群まで達した。上記の如く黑色の血を多く混じ、習俗、傳說を異にして居るパラウ島民も曾てはタカ民族に征服せられたことは同地の口碑が之を證明して居る。アウゲル・ケクラウ（ケクラウの祖神）は東方からヤップ島を經て渡來したもので、珠玉を齎らし行船の術を教へたカリズは本島に發生したのではないのである（次章參照）。マリアナ群島に殘つたチャモロ人はスペイン人の壓迫を受けて僅々半世紀の間に五萬以上の大數から二千に減少したと稱せられるが、必しも殺戮せられて死滅した譯ではなく、附近諸島に散布して同系のカロリン人に吸收せられたのであらう。

さりながらミクロネシア人の血脈に流れる血が此だけに止まらぬことは勿論で、南方からはドラヴィダ文化を繼承したらしいメラネシア人が現はれ、東方からはポリネシアに占據した昔の一族が異つた文化を齎らして逆戻りし、西方就中フィリッピン、香料群島からは昔のインドネシアンと蒙古人とが混血した現在のマレー人の影響を受けた。

マレー移民

マレー人の移住といふことは多くの學者によつて主張せられた。クバリーはパラウ人の政治、國家、社會組織をスマトラのメナンカバウ其他の未開マレー人に似て居るといひ、クリスチャンは比較言語學の見地から海上の勇者なるマレー人の波がジロロ（ハルマヘイラ）海峽を經て東方に押し寄せ、農業民なる原住黑人を壓倒し、之と混血したといふ結論に到達し、カロリン各地の言語にマレー語乃至サンスクリット系の語が多いことを指摘したが、其マレー人なるものは現在マレー叢島の沿岸諸地を始めフィリッピンの或る部分に蕃殖して居る種族をさすものではなく、其以前からインドネシア諸島に占據し、今尙爪哇、ボルネオ、スマトラ、セレベス等の內地に痕跡を留めて居るプレ・マレヤン（卽ちインドネシアン）をいふものののやうである。ミクロネシア諸島がインドネシアから植民せられたといふことについては恐らくは何人にも異議はあるまいが、問題は其年代と經路とである。之をポリネシア移住と同時若くは其以後とし、且ジロロ海峽を經由したといふ說に對しては私は上述の見地から斷乎として反對せねばならぬ。日本民族とポリネシア人又はメラネシア人との間に若干の關係があるとしても、其はメラネシア、ポリネシアの植民後に起つたものではなく、彼等が尙未だ東漸せぬ以前、インドネシア諸島から移住民の大潮流がフィリッピンを經て北上したのである。ミクロネシア人の祖先は其一支流であらうと推定せられる。此關聯の鍵を握つて居るのは臺灣生蕃の或るものであるが、總督府が年來巨額の經費を生蕃調査に投じ、其資料が書庫に山をなして居るにも拘はらず、此問題については解決の端緒すら與へられず、全世界の我々同志が臺灣によつて研究の途を遮られて居るのは遺憾千萬である。

インドネシアンの一大支流

異民族の部分的混血

パラウ島にメラネシア人の感化が及び、ポリネシア人がヌクオル島に根據を占め、ボナペ、クサイ其他

の東部諸島に影響を與へたことは既述の通りであるが、爾餘の諸島に於ても中世以降異民族の感化を受けたことは有り得べきである。マリアナ諸島とフィリピンとの間には夙に交通があつたのみならず、スペイン時代に多くのタガル兵士を用ひたから、其血が多分に混つて居るといはれ、ことにスペインの影響を蒙つたことは多大であつた。パラウ屬島中ソンソル其他の離島民がパラウ人よりも遙にヌクオル、ポナペ人に近いといはれるのはポリネシア人の血が多く雜つて居るからであらう。ファイス、ウルチ群島にはポリネシア系のマウイ神話、卽ち海底から島を釣上げたといふ傳說が行はれ、米人チャーチルの研究によればヤップ語中にはポリネシア系のものが少くはない（八百語中三十六）といふことである（一九一一年米國地理學協會報所載「ヤップ島民」）。此島民がタブを嚴守し、ポリネシアのマラエ（社）に似た墳墓を設ける等、他島民と異つた風俗を有して居る所を見ると、或はポリネシア人の一支流が此方面に襲來したことも有り得べきである。ヤップ島の石貨（後篇第六章參照）は島民の祖先が鄕土から携へて來た神聖な岩を摸したものであるといふ傳說が誤なくばマラエの石を携帶して移住することを例としたポリネシア人の風俗に合致するもので（拙著「太平洋民族誌」二五九頁）、或時代の征服者の祖先がポリネシアから來たといふ想定が成立するのである。

附記。　西洋人中には往々マーシャル、カロリン人をカナカと呼ぶものがある。此語は布哇語の「人」といふことで、サモアのタナタと同語であるが、ミクロネシア人は之を用ひぬ。恐らくは布哇から來た宣教師等が漫然此叢島の土人も布哇人と同種であると速斷して命名したものであらう。サイパン島ではチャモロ人とカロリン人とが雜居して居るので、之を區別する爲にカロリン人をカナカと呼稱して居るやうであるが、——日本人が自國のことをジャパンと稱へて得意がるやうに、彼等のうちにも自らカナカというて居るものもあらうが——本書の如き學術的研究に用ひるべき語ではないから、私は常にカロリン人とかくことにした。之とても土語でないことは勿論であるが、尙學問上承認せられた呼稱であると信ずるからである。

第二章　信　仰

一　原始信仰

基督教の普及

大正十三年末の調査によれば島民人口四九、五七六人中基督教歸依者は二五、四四六で、之を支廳管區別にすると次の通りである。

管區	人口	新教徒	舊教徒	計	百分比
サイパン	三、四三四		三、四三四	三、四三四	一〇〇
パラウ	五、七一七		四〇四	四〇四	七
ヤップ	七、八九三		五〇〇	五〇〇	六
ルク	一五、〇九二	五、二一四	四、七六八	九、九九三	六六
ポナペ	七、七九一	四、三七一	三、〇二一	七、三九五	九七
マーシャル	九、六四八	三、二四〇	四五九	三、六九九	三八

卽ちパラウ及ヤップ管區竝に隔絶した離島の民を除いては全部基督教徒であるというても差支がないのである。布教の最早く行はれたのはマリアナ諸島で、二百五十年來舊教牧師の努力によつて島民は盡く教化せられた——否、舊い信仰を棄て得ぬ人民を戮滅して耶蘇教徒と取かへたといふ方が當を得て居る——が、附近の諸島の布教はヂュロン、カントヴァ其他の熱心な牧師を犧牲にしたのにも拘はらず、幸か不幸か常に不成功に終り、一八八五年獨逸の窺覗を防ぐ爲、パラウ及ヤップ島にスペインの官署が設けられるまで、何人も舊信仰を破壞するものがなかつた。東部諸島に於ては既述の如く、一八五二年に布哇教會から派出せられたスノウ、ギューリック等によつて新教の宣傳が開始せられたが、クサイの布教が比較的容易であつたのに反し、ポナペに於ては甚皮肉にも當時同地に假寓した百名に近い白人の妨害に逢うて少からぬ困難を感じたけれども努力の效は空しからず、右兩島は勿論ジャルート、ルク其他の離島にも新教が擴がつた。然るにスペインがポナペに太守を置くやうになつてから、其國教なる舊教教義を宣播する爲に、米國牧師に壓迫を加へ、土人にも改宗を迫つたので、一時は新舊兩教徒の間に面白からぬ疎隔を生じ、一八八七年、一八九〇年に於けるマタラニムの叛亂の如きも其裏面には米國派宣教師、傳道士等の影が潛んで居たと傳へられたのである。獨逸の占領に歸して後は新舊兩教の妥協が行はれて布教は益〻效を奏した。

宣教師の舊信仰に對する態度

スペイン僧侶の異教民に對する態度は論外としても、由來宗教家には異端を容れる雅量が乏しいもので、島民の原始信仰に對しあたゝかな同情を寄せたものは稀である。民俗誌家の多くは好奇の眼を瞠つて之を眺めるけれども、信仰上から社會諸相の研究を進めて行くほどの篤志家はなかつた。其故に基督教の浸潤したマリアナ諸島、ルク、ポナペ、クサイ等では若干の宗教的慣習が無心に殘されて居るだけで原始信仰

は全く消滅し、斷片的記錄すら甚乏しい。其中に在つてエルトランド師のマーシャル島に關する報告は實に曉天の星である。比較的基督教の影響の少いヤップ、パラウ等についても此方面の資料を求めることは頗る困難である。バスチアン教授の "Allerei aus Volks- und Menschenkunde 中に收錄せられた「パラウの宗教」と題するクバリーの論文は多くの材料を供給するものらしいので、之を購求することについて一方ならず在獨友人を煩はしたが遂に入手することが出來なかつた。幸にも今次南洋廳から與へられた此方面の資料は比較的豐富で、他に得やすからざる貴重なものもあつたので、私は不完全ながら此一章を起草することを得た。西洋人の眼には全く不可解に映じた島民の舊信仰も我々には合點の行くことが多く、迷信と貶せられた慣習のうちにも相當の理由が發見せられるのである。私は斯界の專門家ではないから或は觀察を誤つて居るかも知れぬが、少くとも此一章は從來世に公にせられた此地方の社會學的、宗教學的研究に一小波紋を起し得ると信ずるのである。

チャモロ人の舊信仰

昔のチャモロ人の宗教について耶蘇僧侶の記述した所によると「土人は山嶽河海作物及家屋の靈を崇信し、日常の行事及動靜について之に祈願し、又祖先の靈魂をも尊敬して之に冥助を求め、之に贄を獻げた。死體は山林中大樹の下に埋めたが、其壙は民衆によつて畏敬せられ、伐木狩獵の爲に其地域に出入する場合には豫め神靈の許を乞ひ、萬一其禮を盡さぬに於ては必ず不幸に逢ふと信ぜられた。祭の際には各戸小舍を建てて花を飾り、燈明をあげ、其前に集つて神樂を奏して伏拜其他の禮を行ふ。祭が終つた後小舍を毀ち祝宴を催した」といふことである（「グアム島」所載）。次節以下に說くが如く後世色々の信仰が輸入せられた形跡があり、或る奇蹟によつて生物無生物が神とせられたことも少くはないやうであるが、本初は各地共に靈魂、就中祖靈崇拜であつたらしく思はれる。其顯著な例を擧ぐればモルトロックのタ島の祭祀神は左記の如く各氏族の祖神であるとクバリーによつて報告せられた（バスチアン一〇七頁）。

祖先信仰

氏族名	祖名	神名	司祭
ソブン	マトイラム	サピンファピア	
イラマラウ	モエト	サンピオン	レグ
ソルサウヤン	レイボフィス	ウルブアス	エヌク
ソル・アピラ	プカン	テリエ・ラプ	
ウエア	ザピ	オル	アススエラ

ヤップ島のゴチャパ、ルル、ニミグイル及ゴロル、マップ及ラムン、トミル區にも其地方のみで祭祀せられる國つ神又は氏神があるとクリスチャンは報告して居る（次目參照）。土語ザギズ（Zagiz）は靈の意であるといふから（カプチナ教會一二一二年度年報四八頁）、此島にも祖先信仰が存したのであらう。パラウにはカリズの外にアウゲルと呼ばれる神があつて、舟を以て靈代とする。語義は不明であるが、祖靈であるらしい。少くとも東方からヤップを經て渡來したといはれるアウゲル・ケクラウはケクラウ人の祖神である。勿論祖靈の外にも幾多の神がある。中央カロリンには軍の神（アロン）、海の神（ラスサウ）、情事の神（イナマク）等があり、最高の神として天の御中主（ラゲイヤン）の存在が信ぜられたといふことであるが（ク

バリー）、平常の祭祀神ではなかつたやうである。マーシャル島でも祖先信仰であつたと報告せられて居る（バスチアン）。

祖靈崇拜の由來

原始人には抽象的觀念が極めて乏しかつた筈であるから、彼等の間に祖先信仰といふ觀念が起つたとすれば、其は目前に見る事實から出發したものであらねばならぬ。思ふに人間には皆心靈――チャモロ語アンテ、カロリン語アヌ（又はアニ）、クサイ語アニネ、パラウ語ア・レン、マーシャル語アーン――がある。此心靈は夜中眠つて居る間には體軀を離れて遊行する（夢）こともあるから、永久の眠についた後もどこかに殘存して居らねばならぬと考へられた。――私はタイラー、スペンサー等の說を請賣するものではないが、國語のユメ（夢）がヨメ（大嘗祭祝詞）とも稱へられ、ヨミ（冥界）と同一語であることから見ても、少くとも我上代人にはかく信ぜられて居たと推定するのである――有力者の靈魂は生時に於けると同樣な威力を生人に及ぼす筈である。廣い意味に於ては人間は同祖であるけれども、特に氏族の祖先は其氏族のものと關係が深いから、之に信賴すれば危難を免かれ、其意に背くやうなことがあれば祟りを受けるといふのがミクロネシア島民の信仰であつたのであらう。上節創世神話に於て見るが如く、創造者の多くが同時に人間の祖と信ぜられて居るのは此故である――例へばカロリンのアルエラプ、ルゲレン、オリファト三神の如きは其稱呼及相互關係については種々異說もあるが、人間の祖といふことについては一致して居る。ポナペのイジョパン、マーシャル（ラリク列）のロア、パラウのオバガス女神も亦其である――さりながら神卽ち祖靈は必しも生きた酋長ほどにも公平ではなく、往々惡人に罰を與へず、善人が庇護を蒙らぬこともあるので、彼等は之を荒魂（カロリン語アヌ・ナウ）、和魂（カロリン語アヌン・ガット）の作用に歸し、此荒魂をチャトアンテ又はアニテ（チャモロ語）、タフツプ（ヤップ語）、ケラケズル（パラウ語）、アニ（ポナペ語）、ジテプ（マーシャル語）などと稱へ、ユオス（チャモロ語）、タウツプ（ヤップ語）、カリズ（パラウ語）、アツア（ポナペ語）、エケジャプ（マーシャル語）の如き神性の神と區別して、之を恐れ、其怒に觸れぬやうにまひ（賂――幣）を捧げ、かじ（加持）の手段を講じた。祭祀其他の宗教的儀式が多く此種の靈魂に對つて行はれる理由はこゝにある。曾て回教に歸依した爪哇人が在來の神を祀ることを罷めぬのを咎められたとき、コランの神は善神であるから、祈らずとも護つて下さるが、此地の神は祭らねば祟りをすると答へたと聞いたことがある。此は最卑近な語で爪哇人の宗教思想を表現したもので、ミクロネシアにも適用せられると思ふ。宗教哲學者、社會學者等は此見やすい理由に滿足せずして、其中から強ひて幽玄神祕なものを見出さうと努めて居るらしいが、ミクロネシア人の祖先は此れ以上深く考へなかつた――否、考へる能力をもつて居なかつた――と思はれるのである。

荒魂、和魂

自然物崇拜

日月星辰を讃美し、雷電其他の自然力を恐怖したことは勿論であるが、土人は其自體を神であるとは考へて居なかつた。其故に上揭創世神話中にも、日月に言及したものはあるが、之を神に擬へたことは見えぬのである。ポナペのナン・ジャッポ（又はナン・ジャプエ）は眞のアツアで、雷の神であるといはれて居るが、此稱呼はマーシャルのエケジャフと同じく（エは冠詞、ケ及ナンは使動接頭語、ジャップは「極」といふ一意）「宇宙を支配する」ことを意味するらしく、語義上雷又は霹靂と解することは出來ぬ。恐らく

は此神が雷に化現するといふことであらう。ギルバート島でも雷電（テ・バチジ）は最高神タブ・アリキの權化とせられて居る。風雨水火を掌る神の存在が信ぜられて居ることは我國と同樣であるが、風雨水火其ものは神ではない。

神と人との關係

マーシャル島では地物木石禽鳥魚介にして神名を有し島民に崇拜せられて居るものが極めて多く、クサイ、ポナペには石神崇拜の形跡があるといひ、パラウには陰陽石が各村に祀られて居ると報告せられ、ヤップ島では現に老樹を神に祀つて居るが（次目以下參照）、此等も亦靈神の權化か、然らざれば神の宿る所として尊崇せられたので、其自體が神でないことは次々に說く通りである。

人情淳朴な世には人間と神との關係は文明社會に於て見るやうな餘所々々しいものではなかつた。人間は今よりも多くの親しみを以て神に對し、神靈も亦今日よりももつと善く人間の世話をやかれるものと信ぜられて居た。其故に神と人間との交涉は現在よりも頻繁で、パラウ人の如きは曾ては其地にカリズ（神）と人とが雜居して居たと信じ、ポナペにはアニ・アラマス（神人）といつて神とも人間ともつかぬものが居住し、かのナンマタールの大工事を起したと傳へられて居る。人間の最有力者はやがて神であつた。クサイのトコサといふ語は神の意にも島王（レレ島に居住する）の意にも用ひられ、ヤップ及モルトロック島に於ても酋長が司祭者を兼て居る。其は神權政權兵權が尙分離せずに神の直裔なる族長の手に保有せられて居ることを示すものである。荒魂とマ物とをめづらしがつて見た人達に此等の消息が呑み込めなかつたのは已むを得ぬことであるが、私は此島民の有した信仰思想も我々の祖先のものと大差がないと見るのである。最高神が全智萬能ではなく、總ての神が盡く神性の美德を備へて居るものでないことは次に揭げる中央カロリンのオリファト神話によつても明である。此話には色々の異說があるが、私は上記ポナペの醫官ドクトル・ギルシュナーが採集したナムルク（モルトロック群）のものを轉載し（ロラント・ザクソンの譯による）、之に若干の註記を加へることにした。

オリファト神話

『オロファト神――又はオリファトとよび、ルゲレン（又はルク）神が地上の妻ハムルルに生ませた子であるといひ（パスチアン）、或は地上の妻タツツソの腦天から生まれ、生まれると直に驅け廻はつて自らの臍の緒を嚙み切つたともいはれる（チャミソ）――は其兄弟達が自分よりも善い人で、且麗しいのを見て氣が荒んだ。彼は天上から國土をながめ、二人の兒童が鰻を捕へ、魚池に入れて遊んで居るのを望見して地に降り、鰻に齒を與へたので、子供は手を咬まれ、其母（オロファトの姉リゴアププ）に訴へた。母からは誰か來たのを見なかつたかと問はれた子供は、未だ曾て見たこともない美しい人に遭うたと答へた。オロファトであることを察知した母は其男を伴ひ來たれと命じたが、子供がもとの海濱に來たときには既に其人はなくて、白髮の醜い老人が居るばかりであつたので、家に歸つて其由を母に告げた。誰でもよいから連て來いといふ吩咐によつて再度濱に出て見ると、老人の居た跡には穢いものが堆く積まれてあるのみであつたので引かへした。母なる人は三度子供をやつて其塵塚に向つてお前はオロファトではないか。さうならば母さんが呼んで居るぞといはせた。塵塚はまたもとの美しい男になつてついて來た。リゴアププがこれを見て此大騙り奴がと叱つたら、何故かと反問した。「お前は最初老人になり次には塵塚に化けたとい

ふではないか」「其は親爺が怖いからだ」「さうであらう。お前は鰹に齒を與へるやうな惡いことをするから、叱られるのが當然だ」「イヤ私は親爺のルクが氣にくはぬ。親爺は私よりも兄弟を綺麗につくつて大きな力を與へた。私はすべての鰹に齒を與へて舟が顚覆したとき人間を喰ふやうにしてやらうと思ふ」とオロファトは廣言した。

天上のルク神は早くも此事を知つて妻のイネセマンに對つてオロファトは下界で惡い事ばかりするから天に呼び返さねばなるまいといひ、女神も亦彼は惡い奴で人間の種を滅すかも知れぬから呼び返へす方がよいと思ふと答へた。乃でルクは天上の民に命じて大きな家を作らせ、其竣成を祝ふ大饗宴の準備の魚を捕る爲に作つた大筌（ウケ）にオロファトを入れて海に沈めた。五日の後舟を漕ぎ出した二人の男がオロファトは筌から既に死んで居ることと思ひ筌を引上げて見たら彼の妻はなくて魚が一杯入つて居た。オロファトは筌から逃げ出して舟に乗つて近くに居たのであるが、其とは知らぬ男達が「お前は誰か」と尋ねた。「私はオロファトであるが、魚を取出す手傳をしてやらう」というて彼は筌から舟に魚を投入れるときに盡く肉を抜き取つて皮ばかりを殘し、自分の爲に最小い魚を一つ剩して私は之で十分であるから全部ルク神に上げてくれというた。舟人が歸つて獲物を獻げたとき、ルク神は筌はどうしたか。誰が魚を捕へたかと尋ね、オロファトが之を捕へ筌を再び海に沈めたといふ答を得て、更にオロファトが自分の分前を取つたかと問ひ、最小のもの一匹を其の手に殘したといふ報告を得た。乃でルク神は大饗を命じ、種々の食物を調理させ、右の魚を煮させた。總ての人が新屋に集まつたとき、オロファトは入口に座を構へた。ルクは人々に對つてさア食へ、食物を分けて配れと命令したが、オロファトのみは分前を受け取らなかつた。人々が魚を食はうとしたら、驚くべし、其は空（ウツ）ろで、皮の下には一片の肉もなかつた。人々は果物だけで滿足する外はなかつた。

然るにオロファトのみは一人で魚を賞味して居るので、ルク神が之を見て我々に魚がないのにオロファトのみが飽食するのは不都合であると立腹し、雷にオロファトを殺すやうにいうてやつた。雷は遠方に住んで居たので、ルク神の命をうけた神の一人が食物を運んで行くのをオロファトは追ひかけて之を奪ひ、自ら使となつて其家に行き、食物を持つて來たぞといふた。雷は一羽の白鷄を見つけて家の外に出てゴロゴロと鳴つた。ルクが其奴を殺せと叫んだので雷は稻光を出したけれども、オロファトは唯一寸眼を手で藏うたのみであつた。雷は尙も之を追ひかけて、再び後から落ちかゝつたが、オロファトは豫て用意した椰子乳を衣の下から出して電光を消し止めた後、之を捕へて其家に送りかへした。オロファトが大饗屋にかへつて來たとき、ルク神はどうして此男は無事であつたかと怪しんだ。其には頓着なくオロファトは再びもとの戸口に坐をかまへ、他の神がアヌ・ラプ（大精靈）に食物を運ぶ命を受けて出發したとき、又立上つて之を追ひかけ、私が持つて行つてやるというて其を取り上げ、アヌ・ラプの許に投込んで引返した。ルク神がアヌ・ラプに何故に其男を殺さぬかというたので、彼は大きな鉤を太い綱に結びつけオロファトに投げかけて頸に引かけたが、オロファトは蛤貝（サヽカヒ）を以て速に之を切り離し、其端にアヌ・ラプの家を縛りつけ、其關際に坐つて居た。アヌ・ラプが之を見つけて棍棒を振り上げて擊殺さうとした刹那、オロファ

トは身を轉じて石臼に化けたので、アヌ・ラブは捜したけれども見あたらず、妻に尋ねた所が大方遁げて歸つたのであらうと答へたので、横になつて眠つてしまうた。

此等の企が盡く失敗したので、ルク神は「我々はオロファトを何ともすることは出來ぬ。彼を殺す望はない」というてライチアンを呼んで門をつくることを命じた。人々が集まつてどうして門を作るかと尋ねたら、森から太い丸太を切つて來いというた。オロファトも一緒にゆくというたが、ルクは「お前は門を建てる用意をせねばならぬ」というて、柱を建てる爲に三個の穴を、二個は淺く、一個は深く掘らせた。オロファトは之を掘るときどの穴にも一側に横穴を作つて置き、且胡桃と石とを帶の下にかくして、穴の出來上つたことを報告した。ルクは柱を建てよと命じたので三人の配下が丸太の上端を擔ぎ、オロファトが下の端を持つて之を建てる時、彼を穴に突き落した。オロファトは豫て作つて置いた横孔に身をかはしたけれども、人々は之を知らず、丸太を高く持上げ衝き立て土と石とで埋めた。

總ての人はオロファトが大柱の下に埋められ舂き摧かれたと信じたが、彼は横孔に避けて居たから無事であつた。五夜の後空腹を覺えたので、携へた胡桃を石で割つて食うた所が蟻が來てこぼれた破片を引き長い行列をつくつて丸太に沿うて地上に運び出した。家の中の男が之を見つけ其妻に對ひ「オロファトは死んだと見えて蟻が其死骸を運んで來た」というた。之を聞いたオロファトは蟻に姿をかへ、他の蟻に雜つて柱を攀ぢ登り、其人の身體に落ちかゝつた所が、拂ひのけられて地上に落ちた。乃で忽ちもとの姿のオロファトに歸つたので人々は驚いて飛び上つた。オロファトは平然として何を騷いで居るのかというた。

彼の再現を見たルクは「私達はお前を殺さうとして色々に試みたが、お前は死ぬことが出來ぬと見える」というてサメコアネルを呼び、オロファトを殺すことが出來るかと問うたら、サメコアネルは「イエ、イエ一夜寢ずに考へてもダメです、彼は私よりも年上ですから」と答へた。ルクはオロファトの爲に地上の人が絕滅することを好まぬというたので、ルクの妹のラトは燒き殺したらよからうと勸告した。乃で大きな焚火をしてオロファトを連れ來り、焰の中に投げ込んだが、オロファトは椰子の絲卷を用意して居つて之を傳うて安全に火の外へ遁れ出た。ルクはラトに向つて「私達はオロファトを殺さうとして色々に骨を折つたが徒勞であつた」と嘆息した。ラトは之に答へて「彼を殺す望はないから寧ろ總ての惡人と嘘つきの王にしたらよからう」というた。』

此神話は時代々々の思想が加はつて原形とは餘ほど相違したものと思はれるが、尙ミクロネシア神話中最古いものの一であると信ずるから、煩を厭はず抄錄したのである。我々は之によつてミクロネシアの神は人間と大差のないものであることを知り得ると同時に、(一)神は變化自在なること、(二)大國主神話とどこか似た趣があること、(三)荒魂信仰の淵源が遠いことなどを、朧氣ながら觀取するのである。ルクの語義は明確ではないが、大自在力を意味するらしく——ルク語のリョク（堪能）と同原から出たのではあるまいか——ルゲラン又はルケランはルク・エ・ラン（エは連繫助語、ランは天）卽ち天津ルクである。或る異傳によればルクの父はアリウラプ（アリは君、ラプは大）、又はアルエラプ、又はエリウレプであるといひ、アルエラプの母はリゴブブであるといはれる。之と同一神らしいリゴブンドをエリウレブの同胞

で、ザブエル及ハルメルゥの子とする説もあり（パスチアン）、其他異説區々である。後記ヤップ島のヤラファズ神はオロファトの訛であらうと思はれるが、創造神で且和魂とせられ、之に反してルクは荒魂であるといはれて居る。右の如く地方によつて傳承は區々であるが、上揭のルク又はルケラン、オロファト又はヤラファズといふ神の外に有力な一女神（其名は色々によばれる）が總ての神の上に立つといふ信仰が少くとも西部カロリン諸島に普及して居ることは、祖先崇拜がミクロネシア人の信仰の根元をなすといふ私の推定を強めるものであるといはねばならぬ。

二　神

上記のルク、オロファト等は創造神として又は宇宙の支配者として一地方に共通な神であつたとしても、必しも土人の信仰生活と深い關係のある祭祀神ではなかつた。民衆の信仰の對象となり、畏敬崇拜をうけるのは之と吉凶兩方面に於て直接交涉を有するもののみで其が上述のやうに靈魂又は精靈であることはいふまでもない。其故に全叢島又は數島群に共通な神は一柱もなく、有力な祖先の神靈の外に、或る奇蹟があつたと信ぜられた場合には誰いふともなく色々な神の名が稱へられ、其が一部の信仰者によつて區々に傳へられるのであるから、之を網羅することは到底不可能である。エルトランド師は其著「マーシャル島民」中に同群島ラリク列諸島の主なる神を列擧して「或は無用の業と見えるかも知れず又其大部分は在世中の傳奇の傳はらぬものであるから、今では全く無意義であるが、民譚童話の淵源はこゝに在つて島民の歷史の半面を物語るものである」と記した。私も亦此意味に於て煩を厭はず之を摘譯することにした。

マーシャル諸島の神

（ビギンニ環礁）

（一）ルアジェト。——リ（女）、ウア又はワ（舟）、ジェト（失せたる）の連約——ウリジェバドスの妹。今大きな貝（カブエル）となつて西方の無島岩礁地帶に居る。

（二）ラメ。——ラ（男）、メ（飢）——ルコジ島の南西の肉桂樹、海上ではフレガット鳥に現ずる。

（三）ウォリリル・カン。——ウォル（珊瑚の杖）、イリル（痿かる）——西方の無島岩礁の一半。其珊瑚で傷を負ふと痛痍い。

（四）カビナム。——カブ（土地）、イ（の）、ナム（ナモ島）——蒼鷺となつて海に現はれる。

（五）レクドノルノル。——ケド（風）、ノルノル（吹）——ビキンニ環礁の北方に漾うて居る空（クプロ）の木で、吸ひ殘りのパンダヌスの毬が澤山たかつて居る。北方に棲息するといふライブイネアムエン神と同じく、此神も亦人間に害を與へる荒魂である。有名な舟乘ライニジンは之を見て南に引かへしたので、ラエの環礁（アトル）に安着したが、他のランケインといふものの乘つて居た舟は行方不明になつた。此神は又ロムリイス附近ではフレガット鳥になつて現はれる。此鳥の子は鰹（ニヒ）である。

（六）ウリジェバド。——ウル（新しいパンダヌスの毬）、イ（の）、ジェバド（海に棄る）。殘食を海に投棄ることは禁制であつた——ビギンニの內海の一珊瑚の幹。此神はウルレブ大神の子で、西方から來

た人であつたといはれて居る。(一)は其妹である。

昔ビギンニの島にリジブクラといふ癩病の女が住んで居た。其膿が海に流れて玻璃色の帶となり、之をくうた魚は盡く毒魚となつた。ウリジェバドは之を憤つて女をロンリクに追ひやつた。其以來毒魚は此島に跡を絕つたといはれて居る。

(七)ケメジ・エオカブ・ロ・エオ。　松とヒビスクスとの間に占據地の爭奪が起つた。最初松はヒビスクスを外濱に投付け、六日後の挌鬪にも勝利を得たが、結局ヒビスクスに抑へつけられた。其以來松は外濱に、ヒビスクスは民家の側に生育するやうになつた。

(八)レワ及ラムタル。　最初の舟大工であるが、白い鷗に化生し、いづれも後に折れた烏帽子を被つて居る。其は舟を剝る斧である。兩人が鳥になつたのは舟の竣工前に小舍を建てようとしたけれども、二兎を追うて一兎を得なかつた爲である。

(九)レムモロ。　ビギンニの風上(北東)側の鰹。

(一〇)レルリク・ラン。　少女。エネウの二羽の鷗。

(一一)リジバヌェン。　蜜柑を搗き落す人。エネウの良泊地である平坦の礁。

(一二)レクレインウト。——ビェユゲル島の蒼鷺(エナ)——此島ではエナナ(惡)といふ代りにレクレクといはねばならぬ。其はエナといふ語を諱むからである。

(アイリニナエ)

(一)ラジムエ。　陸上ではククケン木、海ではナジベンの附近に住む赤い鷺として姿を現はす。

(二)リムイン・イム・リジラ。　カロエの內海(ラグン)の濱にある二個の石。以前は婦人。

(三)リュミンウト。　アエの南にあるウトの林叢。海では首と翼の附根及尾に白い輪のある赤い鷺となつて現はれる。

(四)ケバキラン。　エネブクにあるエッケン木。

(五)コロジレ。　ビュギエンの內海濱にある倒れた木の幹で、其枝が舟の帆檣のやうに見える。

(六)リレエ。　ジェレアからケネカンに至る南の外濱にある一石。

(七)リオ・エ・ソレレタク。ウォト・エオ、リオイ・ジェレエン。——ジェレエンの婦人が分娩になやむといふ意——此婦人は多くの海サリカニを有し、長い尾のあるものが此地に群れて居るが、此老女に呑まれる恐があるので、土人は之に近かぬ。多勢で出漁する場合にも成るべく互に離れぬやうにする。

(ロンラブ)

(一)ラテル・イム・ラジトベレル。——貪食者及橫臥者——ブロクの內濱に棲む二尾の鰹で、極めて陸に近くまで來ることがある。

(二)ジョボクレブ。　ブロクの北方の砂堆。

(三)ラマネワ。——舟を呑むもの——トンカイエ航門に突き出た尖つた暗礁。出入の舟に甚危險である。

(四)ラペデムマル。　イジョクリクの岩礁に居る大きな鰹。頗る獰猛であるので滿潮時には何人も此岩礁に近かぬ。

(五)レト。　アエリクの地角で、ムエルムエル魚の群をなす所である。

(六)リクリリム。　エジジにある肉桂樹。

(七)ラマネワ。——舟を呑むもの、(三)と同名——ジョクリクの東に住む。之を殺さうとして卜占に問へば常に其闘士の死相があらはれるを例とした。然るに或る人が之をものともせず、其頭から吹く火焔を侵して禁厭を行ひ、海中に消えて再び出て來られなくなるまで追ひかけた。

(八)ジョエオネル。　ケロゲの内濱の北部にある鐵木の林。此處ではエオネル(漁る)といふ語を諱んで、イデーミジといはねばならぬ。

(九)ムエナリク。　ケロゲの内濱の西側の小山。

(一〇)ラニエル。　エネカン、バルブト・エンの兩小島の間にある砂堆。海上では熱帶鳥として妻を現はす。

(一一)ラマーリンワ。——マル(下敷の丸太)、ワ(舟)——アルバルの外濱の南部にある木の幹。

(一二)ジョブイレン。　ジェブウォンの内濱の石。

(一三)レルレブ。　ジェブウォンの内側、海底の岩礁。

(一四)リジブクラ。　ロンラブの北東にある鹽水林叢中にある大きな石。土人が西方諸島に航海して歸路が餘り遠くなつた時には此神を祭つて海路の短縮を祈る。

(一五)ボキュタ。——凹み——入墨をするとき腹が空いて居たので痛みに堪へ得なかつたといはれる。

(一六)ルコジタゲ。　一珊瑚の幹。

(一七)クレエン。　南の内濱エネアエドクにある鐵木の林。

(一八)リカミジェトジェタン。　エネアエドク島の北端にある平な石。

(ロンリク)

(一)ラレンボク。　赤い椰子蟹。其子はマニルと呼ばれる小魚。

(二)レアベ。　ジェテブテブの肉桂樹。本來ラダク列から來た人で、口やかましい親方であつた。之に逢うたものは漁獲がない。

(三)ラエジェン。　内濱のバトバトにある平な岩礁。

(四)ジャベ。　バトバト島の東角。

(五)アダト。　エアデアトの岩礁の彎曲にある珊瑚の幹。

(六)ジョムトリク・イム・ジョムトラブ。　岬角。

(七)レケバオ。　ナクネケンの一珊瑚幹の下に住む大鰻。

(八)リムカレ。　環礁(アトル)の北方の砂堆。

(九)リジベルボ。　往々パンダヌスの木に生ずる瘤。

(一〇)リジョアクベエン。　東内濱のリジベルボにあるビューゲル・パンダヌス。
(一一)リギロアンバル。　此環礁にある平な岩礁。
(一二)アブレド。　或る水孔にある一石。
(一三)ロカブク。　エネウェタクの濱にある岩礁で、浪に洗はれて洞穴をなし、内海に殆ど波のない場合でも白い沫に覆はれて居る。
(一四)リボコジ・ロンリク。——ロンリク環礁を包容するといふ意——エンウィルメロとよばれる一大魚。
(一五)レリンケル。　半身の鸚鵡魚(あをぶ鯛の屬)。此は鰹にくはれて半身を失うたので、本來一個の女人であつたが、其夫が漁に行くとき海幸を祈るため帶を編むことを禁じたにも拘はらず、之を犯したので鰹に呑まれたのである。此魚はまだ死なずにケロゲ附近に生きて居る。
(一六)リムケルド・イム・リムケルダク。　エネウェタクの内濱の砂の上にある二の石(女)。
(一七)ケダンダン・イム・キュランラン。——芋蟲と海蛇?——昔ドルの島に非常に大きな芋蟲が住んで居て、誰も之に近寄るものがなかつた。然るに(一六)の二少女は之を憚らず、其が住むキレンの林叢に侵入し、太鼓を鳴らし呪文を唱へて其蟲が身を伸ばすのを見ようとした。少女の兩親は之をとめたが聽かなかつた。三日の後蟲は身を伸ばして少女を呑まうとした。若し兩親が駈けつけて來て之を切殺さなかつたなら、必然呑まれてしまうたであらう。其時以來芋蟲は此アトルに住むやうになつた。此海蛇は此蟲と鬪うて敗北したので、爾來ロンリクの四十浬以内に近寄らぬやうになつた。

(ウォット)

(一)レレ。　人間の形をした丘。
(二)レルインワ。——Sula piscator(をさ鳥)——十尾の海豚を子とし、其脊の鰭を抜き取つて嘗める。
(三)ロジボウク。　海上遙に飛ぶ水蜻蛉。
(四)ラバブブブ。　海上遠く飛ぶ蝶。
(五)ボギエン・リムマンマン。　岬角。
(六)ボギエン・レジュル。　リュオヅヅの岬。海上に於てはフレガット鳥として現はれる。
(七)リバイエ。　岬角。海では二つの白い鷗として現はれる。
(八)ボギエンラキネ。　此名の岬の南に住む赤鷺。
(九)ラグエテラン。　水門にある珊瑚の幹。海上ではエウウィルメロ魚に現ずる。
(一〇)ランベリア。　貧食な小い鰹で、餌を求めてウォットから四方に泳ぎまはる。此鰹のやうにウォットの住民も亦貧慾であるといはれて居る。
(一一)リレジュグク。　ボケナエドクの外側に棲む赤鷺。其波のまに〳〵泳ぐさまは、石竈に蒸燒にすべき食品を入れ、之を木の葉で蔽ひ、土をかける女性のやうに見える。
(一二)リチルメリブ。　環礁(アトル)の西方に住む光澤のある赤褐色の鷺。
(一三)ジョウイロボク。　甚高く翔り、急に餌に向つて落下する鷗。

(一四)ラリケルケル。　ウォツトの北方に棲む病める sula piscator 鳥（ヲサドリ）。

（ウジャエ）

(一)コベルワ。　エネラムイジの鰹で、上陸して人家の床に寝る。

(二)リジョクドキエン。　南方エネラムイジの一丘。

(三)リニジロク。　ウジャエの砂堆に生ひたケノ木。

(四)ラダルブイン。——アダル（倚りかゝる）、ブイン（屋内の魔術、卜占、塗油などを行ふ禁制の場所）——ボクの内海にある珊瑚の幹。

(五)ラルエンボク。　ボクの濱の板岩。其子の小鰹は餌を投げてやつても馴らすことが出來ぬ。

(六)ラジェバド。　エベジュの内海の肉桂樹。

(七)リブジンクル。　南の外濱の鐵木の林。

(八)リトコ。　エベジュの内海の珊瑚の幹。

(九)ブイロイン・ベダクダク、ブイロ・イン・メムエ。　白珊瑚と赤珊瑚との幹。

(一〇)ラルクルク。　西方無島岩礁の内濱。

(一一)ボゲ・エオ・エリク。　岩礁の尖端。海ではフレガット鳥と現ずる。

(一二)ボゲ・エオ・エ・リブ。　其東方の尖端。海では高翔するフレガット鳥と現ずる。

(一三)キネエン。　陸から遙に突き出た幹。ウジャエの内海側では砂にさした枝で、軟肉を擦るので婦人が之に脅される。

(一四)リベ。　ウジャエの内海濱の北東のクボク島。

(一五)ベロクロク。　一尾のアル魚。陸ではウジャエの南のフィサリス林叢。

(一六)ジョカビン・バト。　ウジャエの水洞の板岩。海では一尾の鰹と現ずる。

（ラエ）

(一)ベルジ。　ロオジの外濱の Beratonia 木。海では太刀の魚となつて現はれ、他の同類が殺されても決して捕へられぬ。

(二)コレジレジ。　海では長い尾を有するヲサ鳥、陸ではロオジの南のクボク木として姿を現ずる。

(三)ラジ・カン。　西航門の海豚。

(四)ラリレ。　ロオジとラエとの間にある一石。飛鳥の漁に巧な人であつたらしく、其に關する諺が殘つて居る。

(五)リジョボゲナエドク。　ボゲナエドクの内濱にある板礁。

(六)ロキア。　南方の鷗（ケアル）、陸に於ては一パンダヌス木に姿を現ずる。

(七)ジョボギエレリン。　ラエの南西にある板礁。海にありては横に眼のついた鰹となつて現はれる。フレガット鳥ベラエと闘爭して頭の左側に負傷したといはれる。

(八)ジョル・ラメ。　ラメ・イリクリク、ラメ・イ・オラブ及ラメ・レアルの中間にある鐵木の林。

(九)リジブゲ。　ラエの内濱の東側にある窪み。

(一〇)ルウォデリ。　リジブゲの東にある小山。妖婦であつたが故に荒天を招いたといはれる。

(一一)リ・ポク・アジ。　一肉桂樹、海上では一頭の龜として現はれる。ジョボレオといふものの妻であつた。

(一二)リキロエ。　ラエの北東方にある岩礁の彎曲。此女はベラエ（七に出づ）の母であるが、其子と通じた。其以來此處に打よせる波の飛沫は海に乘出す船人に濡れかゝるのである。濱に遊ぶ男女兒童は怪しからぬ語を口にしながら此波打際へ石を投げつける。

(一三)ジョブエ。　海岸に近い一クボク木。小いメベフイト鳥。

(一四)ベル・イニン。　リブンの中央の肉桂樹、海に在つては東方の瘠せた鰹としてあらはれる。

(一五)ジャイルブン。　リブンの西にある長い岩礁。海では脊に白い鰭のある巨大な鰹となつて現はれる。

(クワジレン)

(一)ロブイロク。　內濱の東側エバデンにあるエッケン木。

(二)ロウクヂル。　右の場所にある長い岩礁。

(三)ウォルウォル。　エレナクとアエシの中間の砂堆。

(四)ジアエラン。　右の場所の內濱から遠からぬ岩礁。

(五)カブア。　エネアルロとエレナクとの中間の礁湖にあるウト叢。

(六)レミジワ。　メジャトの礁湖內、藻に取まかれた板礁。

(七)ロクコルコル。　メジャトの礁湖內の珊瑚。

(八)リジネン。　西側にあるエッケン木。

(九)　ジェメジジョン。　ジャホクの中央の大肉桂樹。此神は捕禽者に近づき、同じ仲間に化けて之を脅すことを好むといはれる。

(一〇)リキレワ。　エンマトの內濱の珊瑚石。手を擧げて招く婦人の形に酷似して居る。

(一一)ラロ。　ルォトの北方の內桂樹で、鰹を「子」として雲丹の刺を槍とする。

(一二)ロエンウイン。　メイク航門の珊瑚の幹で、女兒を嚙まうとする鰹に魔術をかける。

(一三)ロレマク。　ト・エン・ロレマクの航門の近くに住む凶暴な人。

(一四)ロワット。　恐るべき女性。礁湖內ではワットといふ語を口にすることを許されぬ。此女神を見たものは生命がないとせられて居る。

(一五)カリク。　ビケジにある手足を伸ばした人間のやうに見える山。此人は魚肉の中毒によつて死んだのである。

(一六)ジォマネブエン。　クワジレン島の一水洞にある石。

(一七)ケリン。　同地のエゴケンの小屋の水洞にある石。

(一八)リカジェル。　エネブジの外濱の東端にあるエッケン木。其「子」はムエルムエル魚である。

（ナモ）

（一）ロ・タク・アト。　マッタマイジとマイケインとの中間にある岩礁帶で、波浪が劇しく打上げ、其飛沫は宛ら竈の煙のやうに見える。海上では此岩礁の附近を低徊する金色の千鳥として現はれる。

（二）ロエン。　岩礁に於ては一尾の鰻、マジキンの外海（北東方）に於ては一個の海蛇。或る人が此鰻を打擲した所が、マジキン島に化成した。

（三）メトロク・ラジ。　マジキンの一小屋。海上では一群の海豚となつて現はれる。十尾の海豚はどれが一番呼吸が長いかを競うて居るかのやうに水中から出没する。

（四）ロウエオ。　マエの北方の内濱にある石。

（五）リベドワ。　マエの内海側の崖。海上では直立する樹幹として現はれる。ロウエオとリベドワとは好んでキュロといふ肉食魚を釣り、鈎が早く外れるやうに其腮を叩く。

（六）ジョロ。　ロエンのヒビスクス。

（七）イロジ・エムマン。――イロジ（酋長）――或る小島。

（八）アネル。　多くの海豚によつて出産を助けられた或る酋長の妻。

（九）ルウェトンモウル。　マンシェンニネアンの北西にある玄武岩。

（アイリンラブラブ）

（一）レニニンデク。　ウォジャの南内濱にある鹽水林叢。海上では燕（レ）となつて現はれる。其飛翔する狀は肩を怒らして威張つて歩く婦人に似て居る。

（二）レルキエブ。　一鐵木（ケネ）。

（三）ケテルナリク。　一熱帶鳥。以前は一酋長の子であつた。

（四）ボギエンジェクジェケン。　メと名づけられた鐵木。

（五）ジョジョボ。　ウォジャの南方に住む一尾の鯵で、自分の尾を嚙んで居る。其は以前は人間であつたが、食物を携へずに漁に出て、空腹になつたので自分の足を食うたものであると云はれる。

（六）ラキル。　エネウェのBaringtonia木。酋て二人の娘に虱をとらせながら眠てしまうたので、娘どもが惡戲をして頭の毛、睫などを燒いた。

（七）ラリレウェ。　エニビュンの内海の石。一誹謗者。

（八）ラエダン。　クバン魚の「子」とするビカジェレのエッケン木。右の魚が見えたら「酋長の娘が來た」といふ。

（九）リキジリク。　エニビュンの小山。

（一〇）レ・エオ。　陰嚢とよばれる赤い石。ジェブウォンで此石（現今消滅したが）を見かけたら一酋長が死ぬ兆である。其故にコレといふ此石の名を諱み、之と音の近いコレジ（鷸の一種）をすらジョクルと呼びかへる。コレジというたものは睾丸がシェブウォンの珊瑚の株ほど大きくなるといはれる。

（一一）レオン。　鐔（ニヒ）に難産を助けられたラルオヂルの妻。

(一三)ボク・イン・エア。　ロトの岩礁の穴。其處には木材が浮んで居るが何人も之に手をつけてはならぬ。

(一三)ジェバト・レ・ヅリン。　ジェバトの北東方に高翔するフレガット鳥。

(ジャルート)

(一)イグネ。　ジャベノレンに近い所に棲む熱帶鳥。

(二)ラツゴゴ。　マドレンに近寄るムエルムエル魚を炙るヲサ鳥。

(三)ジョクダク。　ボゲナゲの一林叢。

(四)レノエ。　ピンレブの北方の諸島の蒼鷺。

(五)ラタガジュレク。　エジシェの海濱に於て一木幹に止まり丸木舟を作るヲサ鳥。

(六)キレ。　イムロジと之に連る岩礁との間の通路。

(七)キネジョンの島。　愛する女の長い籠と見られる。

(八)ラン・ビジ・イン・エルワン。　ボットの鼻。二潮流が交叉するので極めて危險な場所である。白人の來住後既に三隻の舟が此處で坐礁した。

(九)レルリクラン。　ジャボルの濱の平な滑な石。ジャルートに來る娘が石と石とを磨りあはせたから滑になつたといはれる。

(一〇)ラメンニブイロク。　オウォの林叢。

(一一)コウジ・エオ。　ムインブイリン附近の一米の高さに突起する珊瑚岩。

(ナムリラ)

(一)ラリュブロク。　エウウィルメロといふ魚。陸上では南の外濱の一石。

(二)リボクジャ。　風上側の一石。海上では海豚と現はれ、其水に潜る狀はタロ芋を掘る男のやうに見える。

(三)ベシャオ・エン。　頸飾の貝。或る人が貝珠を作り、鷗が之を緒に貫く。

(四)ジェラウウェ。　大キリル島。陸上では外濱の一石。

(五)リオ・イロ・バト・イン・マルマル。　木から飛び下りた一人の娘。

(エボン)

(一)リブジェン。　北方二十五浬の所に棲む尾の尖の切れたエウウィルメロ魚。

(二)ジュデクワ。　リブジェンの近くのカロ島。

(三)ラン・ボブ・エオ。　北西ランロブの岬角。

(四)リリ。　島の名、其處では男同志がよからぬことをする。

(五)レムエ。　半身のまぐろ。魚に食はれた人。

(六)ロク・イ・レク。　エニロの外濱のアル魚。

(七)ラカジャジ。　ルベの南西の一石。

(八)ラキリルエ。　石になつた人。生前酋長の魚から魚を盗み取り、槍で突いて林叢中に投げ棄てたものである。

(九)レルレト。　エポンの島にある一石。

(一〇)ジギト・イム・ルギト。　エポンの内濱にある二つの石。

(一一)ロラン・ムエムエ・カン。　礁湖側のパンの木を密植した地點。

(一二)バリジェン。　エポンの東の内濱の一石。

(一三)レボクジェブ。　エネアエドクの外海側のウト林叢。海上に於ては環礁の東方に浮泛する椰子の葉片の半片。

(一四)リキジェアン。　環礁の北方の鰒(フグ)。

エルトランドは一々は説明を與へて居らぬが、上記の神々が色々の生物、無生物に姿を現ずるにも拘はらず、其本體が多くは人間であることはラ行を以て始まるものが大部分を占めることによつても明白である。マーシャル語のリは女、レは男又は人といふ意で、他の語に接頭して母韻が變化しラ行の各語音となるのである。

他の諸島については右の如き詳細な報告はない——クバリーの「パラウの宗教」といふ論文はまだ見ないから分らぬが——パスチアン以下の諸書に若干の斷片的記事があるけれども、前目に掲げた以外のものについては神の性質も明白でなく、其發音にも信を置き難いので、誤解をさける爲に強ひて之を羅列することを見あはせ、クリスチャンが其著「カロリン群島」の附錄として掲げたもののみを左に掲載する。

ポナペの神

(ポナペ)

キマイ。　マツブ地方出身の賢い婦人で、マタラニムに於て始めて飾のついた貝の腕輪を作つた人。

シャウ・テ・レウル。　昔のマタラニム王朝若くは君王の名。其頃ポナペ島は一王の下に統轄せられ、ナン・タウチの高壁、ナン・マルチャイの防波堤、パン・カタラの聖地其他を含むトムン附近の大建築がオロ・シパ及オロ・ソパといふ二工人——双生の神——によつて設けられた。此王朝の最後の王はイショ・カラカルといふものの引率の下に、南方から襲來した蠻人の群によつてチャパラブ河口で殺され、キタルといふ青い魚に化生した。此魚は今日でも食用を禁ぜられて居る。

シェニア及モニア。　昔の冒險家で、北方の海を探檢したが、夜中に火の燃え上がるのを見て驚いて引かへした。

クツム。　環礁及其内方にある諸物竝に礁湖にある小嶼の神で、其神象(クリスチャンはトーテムと記したが、其意味は必しも神にトーテムがあるといふことではないやうに思はれるから、神象と意譯することにした)は黒と黄色とのChaetodon 魚——土語リ・エル・ファテル——である。

ラキム。　家屋建築及木匠の神。ドクトル・ギューリックは惡事、病氣、死亡、饑餓の神であるといふたが、ラキムはルク語で虹を意味し、ソンソル語のクラギム、クサイ語のネラケム又はンラケムも同意である。恐らくは希臘神話のIris(虹)神に相當するものであらう。

シォウ・マチ・エン・シェウ。　甘藷の神。

リ・カント・エン・カプ。　鐸(古語パエ又はパイ)。イショ・カラカルの配下の後裔と稱せられるチプ・エン・ウアイ族のトーテム。

シャンゴロ。　饑饉の神――ジョカーシに於て崇拜せられる。

ルムポイ・エン・シャパル。　ロンキチ河口シャプ・エン・タカイ城を築いた昔の英雄。

ナン・シャプエ。　カヴァ酒(土語ショコ)及豐樂の神。マルラプと呼ばれる土産の栗は此神に捧げる神聖なものである。

レ・ペーペ・エン・ワル。　島の處女林叢の神。

ナン・キエイル・イリル・マウ。　キエイルの神。赤斑を有する黒色の大蜥蜴で、獰猛なるものなるが故に、土人によつてリ・カミシク卽ち畏敬すべきものと見られて居る。

ショカライ。　キチン・アラマシ卽ち小人――島の內地に住む矮小な妖怪――恐らくはマレー移住者(?)によつて段々に亡されたネグリト山民のことが訛傳せられたのであらう。

コナ。　昔日居住した巨人。――キチのアンネペインに近いキパル(パンの木)の長い冢は其一人の墓であるといはれて居る。

シェルリ・ショウ・ラン。　天降つた小い天女。其一人がコト(クサイ島)からカヴァ(ショコ)の木を盜み出したが、天上から其一莖をポナペに落した。其以來此地に此植物が生育するやうになつた。

シャウ・ヤプ。　クタル(翡翠)の後を追うて西方ヤップから來た昔の航海者――或る傳說によれば彼は魔の杖(イラル)を以てカヴァを掘り出しポナペ人に授けて此地に土着した。

リ・オウメレ。　長い鐵の齒の生ひた妖精で、或る歲月の間ポナペに土着した。其は極めて醜い滑稽な妻のもので齒をむき出して見せたといはれる。或人が之に忍び寄り石を以て其鐵の牙をかき取つたが、此大切な寶の爭奪の爲に其氏族內に騷動が起つた。

イナ・マラム。　月の女神。

タウ・コト。　カヴァ酒宴の際祀られるキチの神の一柱。

シェイ・アキ。　昔日モルトロック島からマンシャイ、シリ・ン・ロク、マン・イン・ノク、シンシシ、パイレル、ロキ及マシャンの七名の配下を率ゐてパリカル海岸に上陸した航海者。

ナン・イム・ラプ。　「大屋の王」の意。踴の神。

ナン・ウル・ラプ。　性交及祝宴の神。生產、死亡、疾病及吉凶を掌る此神の贄は龜、カマイク、マルレル及テプ魚で、酋長以外のものが食用することを禁忌(タブ)とした。

リカント・イナショ。――イナショ姬――ジョカーシの國つ神。

イショ・カラカル。――奇日彥(クシヒコ)の意――屢〻述べた征服者で、マタラニムの軍神として祭られる。

イショ・シャウ及イショ・ルムポイ。　マタラニムの氏族の神

ルカ・ラパラプ又はルク。――(ラパラプは大の意、ルカ、ルクは既記の中央カロリンのクル神であら

う）――荒神。或は國土の隆起を命じ、草木の名を與へたのち海面を渡つて立去つた神であるといはれる。

リ・シェル。　炬火夫人
リ・シャル。　刀刃夫人　（ポナペの地獄プエリコの守護神。

オロ・パト。　半人半神。ナチック島民の氏神。

オロ・シパ、オロ・ソパ。　ナンマタールの水城を築造したといはれる半人半神。

ナン・シェラン。　船匠の神。同じ名の大蜥蜴に姿を現ずる。

カネキ。　椰子の神。

イナショ、リ・カンテン・アラム、リ・アラ・カタウ、リカンテ・ライライ、リ・モタラン。　いづれも杜の女神、就中リ・アラ・カタウの神象は土産の巣であるといはれて居る。

ナン・イラキニア。　南東岸ナンタマルイ地方の神。

マリレ。　眩暈の神。

リ・アロンオロン・ペイ。――聖地を好む女人の意――ナチック島の海の女神。

タウ・カタウ。　雨の神、パンの木の神。

リ・アウ・エン・ポンタウ。――水路の女人の意――南西岸パリカル川の神。

イラコ。　キチのロシャ家の氏神。カヴァ宴飲の際特に祭られる。

ナンシャウ・エン・シェト。　沼の王。蒼鷺の身に宿る。

キリ・ウナン。　病と死とを齎らす毛深い杜の神。

ヤップの神（ヤップ）

ヤラファズ。　創造神。善神ではあるが無精な神とせられて居る。ムイ・パプ島ニ（信天翁又はフレガト鳥）に姿を現ずる。

ネメガイ（又はネメグイ）。　ヤラファズの妻。

ルク。　病と死とを掌る神。よく活動する荒神で、オルラといふ鵜鳥に姿を現はす。

ルク・エ・リン。　舟人及渡海の神。

ルク・パラル。　農業の神。

カネパイ。　ツルといふ蹈の神。

イラゴズ。　民の康福を齎す神――ポナペにもイラコといふ神のあることは上記の通りである。

マラボウ。　太陽神。

ウルル。　太陰神。

ムコルコル。　盜人の神。長い間には其信仰者から離れることを例とする。ルク神も亦手長人の守本尊である。

マム。　出産の神。

ウアガ・ダマン。　軍神。
ドトラ。　船匠、番匠の神。
マガラゴイ。　暴風雨の神。
マダイ及ワレレン。　漁及舟人の神。
ポフ。　縁結びの神。
ココ・ガラル。　椰子（土語ニウ）の神。
ルゲラン。　雨の神――ラムトレクではルクエルラン（ルケラン）は工匠の神である。
テレテズ。　アチフ即ち椰子酒の神。
ムイ・バプ。――鳥の名――軍神。
イル・モカン。　踴の神。
ウォル・トラバプ。　外來人の神。
デススラ（又はデルラ）。　火及地震の神。
ゴラ・ダイ・レン。　悪人を死後に懲らす神。其住所の傍には地下を流れる河がある。火に苦められた悪人の魂魄が此川に飛び込むと之を深い孔、即ち火の地獄（ル・ニ・ガ）に運び、其處で永久に焼きつくす。
カラネマン。　鯨と鯊との神。

リギチ。　龜の神。
ギリゲイ。　半神半人。ギ即ち貝斧の發明者。
ルサレル。　昔日の英雄で、ヤップ人に石と木で臼をつくることを教へた人。
ボタ・スヌミ。　創造神ヤラファズの尊稱。
ヤンガラウ。　ゴチェバ地方の國つ神（又は氏神）。
グゼライ。　ルル地方の國つ神（又は氏神）。
アズ。　ニミグイル及ゴロル地方の國つ神（又は氏神）。
ガタミル。　マップ及ラマン島の國つ神（又は氏神）。
マガラゴイ。　トミルの國つ神（又は氏神）。

ラモトレクの神（ラモトレク）

アリウ・ラプ。　創造神又は最高神。
ルク・エ・ラン及オロファト。　アリウ・ラプ神の子。工匠、船匠の仕事を主宰する。
セミリ・ゴロル。　アリウ・ラプの妻。
セラン。　セミリ・ゴロルの兄弟。
サウラル。　惡王子。
アリス・イ・テト（又はトウトプ）。　魚の神。サタワル島ではアリウ・リト又はポノロルと呼ばれる。

上記によつて見るが如く、神々の權化と稱せられる地物、木石、魚鳥等は其實は次目に述べる靈代及社（タマシロ　ヤシロ）に相當するもので、神及靈魂は人間と同樣な形態を有するものと信ぜられて居るのである。其故に或種の神若くは靈魂は人間として出現することがある。エルトランドによれば、マーシャル島に於てアニジンマル——アニジ・イン・マル（杜の精）の約——又はノニエブと呼ばれるものは善神で、草叢又は林の中に住み、猥に人間と話をせぬが、往々極めて近い所で其語音又は笑聲を聞くことがあり、又屢〻生人を妻として之に種々珍奇なものを與へ、時としては子を生ませることがあるといはれる（E三一四頁）。同師は次の如き二例をあげた。

杜の精

一、ウジュエ島のエベジュといふ處に孤獨で寂しく暮して居た一婦人の許に或朝杜の神があらはれたが、直に姿をかくし、後刻再び現はれて、日が暮れてから小舍の中にはいつて來た。彼は味のよい魚を捕へて女に與へ、自分の身體から出る香氣をふりかけた。此神の名はレケンナト——海中の叢林の君——とよばれ、此女によつて一子を擧げ、ラジャベンケ——イゲク魚の君——と名づけた。同棲が多年續いたが、之を羨ましがつた他の婦人に祕密を打あけたので其以來見えなくなつた。

二、ジャルート島の一婦人についても之と同樣な話がある。老年のラロンが證言する所によれば彼は此女から何人も編み得ぬ美しい蓆と、島の何處にも獲られぬ甘い食物を與へられたといふことである。此婦人も亦祕密を漏したので一年の後別れねばならなくなつた。

土の精

サイパンのタウタウ・ハルム・タノ——タウタウ（人）、ハルム（內）、タノ（土）——といふ精鬼は鐘乳洞、岩窟、榕樹などを住家とし、夜間に里に出て人間を脅かすといつて恐れられて居るが、必しも害毒を及ぼすとは定まつて居らず、アニジンマルと同樣に往々生人と契ることがある。獨逸の統治時代にロタ島の邏卒を勤めて居たイナショ・マグロニャといふ男の閱歷として次の如き譚が傳へられて居る。

イナショは若い時外國船の下級船員としてつらい務に服しつゝ長い長い航海を終へて島に歸つて來たが、遠國の見聞を島人に話し、航海中乏しい給料の中から買ひ求めた珍奇な品を見せて島人達を驚かし、不思議がらせた。島中の最新知識として彼は人々から尊敬を受け、島少女の戀の的であつた。若人の胸には幸福が滿ちた。うらゝかな或日の朝彼は當もなく家を出て人里離れた森の中を逍遙して居るうちに何物かに引寄せられるやうに殆ど無意識に奥へ奥へと踏込んだが、突然或る物に眼を遮られて立止らなければならなかつた。前方三四十米とは離れぬ大榕樹の根元に若い女が立つて居る。其は彼の海員生活中港々で見たどの女性よりも美しいものであつた。其娘がにこやかに差招くが儘に吸ひ寄せられた彼は一切の世の中のことを忘れてしまうた。

約三ケ月の後彼は呆然として村に歸つて來た。森の娘と契つたことを話しても當初は誰も信じなかつたが、或日若い女達がからかひ半分に證據を示せと強要した所が、忽ち相恰が變つて不思議が彼の面にあらはれたので女達は面色を失うた。森の娘は彼に教會に出入することと他の女と戀することを戒め、其禁を犯したら命がないぞというた。此娘がタウタウ・ハルム・タノであつたことは言ふまでもない。其後同人は妻を娶り數人の子をあげた。此話が記錄せられた當時——一九〇五年頃獨人ゲオルグ・フ

リッツの手になつたものと思ふが、私はまだ原文を見ない——同人は尚健在で、五十位の年輩であつた。

ヤップのカン

ヤップ島ではカンといふものを祭る。カンが如何なる神であるかといふことは外人には嚴秘にせられる——恐らくは島民自身にも判明せぬのであらう——が、ギザス（祖靈）とは區別せられ、タリウ・カン（土地のカン）などと呼ばれるものがある所を見ると、「精」を意味するのであらう。カンには色々の種類があつて、其怒に觸れると天變、地異、疾病等を招くといつて土人に恐怖畏敬せられる。「南洋風土」によると、カンは昔日此國土に居住したものであるが、人間の增加に伴ひ上天したので、今でも隨所に出現し——此點はパラウのカリズに類する——其形は人間と同じく、男女の性を備へ、女性のカンは女のする腰蓑を纏ふ。遠方から之を望見し得ることがあるが、凝視すれば消失するといふことである（九八頁）。

三　社（ヤシロ）及靈代（タマシロ）

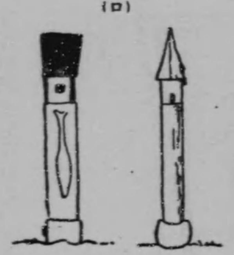
我國のミヤ（宮）又はホコラ（祠堂）に相當する神の宮居のあるのは叢島中パラウのみである。何故に同島にのみ之が存するかといふ穿鑿は後廻しにして、私は先づクバリーの報告に基いてパラウの宮の樣式を說明することにする。

パラウ語では宮はブリル・ア・カリズ卽ち「神の家」といひ、祭主が之に居住して參詣者の供物を受け、祈禱を行ふ大屋と、神の籠（テト・ア・カリズ）と稱へられるウルギオウク（供物の容器）卽ちホコラとがある

ホコラ（祠）

——邦語ホコラも亦神倉（ホクラ）卽ち供物を收藏する所といふ意である。——ホコラの最簡單なものはカヂアギル又はタハラギルといひ、一木から刻んだ高さ約一五—二〇サンチ、太さ長徑一五サンチ、短徑一〇サンチの家屋の形をしたもので（第七圖イ）、屋根、窓及柱に當る部分を黑色に塗る。此は靈場に懸吊せられるものである。之に脚のついたものをグムレウといひ、漁場の神のホコラとして海岸に打込まれる。其は徑約二〇サンチ、長さ約一米の木材の上端にホコラの形を刻み、脚部は四角に削つて赤色に塗り、兩面に各一尾の魚を描いたものである（第七圖ロ）。其よりも一層完全したものはゲオス（又はノオス）と呼ばれ、第八圖に示すやうに數材をあつめて作り、之に屋根を葺き彫刻を施してある（各部の說明は後篇第二章家屋建築の條下に讓る）。彫刻の模樣は太陽と二羽の鷲（神鳥）を示すもので、ゲオスといふのは本來此模樣の名である。此ホコラは病氣平癒祈禱等の爲に建立せられる——セムペルがエイメリークの酋長アイッロの家及ペレリウ島のトムエの家で見たといふ赤色の神の社（ゴッドスハウス）といふのも之であつたらう——第九圖も亦制式は稍〻異つて居るが同種に屬するもので、スムクと呼ばれる。石疊を設け且四隅に扁平な石が斜立して居るのは注意を要することで、前章中第五圖に揭げたソンソルの墳墓竝に後記のヤップの墓所及フェバイ（共同屋）の石壇と同じ意味を有するもののやうに思

第七圖



はれる。此ホコラは普通氏神以外の神、例へば星の神（コダル・メレク）の如きものを祀るに用ひられる。

氏神の祠堂（テット）はゲオスの大型なるもので、通例各部落に二社づつ建立せられる。其は住民が二氏族（ビタン・タオク）に分たれることを例とするからである。有力な神の爲には其鎭座の地にテルギュミヤ（宮）と稱する宮が建立せられる。其は神殿と神主の住宅とを兼ねたもので、バイ（共同屋）と普通の住家とを折衷したやうな外見を備へ（後篇第二章參照）、屋内の一隅又は中央を板又は席を以て區劃して神座とし神がかりをした神主は其中から託宣するのである。昔は大規模な社があつて其設計も亦普通のバイとは全然相違して居たが、今では殆ど見られなくなつた。第一〇圖に示すものはソプと呼ばれ、クバリー時代に全島に殘存した二社中の一である。セムペルはペレリウ島のナシアス部落に存したものについて次のやうな興味のある記事を殘した（S二八三―二八四頁）。

第八圖

赤、白、黃、黑に彩色した家の中にはカリズ（神主）と呼ばれる好人物らしい老人が坐つて居た。此家の建築樣式は一種特別で、二長側を有する八角形をなし、之に相當する八角の屋根は一個の棟に連つて居る。屋内の樣子も亦特異で、普通の住宅には區劃の設はないのであるが、此家の内部には四本の太い柱があつて屋根を支へ、之に四方に窓のある仕切板が繞らしてある。卽ち屋内に更に一屋を設けたやうなもので、其中に神主の口を借りて啓示を與へる神（カリズ）が座（マシマ）すのである。同じくカリズと呼ばれる神主の語る所によれば、此地にカリズのみが住んで居たころには家屋は皆此やうな建方であつたが、其が天上に退去した後今日のやうな住宅となつた。帽子をつけて眞直に歩くことの出來る人――其は神（カリズ）の特權である――が少くなるに從うて古式の家屋を建てることを許されるものが稀になつた。唯神ながらの道を維持する爲に天から降つたカリズが宿る人間（神主）に對してのみ此八角の家を建立する特權が與へられるといふ事である。

第九圖

ヌクオルのマラエ（社）

パラウの外に神事に供する家屋を特設するものはヌクオル島民のみで、其祖先が此地に渡來したとき携へた石像（後記參照）を總社（アマラウ）に安置し、其他各氏族の氏神の像を祀る若干のマラエ（社）がある。彼等の鄕土に於けるマラエは多くは石壇其他の石造建築物である（拙著「太平洋民族誌」參照）。ヌクオ

ルの民が家屋を以て之に代へたのは此島に石材がない爲であつたかも知れぬ。

右によつて明なるが如く、パラウ及ヌクオルには社（ヤシロ）又は祠（ホコラ）と稱すべきものがあるけれども、其は神の住宅といふ意味で設けられたのではない。ミクロネシアに於ては我國と同樣に神又は靈魂の住む世界は此國土の外にあると信ぜられて居るので、其常に降臨する場所卽ちユニハ（祭庭）に標識を設くる必要があるにしても、人間と同樣に邸宅が入用であらうとは考へられなかつた。ヤップのトミルではカン（精）の居所と稱へ注連繩やうのものを張り竹垣をめぐらした所がある（「南洋風土」一二八頁）といふことである。標識としては岩石樹木のやうな永久性のものが腐朽の虞のある木造屋乃至竹垣よりも適當することは勿論である。されバヤシロ（屋代）、ホコラ（神倉）といふ語は當らぬけれども、標識たる意味に於ては自然石、喬木、石造建築物等も亦一種の神社である。前目神名中にも其と思はれるものが少くはないが、尙左に顯著な例を列擧する。

（ギルバート）　タピテウエア神は年の始に於てママニの木の下で祭る（バスチアン）。

（マーシャル）　メジュロ島のチェメリウットといふ神の社は鐵木、ビカール島のラエオン・ビカール神の社はカアガルといふ木である。又クワゼリン島では雲母を神體（？）とするルルマクといふ神がある（支廳報告）。

アイリンラプラプ島のエニュエビンといふ所には神聖の石と目せられるものがある（獨逸人類學協會紀要新第二卷一四頁）。

圖一第

（クサイ）　タオンサク村字ウェアにジンリリヤカといふ岩が豐作の神として祀られて居る（駐在員報告）。

（ポナペ）　ランガル島のレペンランガル及ナット村のペーレといふ石は神として祭られる（支廳報告）。神と人間とがポナペの島をつくる爲に會合した岩屋の遺跡に神の頭と稱せられる石があつて土人は之に供物を捧げる。外にも島内二ケ所に神聖な直立した岩がある（バスチアン）。

チャパラプ川（マタラニム）のケダン附近には、足跡と日本刀のやうな形を刻した巨岩がある（クリスチャン）――神であるとは報告せられて居らぬが、神聖視せられたものであらう。

（ナチック）　階段を有する神聖な石造高壇がある（バスチアン）――第四章墓地の條下參照。

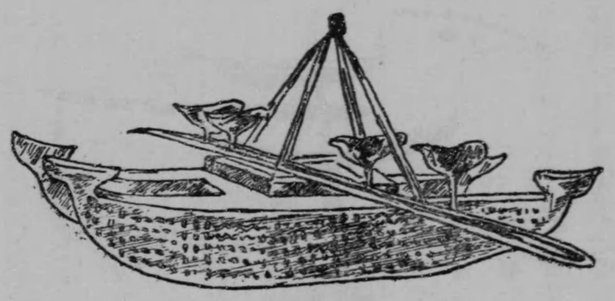
（ヤップ）　左の諸地にタリウと稱する神聖樹がある。之に觸れると神罰を受け、之を拜めば病氣に罹らぬといはれて居る（支廳報告）。

トミル管區メルル村字プルイ
ウルル管區オロオ村字トロウ
オカオ管區ドゴル村字オゲック
オカオ管區アロク村字テニヤ
ウギリ管區マキ村字ウリウ
ウギリ管區ウムン村字デップゴウ
ウルル管區タラゴウ村字モリルック

（パラウ）各村に陰陽石（?）の二個がある。村の名は之から出たといはれる。例へばコロール村は神石ショコールから、マキヨルク村はオルキヨク石から其名を負うたのである（支廳報告）。クバリーによれば各村の入口にカルズクルといふ方形の石壇があつて、其一隅にブサウクと呼ばれる石が建ててある。其中央にはタマナ（土名）の大木が生ひ、全地壇を蔽ふ。こゝはウブスナ神の在所で、酋長頭目等の會合する所である（K一三〇頁）。

（サイパン）老榕樹、洞穴等はタウタウ・ハルム・タノ（地中の人）の棲家といはれる（支廳報告）。右の如き自然物がユニハ（祭庭）の標識ばかりではなく、神の像代又は靈代ではなかつたかといふ疑もないではないが、其區別は至難のことであり、島民自身も判然とは辨へて居るまい。さりながら靈代としては既記の如く禽鳥魚蟲のやうな生物を充當した場合が多いことだけは確である。特異なものとしては舟を靈代としたものがある。パラウのアウゲル（靈神）は皆靈代の舟を有し、酋長、貴族のバイ（共同屋）の梁の上に之を收藏してある。――刳舟をムライ（又はア・ムライ）といふのはブライ（家）の轉訛で、神の家といふ意であらうと思はれる。――ボナペ其他に於ても或る舟が特別の尊崇をうけ神聖視せられて居るのも之に由るものであらう。ルク島にはネリン・アヌ（アヌは靈魂）と稱へられる俣舟――二舟身を連ねた舟（後篇舟楫の章下參照）――の模型がある。クバリーによれば之は神の國の標識又は徽章で、靈神が之に宿るものとせられ、通例公屋の梁から懸垂して之に幣（布片、腕輪等）を捧げる。第一一圖はクバリーがエテンといふ地で入手し、ゴーデフロイ博物館に寄贈したもので、舟の上に架した棒はフレガット鳥

第十一圖



の羽毛に像つたものであると思ふ――其上に棲まつて居るのはオバシギ（Tachypete）で、方形の臺は幣を置く所であるといふことである。

ジャルート島在住の一獨逸商人がルク群のフェタン島で入手したものは第一二圖のやうに鳥に象つたもので、翼に當る木桿の外は總て一木材より成り、全體を白く塗り、腹、脚及尾の部分にのみ赤線の網目が施してある。之は風の神として至大の崇敬をあつめたものであるが、或年西信風の時を逸せざらんことを祈つたが効驗がなかつたので、大に信用を落とし賣却の憂目に逢うたのである（フィンシ三三〇頁）。其背部がウッボ舟のやうに刳り抜いてあり、頭部に三尾の魚が描いてある所を見ると鳥の形をした舟で、翼と見えるのは櫂に象つたものであらう。

舟に神が宿るといふ信仰は了解に難からぬことで我國に於ても

ロネシア神話中にあらはれる。クレューマーによれば、パラウ島のケクラウ族の祖神アウゲル・ケクラウに妻を奪はれた或る男は木を以て舟を作り、空飛ぶ鳥が落として呉れた羽を取りつけて其刳り窪めた脊に

フネ（舟）はフネ（柩）に通ずるのみならず（拙著「日本古俗誌」參照）、伊勢の神宮には御船代といふ神器がある。天の鳥船も亦ミ

乘り、四方をさがし求めて其所在を發見したので、アウゲル・ケクラウの不在に乘じて之を連れ出し、相伴うて郷里にかくれたといひ、マーシャル群島のロンリク及ロンラプ島に於ても鳥船に乘つて飛行した二人の人が最後に海に落ちて此二島と化したと傳へられ、ポナペにも鳥船傳說があるといふことである（獨逸人類學協會紀要新第一二卷一號九九頁）。

御靈代（ミタマシロ）

ルク島には右の鳥船の外にも靈代に用ひられた物品がある。クバリーによればフェタン島のサプルといふ所では第一三圖の如く、槍の穗の形をした枝についた二個のパンの實の彫刻がネリン・アヌに充當せられて居たといふことである（K五一頁）。

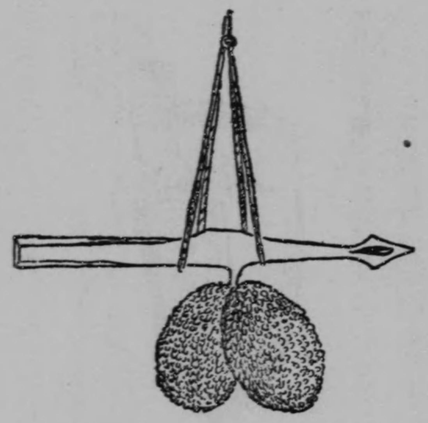
クバリーがゴーデフロイ博物館に送致したモルトロック島出のフレガット鳥の彫刻二個（MG目錄三〇一及三〇二頁）も脊が卵形に刳つてあるのみならず、懸吊用の紐が取附けた形跡があるから、縱ひ鳥舟でないにしても、神事の用に供せられたものと思はれる。同じ目錄（三〇一頁）に揭げた第一四圖の如き木製の面はモルトロックではトパヌといひ、ルクではリヴァッと稱へられるもので、首斬役が顏を見知られぬやうに顏を蔽ふに用ひたのであらうとクバリーは說明したが、其信ずるに足らざることは既にフィンシも指摘した通りで（F三二三頁）、祭又は祭の行事たる踴に於て神に假裝するものが用ひたのであらうと思はれる。他の島嶼に此種の面が發見せられ

第十二圖

ぬのは工藝の天分が乏しいことに歸因せねばならぬ。

ポリネアシア藝術を傳へたヌクオル島には多數の偶像があつた。クバリーの採集及報告にもとづいてゴーデフロイ博物館目錄には次の如く述べられて居る。

第十三圖



テ・アリキ・ツテナトアケの石像（玄武岩質の不規則な形の石に彫つた半身像）は本島征服者コ・ヴァヴェが郷國から將來したもので、總社アマラウに安置してあつたのを或る白人が來て破毀したものである。アマラウには右の外テヒタブといふツプア（神）の木像及上記アリキツ・テナトアケの配で、セ・カウェ氏の氏神なるコ・カヴェの木像其他ソペの六神像がある。神像は皆布に包まれ、其が破れるとハイ・セ・マロアイツといふ着換式が行はれる。

アマラウ及マラエに祀られるのはヌクオル人の共通の神で、タコチナ季節（毎年數ケ月續く）の祭は此等の神の爲に行はれるのである。

神像（テ・チンアイツ）は多くは木（パンの木）製で、勿論腐蝕するから時々取かへねばならぬ。舊

神像はワイソニ（ワイは水、ソニは臭、卽ち「水くさい」といふ意）と呼ばれ、社内に保存せられる。神像製作に任ずるものはラパク・ハウと稱へられる。

ゴーデフロイ博物館に收藏せられるヌクオルの木像は高さ三五―四八サンチのもの、等身大若くは其に近いものがあるが、僅に顏面及手足を辨ずる極めて粗末な彫刻で、陰部が朧氣に表現せられて居る。クバリーは既記の論文「パラウの宗教」中に靈代として崇拜せられる石を掲げ――供物を載せる臺と同樣に其名稱をキンエレルとよぶといふことである――其外に木像及石像があると記し、又「パラウの社會組織」と題する論文（「カロリン群島土俗智識補遺」第一卷所載）中には「エルライに於ては平日洞穴內に收藏する極めて古い男女神の木像をムルベケル（祭）の際取出し、高い椰子の木の上に宮を設けて之を安置し、他の一神と其母神の像をも添へ、每夕之を取おろし、祭の終に再び洞穴に納める」と報告したといふことであるが（フィンシに據る）、如何なる形のものであつたか判明せぬ。第一五圖に掲げるパラウ島の男女二神像はライン・ウェストファリアのカプチナ教會ミクロネシア教區年報（一九〇九年度）に載せられた寫眞から取つたものである。原圖は兩婦人が各一軀を頭上に戴いて居る所を寫したものであるが、不鮮明で複寫することの出來ぬから臨摹擴大したものである。右年報には之に關して何等の說明をも與へて居らぬが、右

第十四圖

第十五圖

方が女神、左方が男神であることは言ふまでもなく、兩者共に高冠を戴いて居ることは既記のセムペルの敍述に一致するものである（一三三頁參照）。像代を有する結果として之を安置又は收藏する場所をも必要としたので、パラウ、ヌクオル兩島に限つて社が設置せられて居るのは之が爲であるといはねばならぬ。

一家又は一個人が私祭する像代又は靈代の有無は不明であるが、ゴーデフロイ博物館に偶像として收納せられた一、二のものは寧ろ護符又はマジ（シロ）代に屬するもので、社又は靈代と同一視すべきではない。之については後節に詳述する。

四祭祀

公祭と私祭

玆にいふ祭は神に奉仕する方式の意で、公の祭祀と私の祭祀とに區別せられる。前者は或る集團に共通な神を集團の民衆が共同に祭るものをいひ、一人又は若干の司祭者が代表として祭る場合も亦之に含まれ

る。之に反して後者は或る意味に於て、他人と共同を避け――例へば特別の神を祭り、或は特別の祭場を設け、或は特別の祭式を用ひるが如き――單獨に祭祀し、或は私的生活について神に祈請するもの――例へば分娩、結婚、葬送の如き――ものをいふのである。公の祭祀は時代思想の變遷に伴うて趣が變はり、ことに外來宗教――基督教――の普及の結果、存續の根據を失ひ、若干の行事を除いては全く廢れ、若くは廢れんとして居るが、私の祭祀は容易に絶滅するに至らず、迷信といふ譏を受けながら今尚潛勢力を維持して居る。チャモロ人の如きは其顯著な一例で、二百有餘年から一人も剩さず基督教の洗禮を受けて居るにも抱はらず、尚私的生活には舊信仰の俤を殘して居るのである。其故に原始信仰を仔細に觀察せんとするには私の祭祀を精密に調査して資料を之に求むべきであるが、此は其々の場合について相違のあり得べきもので、少數の例のみを擧げることは却つて大體の觀測を誤る處があるから、玆には專ら公の祭祀の今尚殘存して居るもののみを記述する（私の祭祀も概ね之に準じて行はれるものと推測せられる）。チャモロ人の習俗に關する資料の乏しいのは上記の如く基督教普及の影響によるものである。

祭のモーチーヴ

祭のモーチーヴは我國に於けると同樣に祖神の指導を仰ぎ謝恩の意を表する爲と、荒神（アルプルカミ）に賄して其祟りを鎭める爲との二樣であつた。――其は次々に說く所によつて證明せられる――前者の爲には本初神と人との會合が一定の場所に於て月明の夜に行はれ、各人皆神に接觸し得たと信ぜられたらしいが、後には特定の人卽ち司祭者のみが之に近いて、神と人間との仲介に任じ、一般民衆は祭りの行事にのみ携はるやうになり、舞踊の如きは其が本來神樂であつたことすら忘れられた。

定期祭

公の祭祀が集團に大事故の起つた度毎に行はれたことは勿論であるが、酋長の交迭、出陣、凱旋、共同家屋又は船舟の起工、竣工、植付及收穫のやうな一定の機會に行はれる祭典も亦少くはなかつたやうである。ことに收穫祭は每年略〻一定の時機に於て行はれ、今でも其遺風が中央カロリン、就中ルク島のパリク祭に殘つて居る。此祭は神（アヌ）の告によつてパンの實の熟する季節に酋長が日を定め、民衆擧つて大規模に取り行ふもので、今では踴の會であるかのやうに考へられて居るが、新果祭の名殘であることは言ふまでもない。クサイ島に於てもパンの實の收穫又は大漁のあつた場合には民衆は南岸のウッワから島中の最高峯たる海拔六二九米のホンコル山に登り、ヒンコロと呼ばれる山頂のユニハ（祭庭）で、北方ウェア村（シンリヤカ）に向ひて祭を行ひ、東岸レレに下向するといふことである――此地はクサイ島唯一の靈場で私的祭祀も此處で行はれる（駐在員報告）。

收穫祭

サイパンの新年祭

新年祭についてはサイパン島在住のカロリン人の式典が詳細に報告せられた（支廳吏員町田清彥君調査）。同島では大正三年末暴風雨被害後食物が不足したので、ルク島出身のタロベイといふ男が民衆を說いて之を擧行し、同人退島の際之を繼承したベニグノ・ラニジョといふものによつて三年前一回、本年（一九二六年）一月中に一回行はれたといふことで、サイパン島では起原が極めて新しいものではあるけれども、中央カロリン島民の古習であらうと思はれる。

祭場はチランキージャといふ地點で、十四五本のパンの木の繁茂した下に東西約一五米、南北約一二米（約四五坪）を木柵を以て圍ひ――高さ約一米餘の丸太を竝列し、割竹を橫棧とする。此木柵は當初は設

けてなかつたのであるが、家畜に荒されるので最近設備したのである——北側の一端に出入口を設け、場内中央に約一坪の圏内に低く土を盛り、芳香のある草葉を敷き詰めて供物壇とし、北側の二個に竈が築かれてある。祭の日は信心者が家族を擧げて（乳兒及其母竝に月經時の婦人を除く）早朝から參集する。彼等は前日から潔齋し、房事を愼み、新製又は洗濯した被服具をつけ、各自椰子の實（外殼を剝いたもの）タロ芋を持ち寄り、司祭者は之を受取つて一個づつ供物壇に環狀にならべ、日常語を以て低聲に豐作を祈る。右終つて男子は漁に出かけ、婦人は留まつて芋、野菜の類を調理し、男子が漁獲を携へて歸るのを待ち、之を竈で燒き、司祭者先づ魚一尾と他の食物若干とを大きな葉に盛つて神に供へ、終つて一同會食して解散する。祭神はルク神である。

ルクの新年祭

ルク島に於ても部落毎にシメ繩を張つた出入禁斷の祭場を設け、神に供物を捧げて豐作を祈ると報告せられて居る。此祭祀を司るソウ・メイ——ソウ（方士）、メイ（パンの實）——といふ巫覡は一地方に群居し、他部落の招聘に應じて一家を引連て其地に赴き之を擧行する。祭は往々數日に亙り、其間彼等は嚴に性交を禁じて物忌を保ち、椰子の若葉で作つたシメ繩のやうなものを身に纏うて呪文を唱へながら舞跳するといふことである（支廳報告）。

マーシャルの新年祭

マーシャル島にも之に類するカボクキュクと稱する祭がある（エルトランド三一六頁）。島民は各自食品原料を携へて酋長から指定せられた一離島に集合する。司祭者は椰子の葉を折りたゝんで作つた鳥の形をしたものを次々に東西南北に向けて祝詞を唱へ（祝詞の文句は次にあげる）。先づ祭場地について稱辭（クタヘゴト）を述べ、次にパンダヌスの實一顆を串につき挿して西方はウルレブの神、東リォコムラン神、南リォレク神、北ラシブイネアンムエン神に捧げて風雨時を得んことを祈り、一個のパンダヌスの實を割つて海に撒き散らして大漁を乞ひ、他の一個のパンダヌスの實を土に埋めて果樹の生育を祈禱する（各祝詞がある）。終つて各自が將來した食品を調理し、別火で炙いたものを極めて少量に分割し、パンダヌスの葉で作つた舟にいれて四方に流す。翌日參列者は祭場から居村にかへり、口々にエ・テロン・エケク（神が外海から來た）と唱へて、其持歸つた食物のうち串に挿した魚と生のパンの實とを婦人に與へる。之に續いて魔術者（キジタンラン）によつて行はれる豐作、大漁のマジナヒがあるが、其は本來祈年祭とは別ものであつたと思はれるから、第七目に於て述べることにする。此祭は單に豐作多雨を祈るばかりではなく、魚と鳥との群が多く集り、海嘯（ツナミ）が來ぬやうにと祈願するものである。

司祭者

私は此等の祭祀の主要行事について觀察を試みるに先ち、之を司宰するものに關して一言する必要があると思ふ。現在ミクロネシア諸島にはトンガ、マルケサス等に於て見るやうな高貴、有力な祭主（拙著「太平洋民族誌」參照）は存在せず、世襲司祭者もないやうであるが昔はポリネシアと同樣に此職は民衆（氏子）の代表者であると同時に、神の代表者たる二重人格を備へて居たと信ずべき理由がある。クサイ島のトケサ（又はトコサ）といふ語は島王といふ外に神といふ意味をも表現する（バスチアン）といふ說が誤でないとすれば——キットリッツは「聖者」の意であらうというた——舊時島王が神齋として祭主を兼ねて居た證據とするに足りる。ポナペの司祭チャマラウ又はシャモロウがチャモロ語のチャモリと同原の語である

のは推定に難からぬことで、マリアナ群島に於てはチャモリは平民の上に位した一階級の稱呼として知られて居る。恐らくは中央カロリンのサモル（酋長の義であるが、舟長のことをもサモル・エン・ウァといふ）、マーシャル群島中ラダク列のタモン（酋長）も之から出た語で、昔日の祭政一致を語るものであらう。モルトロック島の司祭（フォレーアヌ）は酋長の兼任で（フィンシ）、ヤップ島に於ても同樣であつた（パスチアン）。但しカンに奉仕する巫祝カン・ムナテクは世襲の神職である（「南洋風土」一二八頁）。セムペルによればパラウ島アイブキト部落の酋長マズ（死亡の意）は祭事をも主宰したといふことである。ヌクオル島の司祭（マカイス）の長は常に住民中の最年長者が選まれるので、在職年限が短く、ウァウェの渡來以後クバリーの頃までに既に二百代を算したと同人は報告した。スペイン人の舊記によればグァム島の司祭は婦人に限られて居たといひ、ポナペのレイアプ（シャマロウに次ぐ高級司祭）は婦人の任で、パラウのケクラウの婦人團中にも司祭（カリズ）があつたことをセムペルは記錄して居る（S九九頁）。他島にも女祝、女巫が現存し、若くは存在した形跡のあるのは母系氏族制の行はれた此群島では當然のことである。

女祝

司祭者の任用

司祭が血統又は身分によつて選ばれるといふことは祖先信仰に在つては自然の順序であるが、古い習俗の遺風たる祭式が一般人に不可解になるに從うて職業的司祭が現出するやうになつた。しかも祈禱託宣の外に加持禁厭の法を行ひ、或は卜占、啓示、呪詛、調伏等を業とするものが現はれて神主の位置を奪ひ、司祭と巫覡乃至魔術者との間に判然たる區別を立てることが不可能になつたけれども、尙司祭者本來の職分は神と人間との仲介の外はないのである。

バラウ島では司祭者（コロン又はカリズ）は神がみづから選ぶものとせられて居る。卽ち神がかりがあると信ずる人は進んで其職の候補者と名乘つて社に參籠する。神主は之に食物を給して神がかりが一時的のものか永久性のものであるかを試驗する。託宣（ボドコル）等によつて神意に適うて居ることが證明せられた場合には今までの神主は之に職と肩書とを讓つて引退し、新神主はテルギュル（神社）に移り住む（タバリー）。ポナペのロンキチでは司祭となるには修業を積み試驗を受けることを要する（フィンシ二四六頁）。他島の司祭者選任の方法は詳でないが、大方之に類するものであらうと思はれる。

司祭者の任用

祭の行事は祝詞、供物、歌舞、競技、宴飮等に分たれる。上に擧げた二、三の例に於て見るが如く、祭典は繁閑區々であり、古式の絕えたものも少くはないやうであるが、神を祭るといふことは神の好むものを捧げ、神の耳目を娛ませるやうなことを行ひ、神の語を以て其祈請、報告せんとする所を宣り、要するときは神の啓示又は託宣を受ける爲である。其故にとりわけて祝詞が大切なものとせられて居たのであるが、上記サイパン島に於けるカロリン人の新年祭のやうに、其さへも傳承が絕えて日常の語でいふことがあるが、マーシャル島には尙祝詞の型が殘つて居る。エルトランドによれば上揭の新年祭に用ひる祝詞は次の通りである。

祭の行事

（上記椰子の葉で折つた鳥を東に向けて）

此は島々の贄を受ける爲に東に遣はされた鳥である。

遙にビキニの島に飛んで、其處を翔け廻り、其處を見下ろし、其處をさがした

祝詞

其處には何ものを見出さぬ。

（次々に二、三の島名をあげて同じ文句を繰りかへした後）

ウジャエ（祭を行うて居る土地）の島に飛んで來て
其處を翔け廻り、其處を見下し、其處をさがした所が、
其處にあるものを見つけた。

（右の如く唱へながら蕁麻（イラクサ）の枝で鳥をたゝき、パンダヌスの實を串につきさして西の方に悠々と進みいで）

此は西方ウルレブ神のパンダヌスの實である。
西へ持つて行け、西へ持つて行け
ウルレブ神の社の前に置け。

（東、北、南の神にも同樣の祝詞をあげた後）

大雨降れ、椰子の天氣
村雨降れ、パンダヌスの天氣
夕立降れ、パンの實の天氣

（と唱へてパンダヌスの實を東方に投げ）

廣野の鳴、彼處に投げよ

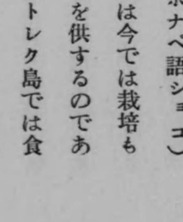
（と宣る。此外にも大漁を祈る式がある）

私が之を祝詞（ノリト）と譯したのは其が古語であるのみならず、聯句より成る詩形を備へて居るからである。定まつた文句であつても型によらぬもの、又は祝詞の一部分と思はれるものは之を唱文又は呪文として區別する。其が多くはカジ（加持）、マジ（禁厭）に用ひられることは後節に說く通りである。ボナペでも祭祀に用ひる語は全然別種であると報告せられて居るのは（バスチァン）祝詞をいふのであらう。

供物

供物の主なるものは食物で——神酒卽ちカヴァ酒を用ひるのはボナペのみで、ポリネシア風俗を學んだものであらうと思はれる。同地の傳說によればカヴァ（ボナペ語ショコ）種苗はクサイ島から得たといふことであるが、クサイでは今では栽培もせず、之から酒を造ることもない——常人の用ひるものを供するのであるが、唯初ものは先づ神に捧げることを例とする。ラモトレク島では貧事の度毎に初穗を取りわけ、カ・トウトブ・アライ（神に獻る）と唱へる。神饌を盛る爲にパラウには第一六圖のやうな木製の高坏があるが、木、土器工作の發達せぬ他の諸島では上記マーシャルのやうに串に挿し、或は木の葉に盛り又は直接地上に置くのである。食物の外に島民の日常需要品及裝身具の類、例へば布帛、姜黃根、鈎（ファリパ）、斧、腕輪の如きものをも幣進し、其或ものは神寶として保存せられた。ファイス島の傳說によればマチケチク（此島を海底から釣り上げたと稱せられる神）がウルチ群のファラロブ島に赴く途中に於て失うた鈎（ファリパ）はファラロブ島民によつて發見せられ、ヤップ島の某地に將來せられたが、其地の

第十六圖

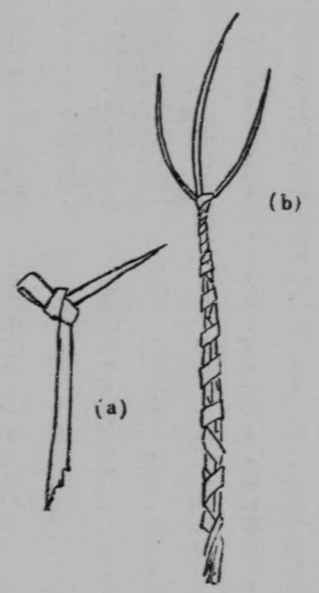


神寶

酋長と結婚した一婦人によつてガッサパル（ガチャパ）に移され、同地の司祭者が大切に保管して居る。此鈎がなくなると、ファイス島は再び海底に沈沒する筈であるので、止むなくヤップ島王の支配に甘んじて居たといふことである（バスチアン）。これはファイス及ウルチがヤップの附庸となつた由來を說明する神話で、ウルチ島では神の名をイスセリ姫とよび、ヤップに匿された神寶は斧であるといはれて居る。我國のヌサに類するものを手向けることはパラウ島で行はれて居る。其はチアクル（第一七圖a）及ペルドヘブス（同b）とよばれ、椰子の葉を圖の如く結んだものである。之がアウドウド（珠）代用と看なされて居る所を見ると、昔日は珠玉をも幣としたのであらう。

幣（ヌサ）

第十七圖



舟が神靈の宿と看なされることは前目に述べた通りで、ポナペ、パラウ等で神の舟と稱せられるものが酋長の公舍又は共同屋の梁の上に收めてあるのであるが、ナンマタールの遺跡で每年擧行するアルブン・エラブの祭（後記參照）の際其年の新造船を悉く漕ぎ出して淸祓を受けるといふのは本初神に舟を捧げた遺習であらう。

生物は贄としても或は神物としても、奉獻せられることは今では絕無のやうであるが、上記の如く禽鳥魚蟲が其々神象又は神使と見られて居る所を見ると、之を捉へたものが神の在所（アリカ）に之を放つことも有り得べきである。鷄が各地に於て神鳥と見なされ、パラウ等では軍神の使として勇武の表彰とせられて居るのは昔日此鳥が神事に用ひられた爲ではあるまいか。チャモロ人及モルトロック人等の間には鬪鷄の遊が早くから知られて居たやうである（後篇第七章參照）——鬪鷄は我國でも古來行はれた神事で、吉凶をトふことを目的としたが故に之をツゲ（告）と稱へた（鬪鷄の字音とするは誤である）。一四七八年八重山群島に漂着した朝鮮人の口供によれば、與那國島で鷄肉をも鷄卵をも食用とせぬにも拘はらず之を飼育して居たとあるが（成宗大王實錄）、恐らくは神事に用ひられたのであらう——家畜は皆西洋人の渡來後輸入せられたもので、ミクロネシア土產としては雉も山鳥も居らぬやうであるから、家鷄（又は野鷄）も外來種であることは疑はないが、マーシャルの如きは犬、豚、山羊等がチャミソによつて始めて輸入せられた當時、鷄のみは既に野性に復したものが二三のアトルに於て發見せられたといふことであるから、白人出現以前から存したものとせねばならぬ。一八七一年から七三年までグァムの大守であつたイバネズ・イ・ガルシアのマリアナ島史によれば昔の女祝は生贄として豚、牡牛及時としては奴隷を屠つたとあるが、上記の如く歐人來着以前には獸畜は此島に居なかつた筈であるから此記事は信用ができぬ。ポナペには舊時人肉食用の蠻風が存したと傳へられて居るけれども——若し事實とすればカヴァ酒と共にポリネシアから傳來したものであらう——神に人肉を捧げた形跡はない。但し舊信仰の結社（シャマラウ教社）に屬するものは

獻髪

社友が死んだとき髪を切つて其墓に供へた（バスチアン）。カベザ・ペレイロによれば此風習は血肉のものに限り、男子は髯、其他の部分の毛髪を束ねて切り、婦人は唯後頭部から少許切りとるのみであるといふ。此も亦一種の供物と見るべきであらう。

神樂（カミアソビ）

舞踏が祭の重要行事の一であつたらうといふことは既に述べた通りである。ルクの踏の中にアウアヌと稱へられるものがあるが、アウアは崇拜、アヌは神の意である。次目に掲げるやうに護符の名殘であらうと思はれる棒又は櫂を手にして踏るのも其が爲である。さりながら島民自身も踏が神事であつた事を忘れ、娯樂の爲にするもののみ考へて居るやうであるから、茲に之を述べることを止めて後篇第七章娯樂の條下に說明を讓る。——之に伴ふ歌樂もまた同所に併記する——踏の中には房事を眞似たやうなものもあるが、一概に淫靡な風俗と貶してしまふことは出來ぬ。昔の神達のうちには此やうな踏をことの外賞美ましたことも有り得た筈である。ウズメの命は天窟戸（アマノイハヤト）の前ですらも甚不作法な姿態を演じたと我國史に明記せられて居るのである。

後篇第七章に說くが如き角力、綱引、競舟のやうな競技も亦本初は祭の行事ではなかつたらうか。鬪鷄が神事の名殘であらうといふことは既に述べた通りで、クバリーの報告によればボナペのマタラニムの祭には競舟が行はれたといふことである。其はアルブンエラブと呼ばれ、毎年五六月の交、ナンマタールの廢墟中神社に充當せられて居るナングトラ（クリスチャンはナンカタラであると記した）で行はれる祭で、此地の住民は對岸のクフィネルといふ地に集合し、神酒（カヴァ酒）を飲み、踏を行うた後、各自舟に乘つて歌を謠ひながら競漕してナングタラに向ふ。其地には大酋長が司祭を伴うて先着して居り、槍を建て入口の標識とする。群集は其左方に座を占め、大酋長及司祭のみが中央の神社に進み、右側には其日の供物を山積する。是に於て莊嚴な祭式が始まり、カヴァ酒を造つて其初垂（ハツタレ）を神に捧げ、次で大司祭（ナラムム及マナプシ）に獻ずるといふことである。競舟の遊技はマーシャル、パラウに於ては現在でも行はれ、昔神々が或る島に早く渡りついたものを王とするといふ約束の下に競漕した所が、最後から出發したものが其人德によつて神の助を得、帆といふものの用途を學んで先着したといふ話がある（後篇第五章參照）。ギルバート島では特に競漕用の輕舟を作るが（後篇第七章第一六〇圖參照）、他の地では日常の舟を競技に用ひるのである。

豐樂（トヨノアカリ）

祭には大饗宴を伴ふことを例とするが、ボナペの外には催醉飲料を用ひぬから——椰子の花梗から搾取する酒があるが、醉を發するまでには用ひられぬ（後篇第三章參照）——我國で見るやうな祭らしい氣分は出ぬ。ボナペでは上記のやうに神事には必ずカヴァ酒を供へ、其餘瀝を——頗る多量に——分けて飮むことが常例である。カベザ・ペレイロの報告によれば接客又は日常の酒宴にも次のやうな嚴重な作法があるといふことである（C一二一頁以下）。

酋長は正面中央に座を構へ、其左に酋長の妻及重なる頭目の妻女が身分の高下に從つて居ならび、右側には首席頭目を始めとし男子が婦人と同樣の順序に着席する。飮料は豫め特別の容器に盛り、下級頭目の一人が或る儀式に法つて之を酋長に捧げ、酋長は之に口をつけた後、首席の頭目にさし、かく

して順次に手から手に渡る。最初の銚子を飲み盡した後、他の容器を持ち出し、酋長、其妻竝に頭目と其妻女とは必ず一獻をうける。爾餘のものも飲むけれども常に座席の順位に從ひ、銚子を代へる毎に先づ酋長に獻げられる。其は形式だけで、多くの場合酋長は口を觸れず、順番に當つて居るものに之をさすのである。接客の場合には先づ來賓に獻じて敬意を表し、鷄、豚、果實等の肴を薦める。

私は之を以て祭式の名殘と見るものである。神に酒を供することがカヴァ酒輸入以後に始まつた行事であるか、或はミクロネシア人の遠祖の遺風がカヴァ酒を得て再興せられたのであるか、私は之を明にし得ぬ。

五　託宣卜兆

祭祀の目的は上述のやうに大部分神の教を仰ぐことにある。神意を聞く方法としては神がかりをした人から託宣を受けるか、兆象によつて之を卜することの外はない。昔は生人と神との間が今日よりも遙に接近して居たので、民衆の多くが直接神の聲を聞き得た——と信ぜられた——であらうし、祭主は隨時神の聲咳に接し其意を受けるものと信じて疑はれなかつたのであらうが、世の降るに從ひ神と人との緣が遠くなり、啓示を仰ぐことが困難になつた。其故に神がかりの術を習得したもの、司祭の職を取つて代はり（パラウ）（前目參照）、或は司祭の外に託宣を專業とする神おろしを生じた（ポナペ等）（後記參照）、血統身分による祭主は恰も我國の神官のやうに儀式に携はるのみで信仰上には無勢力となり、丹波市、薗部の妖婆の輩が俗衆の尊敬を一身に集めて居るのである。此神おろしは占（ウラ）を釋くことを兼業とし、カジ（加持）、マジ（魔術）をも行ふことがあるが、國語には之を言ひあらはす語がないから、私は假に巫覡（フゲン）と稱へる——巫覡といふ漢字の原義は司祭であるかも知れぬが、史記列傳中にも「濁世之政不レ遂二大道一而營二干巫祝一信二機詳一」とあり、左道を行ふものを巫とよび、其男性のものを覡と稱へたやうである。

巫覡

マリアナ島には昔から巫（女祝）があつた。上記イバネス・イ・ガルシアのマリアナ島史には女祝は病人の顏面に生贄の血を塗り、其內臟を以て豫後の吉凶を卜したとある。バスチアンによれば此職をマカーナというたとあるから、後記のカカーナと同じく、カーナ（ヤップ語カナンは護符を意味する）から出た語であらうと思はれるが、今ではカカーナは魔術者の意にのみ用ひられて居る。ヤップ島にはウル・ウレグ又はマチャ マチと呼ばれる二名の覡長があつて多くの巫覡を指揮し、卜占、託宣等のことを掌る（クリスチャン二八九、二九〇頁）。マチャ マチは禁忌の意にも用ひられる語であるから、恐らくは其一身がタブ（第八目參照）であることを意味するのであらう。ボナペでは巫覡をカテンアニ（神おろし）といひマーシャル島ではリ・カナン（上記のカーナと同語であらう）又はリ・ジョウ・ボエ——リ（女）、ジョウ（君）、ボエ（卜占又は魔術）と稱へる。

神おろし

神の啓示を受ける爲に神がかり又は神おろしをするのであらうと思はれるが、其方法及光景については詳報がない。パラウでは上記のやうに託宣者（コロン又はカリズ）が神の家の一區劃內に籠り、蒿、帷、

又は板仕切を隔てて參詣者に對するのであるから、其内部で如何やうなことが行はれて居るか知るものはない。勿論託宣者は之を漏さぬのである。ルクの神おろしは呪文を唱へて瞑目して居る間に神がかりになり、早口に神の啓示を說く。其は病源を明にし、之を癒す爲には所有の椰子園を何某に讓れとか、西の方にあるパンの木を切れとかいふ類である。重病人に對しては快癒の見込なしと斷ずるのであるが、之が爲に病人を落膽せしめ却つて死期を早めることがある（支廳報告）。モルトロックのアウ・ナ・ロアル（神の口）は地上に蹲坐して手を以て腓を摩で、自體を搖つて呪文を唱へて居るうちに無我の境におちいる（クバリー）。エルトランドによればマーシャルの巫は夜間人里離れた小舍に籠り色々の歌をうたうて神靈を招くといふことである。

椰子占

右の外卜占及吉凶判斷も亦神意を知る方法である。西部カロリンに於ては椰子の葉を以てする占法が一般に行はれて居る。サイパンのカロリン人は之をアゲレギリ、シュプ及ボエの三種に分ち、之によつて占者をサウ・アゲレギリ、サウ・シュプ、サウ・ボエと稱へる。——サウは術者又は方士に該當する語であるが、ボナペ語のシャウ又はチャウと同じく原義は「君」といふ意であらう——其方法は次の通りである（支廳報告）。

第十八圖

アゲレギリ。　ヒビスクスの皮、パンダヌスの葉又は稀に椰子の葉を取り、之を細く裂いたものを二つ折として兩端を結び合はせ、更に之を二つに折つて第一八圖の如く結び、折目（a）を兩脚（b）の間に挾み、呪文（語意不明）を唱へながら之を地に投げ、其狀態によつて

占ふ。

シュプ。　椰子の葉脈を取り左手の四指（拇指を除く）を揃へ、其幅に繰かへして折り、終端が四指中のいづれに達するかによつて占ふ。

ワラボエ

ボエ又はウラボエ。——報告には自らの爲に行ふときはボエ、他人の爲に卜するときはウラボエといふと註してあるが、此ウラといふ語は「謂」の意で、邦語のウラ（卜占）も之から出たのではあるまいかと思ふ。ブエといふ語は未來を意味する接尾語にも用ひられる——椰子の新葉を取り之を左の手に持ち占ふべきことを口裡に唱へながら（例へば今日は何處で魚がとれませうかといふが如く）、葉を裏向にして右の手の拇指と食指との爪で葉の右端から中骨を除き四條の葉片を裂き取り（中骨の各側に於て二條宛）、各條に出來るだけ多くの結び目を作り、左の手の小指と無名指との間に第一條を挾み、順々に指の間に挾んで彼此取ちがへぬやうにする。さて再び占ひ事を唱へながら、第一條を取つて結び目を四つづつ數へのけ、最後の端數がいくつであるかを記憶し、第二條の結び目をも同樣に數へて端數を得、第一條の端數と組み合はせて一卦とする。之によつて得られる卦數は言ふまでもなく十六であるが、其を次の如く呼稱する。

卦名

第一條の端數	第二條の端數	卦　名
一	一	テリフォグ（九）
一	二	ソウペス（四）
一	三	リ　プ　ル（五）

五　託宣卜兆

一	四	ブゴロマル(一二)	
二	一	イルバイ(一四)	
二	二	イラーマル(一五)	
二	三	ミセウグ(一一)	
二	四	イリンメル(一六)	
二	一	ラガパラル(一三)	
三	二	マーノ(七)	
三	三	タウラプ(一六)	
三	四	リソロワル(八)	
四	一	イリファル(三)	
四	二	イリファオ(三)	
四	三	ボエンアグ(一〇)	
四	四	シェグイヤ(一)	

右の名稱は十六人の定員を有するウァ・サラクといふ大舟の配員の稱呼から出たもので、舟人は第一九圖の如く占位した――番號は卦名の下に括弧内に記入したものに相當する――(1)は舟長（多くは酋長）、(2)は物見役、(3)は舵取である。

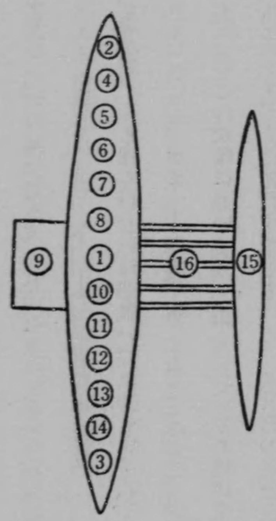
次に第三、第四條を以て前回と同樣に數へて第二の卦を求め、此兩卦を組み合はせてウラ（兆）とする。即ち二百五十六の卜兆があるわけで、其稱呼は一、二、三、四をソウベス・リソロワルといふが如く、當卦名と後卦名とを續けて呼ぶのであるが、左記の場合にのみ特別の稱呼を用ひる。

一、一	一、一	ウルサン・テリフォグ
二、二	二、二	ウルサン・イラーマル
三、三	三、三	ウルサン・タウラプ
四、四	四、四	ウルサン・シェグイヤ

是によつて此卜法をボエ・ウルスと稱へる。

卜斷の原則は略〻次の通りである。

シェグイヤ（一）――以下簡約の爲、番號のみを以て卦名にかへる――の卦先に出で、他の卦之に次ぐときは吉、其反對は凶である。其は舟長から聲をかけて他が之に應ずるが順當で、配下が先づ言ふことは非禮であるからである――我古傳說に女人先言不良（ダタラッハメ）とあるのを思ひあはすべきである。

（二）（四）（五）（六）（七）（八）は第一九圖に於て見るが如く胴の間の前方の座席で、（一〇）（一一）（一二）（一

第十九圖